今日のソ連邦

1978
1
1.1.



宇宙の声を聴く大電波望遠鏡

ソ連の極北地方開発

家庭の幸福とは?

今日のソ連邦

第1号　1978年1月1日

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……1200円

1年分送料……2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



新年のごあいさつ（ポリャンスキー駐日ソ連大使）…… 2

ソ連のお正月…… 3

マイホームの幸せとは？（座談会）…… 6

〔科学技術〕 宇宙に耳をすます大電波望遠鏡…… 12

一九七七年を顧みて（M・エフィーモフ）…… 18

トレチャコフ美術館名画シリーズ① 〝名画との対話〟展始まる…… 19

釧路に日ソ友好貿易会館がオープン…… 20

貿易と友好の目的は一つ（立花忠臣「日ソ貿易」取締役にインタビュー）…… 22

〔イデオロギー問題〕 民主主義の拡大をめざす新憲法（K・カラショフ）…… 24

〔作り話と現実〕 生活水準と明日の生活への安心感（A・グーベル）…… 26

〔特　集〕 **タイミル半島　風土と人間**

Ⅰ　なぜ極北地方に住むのか？…… 28

Ⅱ　極北の暖かい首都ノリリスク…… 30

Ⅲ　北方女性のたくましさ…… 37

名道化師カランダーシュ…… 42

一九一七年――この年は永遠に残る！（日本勤労者代表団員は語る）…… 46

東京バレエ団の新作『かぐや姫』…… 48

ソユーズ26号、サリュートとドッキング…… 49

〔国内問題〕 一九七七年のソ連農業（ゴリツォフ農業次官に聞く）…… 50

〔オリンピック・ニュース〕 オリンピックTV放送の準備／新人台頭のソ連水泳界…… 52

〔スポーツ〕 世界の上位に挑むボドレゾワ…… 54

〔ソ連の視点〕 期待過剰から冷厳な現実へ――ソ連専門家の見た米中関係（V・ルーキン）…… 58

〝私は証言できます……〟（赤城　宗徳・日ソ親善協会会長）…… 60

堀江邑一氏に肖像画の贈り物…… 61

東海大学にソ連図書の寄贈…… 61

〔人間と自然〕 ダーウィン博物館の少年サークル…… 62

ロシアのお正月料理…… 66

〔文　学〕 コンスタンチン・パウストフスキー（E・シードロフ）…… 68

〔短　編〕 軟　風（K・パウストフスキー）…… 69

〔映　画〕 心の純粋さを描いた喜劇『ミミノ』…… 73

ロシア語のページ…… 76

〔文化と芸術〕 よみがえる古建築物…… 77

〔トピックス〕 トルストイ博物館に新しい展示品(10)／ソ連のバレエダンサーにダビデ賞(11)／太平洋の〝百科事典〟(17)／ナホトカ湾の電算機(23)／タシケントの地下鉄開通(24)／天才少年指揮者(25)／北海の大ウミガメ、ソ連映画に大賞(27)／世界最高の奇術師(59)

表　紙　モスクワのクレムリン（カメラ　N・ドラチンスキー）

ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2－1－1　電話(583)4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3－9－13
郵便番号141　電話(03)447－3536(代表)
振替口座東京9－122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）



新年のごあいさつ

親愛な読者のみなさん!

一九七七年は終わりを告げました。ソ連国民はお祝いのテーブルにつきながら、よい気分でこの年を見送っています。去り行く年は、10月社会主義大革命60周年記念の年として、発達した社会主義の主要な特徴が反映されている新しいソ連憲法の採択の年として、ソ連国民の記憶にとどまるでしょう。

ソビエト経済のすべての部門が高い安定したテンポで発展し、それにもとづいて国民の物質的・文化的水準が高まっています。わが国は、いま、巨大な経済力と科学技術力を持っています。現在、われわれは、四半世紀前に全世界が生産していたより多くの工業生産物を生産しています。工業総生産高で、ソ連は、こんにち、確実に世界第2位を占めています。

ソ連国民は創造的な労働にたずさわり、雄大な社会・経済建設計画を遂行していますが、その実現のためには、平和が必要です。

60年間にわれわれが通ってきたすべての道は、ソ連が戦争に反対であることを納得のいくように物語っています。ソ連は、軍拡競争を停止し、新しい大量殺りく手段の開発を禁止し、軍備と兵力の削減、軍縮に着手するために全力を尽くすよう呼びかけています。

ソ連国民とすべての平和愛好国民の努力の結果、すでに顕著な国際緊張の緩和が達成されていることを満足をもって指摘することができます。ソ連が遂行する平和共存政策は、国家関係の実践でますます広く利用され、経済、貿易、科学技術、文化の各分野にわたる互恵的交流の発展に、広い可能性を開いています。

これら積極的傾向の発展の面で、ソ連は対日関係に大きな意義を認め、両国関係を信頼、好意、協力のふんい気で包むように切望しています。双方の努力の結果、両国関係を新しい基盤の上に置くために、多くのことがなされたことを、満足をもって指摘することができます。

貿易・経済関係は重大な発展をとげました。ソ日貿易の総額は三四億ドル以上にのぼりました。科学と技術、文化とスポーツ、展覧会の相互開催などの各分野で、交流は広範な規模に達し、労働組合、青年団体、その他の社会団体の線で接触が強化されました。

日本の対ソ友好諸団体の活動は、両国の善隣関係の発展に大きく貢献しています。これらの団体の努力によって、多くのソビエト国家60周年記念の催しが行われ、日ソ友好のための会館がいくつも建設されました。

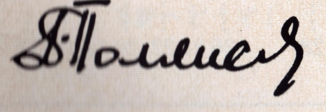
私たちは、これらすべてを、ソ連国民にたいする親善感情の現れと見ています。

私たちは、両国関係にはまだ利用されていない大きな可能性があるものと考えます。今後の課題は、長期の見通しに立ち、相互の尊敬と善隣関係にもとづいて、われわれ両国の関係を維持し、深めてゆくことにあります。

新年——一九七八年——を迎えるにあたり、この好機を利用して『今日のソ連邦』誌の読者のみなさん、日本におけるすべてのわが国の友人のみなさんに、ご幸福とお仕事のご成功を心から希望いたします。

駐日ソ連大使

D・ポリヤンスキー



ソ連のお正月



飾りつけた〝ヨールカ〟のもとでダンスパーティー

ソ連東北端チュコトカ沿岸のベーリング海峡の中央を通る日付変更線から、新年はその歩みを始め、時速八二五kmで4時間後には東京に、10時間後にはモスクワに到達します。

……まち全体がウキウキ。共同住宅の中庭、公園、並木道、辻広場に、おとなも子どもも一緒になって雪で町やお城を作り、おとぎ話の主人公や動物たちの雪像を作ります。街路や広場、劇場やコンサートホール、そしてほとんどすべての家庭に、ありとあらゆるおもちゃ、花飾り、ろうそく、豆電球などで飾りつけたヨールカ——天然または人造のモミの木が立てられます。もちろん、西欧のサンタクロースにあたる〝冬のおじいさん〟からのプレゼントなしのお正月なんて、とても考えられません。冬のおじいさんはプレゼントをもってくるばかりでなく、子ど



つまらなそうな顔をした
人はひとりもいない。



新年のダンスパーティー
には人気舞踊団〝ベリョ
ースカ〟も出演

もたちと語り合ったり、おとぎ話をきかせたり、一緒に遊んだり、冗談を言って笑ったりするのが好きです。

自宅で祝う新年をこどもたちのためにいっそう盛大で楽しいものにしようと、多くの親御さんたちはサービス・ビュローに頼んで冬のおじいさんを自宅に招きます。おかげで映画や芝居の俳優さんたちは二週間の学校の冬休みを通じて大いそがし。モスクワだけでもプロ、アマの俳優三〇〇人以上が冬のおじいさんに扮して、文化会館やコンサートホールのヨールカ祭りに集まるこどもたちを楽しませるのです。

何万という色とりどりの電球やおもちゃを飾りつけた一番きれいなヨールカの一つが、例年クレムリン大会宮殿に立てられます。

新年には六千人の若い男女が宮殿をいっぱいにします。各階でオーケストラ、人形劇、バレエなどさまざまな催しが開かれるのです。

（カメラ　A・カワシキン）

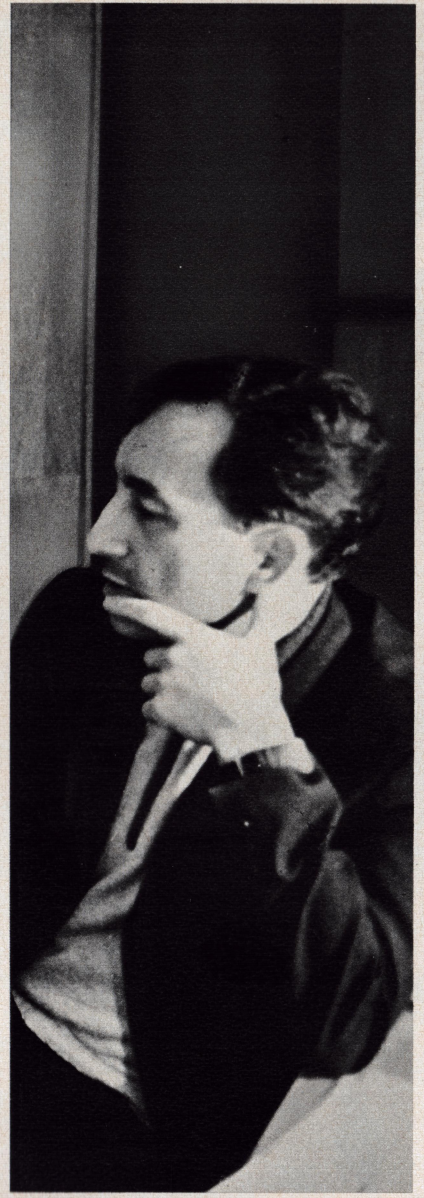


冬のおじいさんと雪娘のいない
お正月なんて考えられない！

マイホームの幸せとは?

——週刊紙『ネジェーリャ』編集部での社会学者と3組の夫婦の座談会

ユーリー・リュリコフ





ナタリア・チェルガリンスカヤ

出席者V・ペレベジェンツェフ(経済学博士候補、人口学者)、G・ワシリチェンコ(医学博士)、Y・リュリコフ(作家)。メレンチエフ夫妻(タジク出身、共に34歳、夫=イーゴリ、小児科医、妻=ラリサ、教師、結婚生活=12年、子供=9歳と4歳の2女)。プラテ夫妻(ラトビア出身、共に25歳、夫=ペチエリス、コルホーズ果樹園係、妻=ライラ、通信職員、結婚生活=4年半、子ども=3歳半と1歳の2男)。チェルガリンスキー夫妻(ノボクズネツク出身、共に30歳で技師、夫=ワレリー、妻=ナタリア、結婚生活=7年、子ども=6歳と2歳の2男)。

成功のむつかしさ

リュリコフ　もちろん、みなさんご存知ですね——幸福な結婚と不幸な結婚とがあることを。幸福な生活——これは結婚の自然な目標です。だが数年、あるいはわずか数ヵ月で幸福な夫婦の数は減ってきます……なぜでしょう?新婚当初の幸福を持続できないものでしょうか?

離婚の約$\frac{2}{3}$は、まさに結婚生活10年ないし12年未満の家庭です。だから、この座談会には比較的若いご夫妻に参加して頂いたわけです。

若い家庭は生活のいくつかの段階を通ります。第1段階は蜜月時代。第2段階は子どもの誕生。第3段階は子どもが学校に入学するまでに成長し、家庭の生活が落ち着いた時期です。

蜜月時代

ペレベジェンツェフ　残念ながら、だれにでも最初の1年が蜜のように甘い楽しいときだとは限りません。離婚者の$\frac{1}{6}$ないし$\frac{1}{3}$は、結婚後1年未満の人たちです。

ある人たちは、家庭は、まさに生まれたときがもっとも弱いと見ています。あなた方は、どのようにして自分たちの生活をつくって行ったか、お話しください。

ラリサ　私とイーゴリの場合は、友情から恋への道でした。その当時私たちは同じテレビ工場で、彼は仕上げ工、私は組立て工として働いており、工場のサークル活動で知り合ったのです。結婚まで約5年間、友人として交際していました。

イーゴリ　わたしたちの場合、すべては友情から始まったので、互いに共通の関心はいつとなく生まれたのです。たとえば、私はジャズに熱中し、工場のオーケストラで演奏していましたが、クラシックは嫌いでした。反対に、ラリサは、ジャズには関心がなく、クラシックを好いていました。しかし、私たちは自分の趣味をおたがいに相手に感染させたので、それぞれの趣味は2倍になりました。

ラリサ　性格的に私は、感情的で、自分を抑えることができず、歯に衣を着せずにものを言う場合がありました。だがイーゴリは性格的には私と反対におとなしい人です。

ペチェリス　私とライラの場合も最初は友情でした。そのころ私たちはそれぞれ別の人を愛してさえいました。その後、私が兵隊に行っていたとき、私たちは愛し合っていることを知りました。覚えているかい、ライラ、どんなふうに恋を打ち明けたか。

ライラ　あなたが休暇で帰ってきたとき、私たちはクリの木に登って……

ペチェリス　カシの木だよ。地上約14mの枝の上に腰をおろしてさ。あのときから毎年この日を記念し、シャンパンをもってあそこによじ登って、祝うことにしています。

私たちはすでに結婚前に相手の良い性質と悪い性質を心得ていました。始めのうちは彼女の移り気に悩まされましたが、私が冗談を言うと、彼女の気げんはすぐ直るようになりました。いまでは私は、ユーモアと落ち着きが小さな争いをふせぐ楯であることを知っています。

ライラ　譲り合いと夫の小さな欠点に慣れることが、幸福の主要な基礎の一つだと思います。

ワシリチェンコ　さて、あなた方が記入したアンケートを見てみましょう。こう書いてあります——一方は移り気な性質、他方は気長な性質と。その通りです。ライラは胆汁質と多血質の中間です。ペチェリスは粘液質と多血質の中間です。ラリサは、ライラと似ており、イーゴリは、ペチェリスと似ています。

リュリコフ　彼らはとても運がよかったと思います。というのは、相反する気質は時として、最もいい適合性を生み出すからです。

ついでに言えば、粘液質の人たちはきっと円満な夫婦になるでしょう。このような人たちは非常にうまくいっています。粘液質の人は多くの場合、終生一人の異性しか愛しません。だからうまくいくのです。

ナタリア、ワレリー　きっと、私たちの気質が同じだったからでしょう。始めは非常に苦労しました。

私たちは学生結婚しました。多くの共通点——読書、スポーツ、とくに旅行など——を持っていましたが、主要なものは愛情でした! しかし、一ヵ月後にはもう争いがはじまり、始めは小さな争いだったのが、のちにはだん

だん深刻な激しいものになって行きました…… 子どもが生まれましたが、ふたたび争いはひどくなるばかり、離婚話さえ出るほどでした。だが、あるとき突然、いったい、私たちは何をしているんだろうと反省しました。そして、急転回が始まったのです。

ワシリチェンコ 共通の関心はいいことですが、もしも関心がすべて共通の場合には、それは生活を貧しくしないでしょうか？ あなた方は、各人には配偶者にもあずからせない自分自身の、〈自主的な関心〉がありうるとは考えていないでしょうか？

自主的な関心

ラリサ その場合にはおそらく、すべてについてそうであるように、節度というものが必要です。たとえば、結婚後、多くの女性には夫を占有したいという感情が生じます。しかし男性も女性も自分の友人仲間を、自分自身の関心をもつ権利があります。相手の自主性を尊重することは、家庭生活の基礎の一つだと思います。

ナタリア 何もかも打ち明けるというのは、おそらく、一般的に言って異常なことですわ。

ライラ いいえ、私の考えでは、愛情とは、ちょっとしたことでもその人には隠しておけないという感情だと思います。私は夫には何もかも打ち明けています。

イーゴリ もちろん各人は自主権をもっていますが、いつでもこの権利を行使する必要があるでしょうか？

リュリコフ もちろん、心の世界の融合が深ければ深いほど、幸福もより完全であるということは論争の余地がありません。しかし、そういった状況に到達しうるのはおそらく、多数の人ではありません。大多数の人々にとっては、おそらく、ある主要な関心、習慣、見解が一致するだけで十分でしょう。夫婦の親しさは相手の自主的な関心にたいする尊敬によってだけ強化されるでしょう。このような尊敬は、おそらく、幸福の主要な土台石の一つです。

不一致のなかでの一致の探求

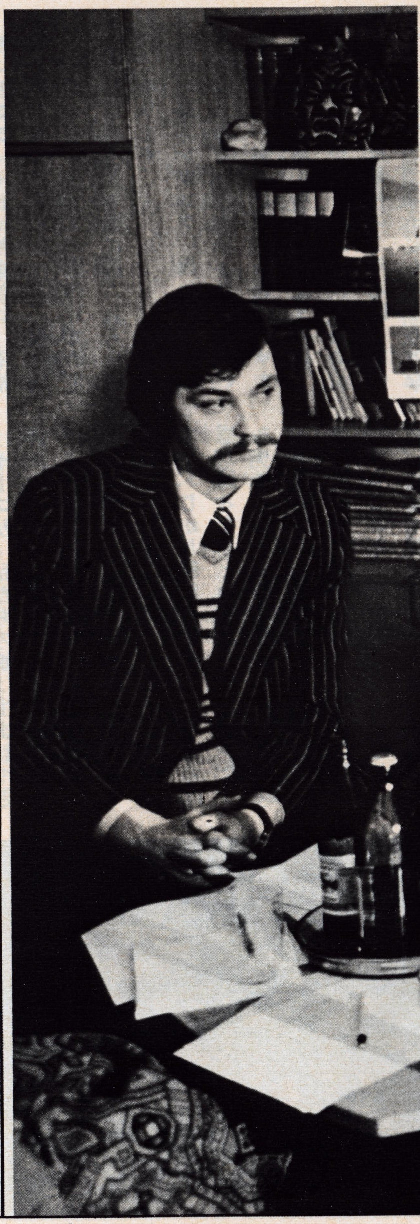
ペレベジェンツェフ 争いは多くの離婚の原因です。周知のように、否定的な経験は、肯定的な経験に劣らないものを与えてくれます。ワレリーとナタリアが、愛情の危機をどのようにして克服したかを知ることは、みんなに有益でしょう。

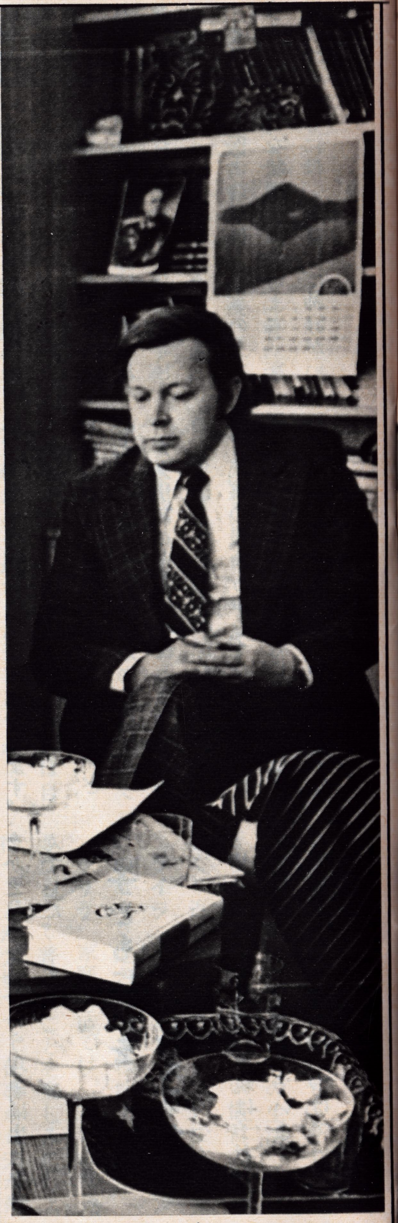
リュリコフ あなた方は、相手の欠点にたいする寛容と、きびしさとの、どちらを支持しますか？

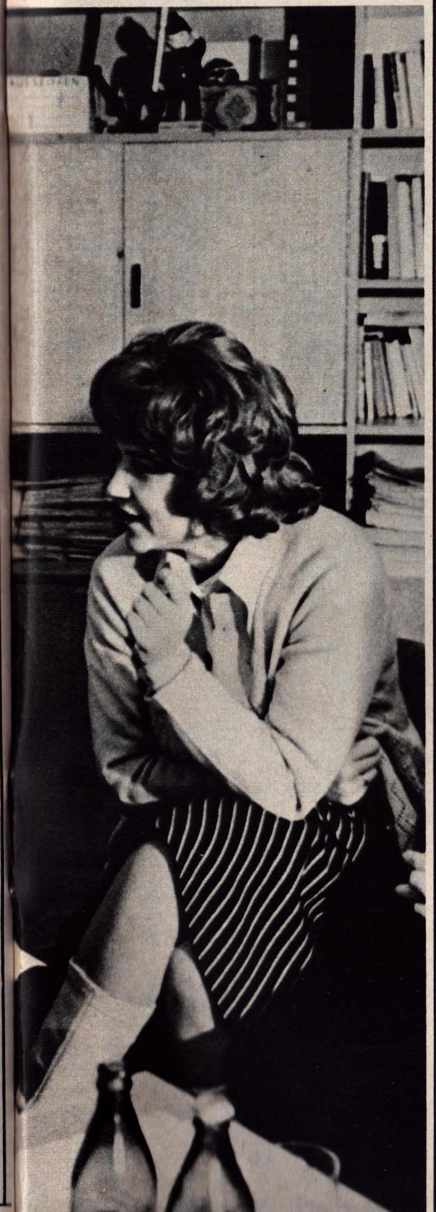
ワレリー 多くの夫婦は言い争うとき、きまって互いに相手を侮辱します。だから意見の一致を探し出すことができません。最初の数年は、私たちもそうでした。いまは、どんな場合でもお互いに相手を侮辱したりはしません。〈いつもあんたはそうだ〉などと、いぜんの失策を思い起こすことを自分に禁じており、〈だけど、あんただって……〉などと、反撃もしません。きびしい非難はただきびしい非難を呼び返すだけであることを理解しているからです。

ペレベジェンツェフ 争いの主要な原因は、いったいどこにあったのですか？


ライラ・ブラテ


ペチェルス・ブラテ


イーゴリ・メレンチエフ


ラリサ・メレンチエワ

ワレリー　新婚当時は、生涯深く愛し合い、ただもう幸福に暮らすことになるだろうと、そんな気がしていました。家庭生活にたいする心構えのこのような甘さ、準備のなさ、その本質にたいする理解の欠如に、おそらく、責任があるのでしょう。

ラリサ　私たちには、不一致はあっても、争いはありません。では、どうすればうまく、不一致を争いまでにいたらせずに解決できるでしょうか?

それは、相手を理解し、自分を相手の立場に置くことです。

争わずに

リュリコフ　われわれは二つの概念——不一致と争いを区別しています。意見の不一致はいつでも、どんな関係のもとでも見られます。争いは不一致を解決せずに、かえって強めます。争いは二重の害をもたらします——第一には意見の不一致を先鋭化し、第二には恨み、いら立ち、疎遠を生みだします。

ラリサ　感情を傷つけられると、だれでも自分を守ります。私は侮辱されたら、むしろ泣きだし、黙り通すでしょう。

イーゴリ　医者の私は、仕事の上で多くの不愉快な状況に出会います。家路につくときには、しばしば神経がいら立っています。ラリサも同じです。しかし私たちは自制に努め、いら立ちに身を任せないようにしています。もちろん、自制を失う場合もありますが、夜、子どもたちが寝入ったのち、お茶を飲みながら、それぞれの仕事について話し合います。そうすると、精神的な緊張が解けるのです。

子どもが生まれたら

リュリコフ　それは無条件に、幸福の新しい時期でもあれば、不一致の新しい時期でもあります。家の外での生活は大幅に減少し、家に縛られる生活が多くなります。

ペレベジェンツェフ　周知のように、子どもは夫婦のカスガイと言われています。だが、必ずしもそうとは限りません。結婚生活1年から5年までの、まさに子どもが生まれたこの時期に、離婚者の割合は最初の1年と同じなのです。家庭生活では子どもが中心となり、相手への相互の配慮が減少します。それがどのように作用しましたか?

自由な時間が少なくなりましたが、どのようにしてそれに耐えましたか?

ナタリア　人の子の親となった最初の1年は、外出するのがたいへんでした。読書の機会も少なくなり、芝居を見に行くことなど忘れてしまいました。自分をかまってもらえないので、夫はひどくいら立っていました。だが他方、お互いを親として見直しました。彼のうちに、こんなに父親としての能力があるなどとは、思いも寄りませんでした。

ライラ　私たちは子どもを愛していますから、互いの愛情は一層深まりました。たしかに、ある期間私に、青春は過ぎてしまったという感情が現れましたが、そのうち慣れて、消え去りました。

イーゴリ　私たちの娘は生まれつき病身でした。苦労は覚悟していましたが、予想をはるかに上回るものでした。友人たちとの交際はほとんどなくなりました。幼児にとって有害だったからです。しかし私たちの場合、相互の配慮が減るなどということは、まったくありませんでした。配慮の減少は一般的な法則だとは思いません。ラリサは母性的な感情をすべて、一般的な配慮にすることができたのです。したがって、彼女が母性の世界へ没入して、他をかえりみないという現象は生じませんでした。

子どもに何を与えるか?

リュリコフ　多くの両親は子どもをしつけることができないでいます。あなた方は、どのようにしつけていますか?

ラリサ　イーゴリは、非常に疲れて仕事から帰ってきます。私は娘たちに〈ねえ、パパをゆっくり休ませてあげましょうね〉と言います。すると子どもたちは、おとなしくしています。

リュリコフ　それは、消極的な配慮ですね。

ラリサ　姉娘のユーリャは、妹のカーチャの世話を積極的にしています。服を着せ、幼稚園に連れて行き、また連れて帰り、入浴を手伝います…

イーゴリ　私が家に帰ってくると、ユーリャは夕食を暖めなおし、主婦のようにふるまいます。彼女の私たちへの配慮は実に積極的です。

リュリコフ　特別に教え込んだのですか?

ラリサ　いいえ。私たちが互いに配慮し合い、子どもの面倒を見ており、子どもをその世話に参加させているので、子どもたちも世話好きになっているのです。

イーゴリ　重要なしつけの原則は、親切な態度であると思います。子どもを叱る場合でさえ、親のやさしい心を感じとれるようにしなければなりません。きびしい態度をとる場合でも、意地悪いものであってはならず、子どもに屈辱感を与えてはいけません。

ワシリチェンコ　私たちの子どもが大人の世界に入るとき、その準備ができているでしょうか? しつけはあまりにも〈殺菌消毒的〉な、過保護なものではないでしょうか?

イーゴリ　いいえ。子どもたちはずっと集団の中で生活しており、幼稚園、学校、またピオネール少年団のなかで善にも、悪にも出くわしています。

リュリコフ　あなた方の子どもは自分を守ることができるでしょうか?
子どもたちには自尊心が、人格の不可侵の感情がなければなりません……

ワレリー　うちでは、その点行き過ぎましてね。上の息子にサンボを教えてやったら、その手で〈自分を守り〉はじめたので、幼稚園で大騒ぎが起こりました……

家庭は重荷ではなくて喜びだ

ペレベジェンツェフ　離婚の$\frac{1}{3}$から$\frac{1}{2}$までは、結婚生活5年以上の人人です。10年、20年もの人もいます。

リュリコフ　この時期までには家庭生活も落ちついてきて、子どもたちは学校に通いだします。多くの家庭では結婚当初の恋愛的な情熱に代わって堅固な関係が生まれています。だが、残念ながら、そのような関係に達していない家庭もあります。

ライラ　以前はデートそのものが楽しみでしたが、いまはただ、二人だけになれるのを楽しみにしています。

リュリコフ　あなた方の生活では、新しい多様な変化と、古い慣習の単調なくり返しと、どちらが多いですか?

ライラ　正確に答えると、うちで多いのはくり返される多様性です。

ラリサ　家庭生活では、毎日くり返されるごく普通のことを楽しみにして待つことが大切です。仕事から夫が帰ってくるときの喜びを味わいながら、幼い娘たちのためにお祭り気分をつくり出すことができます。

イーゴリ　おそらく、家庭のなかで生活の小さな喜びを生みだし、それを大切にする能力を発展させなければならないでしょう。

＊　＊　＊　＊

リュリコフ　この座談会を総括してみましょう。おそらく、みなさんも、本誌の読者たちも、つぎのような結論に同意されると思います——幸福な夫婦生活のための万能の処方箋というものはない。しかし　だれでも幸福のカギを見出すことができる、ということです。

☆　☆　☆

トピックス

トルストイ博物館に新しい展示品

イタリアに住む偉大なロシアの文豪レフ・トルストイの孫タチヤナ・アルベルチーニ（スホチナ）さんがソ連文化省の招待でモスクワを訪れた。タチヤナさんは自分の母親タチヤナ・スホチナ（トルストイの娘）が保管していた二〇〇〇点をこえるトルストイの遺稿や手紙を国立レフ・トルストイ文学博物館に寄贈した。その中には作家のイワン・ブーニンとアレクサンドル・クプリーン、画家のイリヤ・レーピン、オペラ歌手のフョードル・シャリャーピンからの手紙がふくまれている。

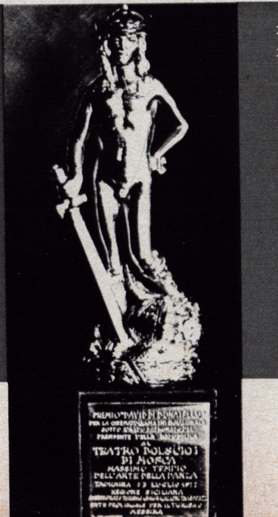
トルストイ研究家の関心を呼んだのは、トルストイの娘が14歳の時から半世紀にわたってつけていた日記。また、タチヤナ・アルベルチーニさんは博物館に家族の宝物として保存していた父親ニコライ・トルストイ（作家）の象牙にかかれた肖像画を寄贈した。

ソ連のバレエダンサーにダビデ賞

ミラノのスカラ座でチャイコフスキーの「白鳥の湖」を踊ったボリショイ劇場のソリスト、ナタリア・ベススメルトノワとミハイル・ラブロフスキーの公演は大成功を収め、彼らにはイタリアの彫刻家ドナテロの有名な作品『ダビデ』のレプリカ「ダビデ賞」=写真=が贈られた。

これまで、アルベルト・ソルジ、黒沢明、アニー・ジェラルド、ダスティン・ホフマン、スタンリー・キューブリクといった世界の代表的な監督や俳優が「ダビデ賞」をもらっているが、ソ連人がもらったのは、これが初めて。

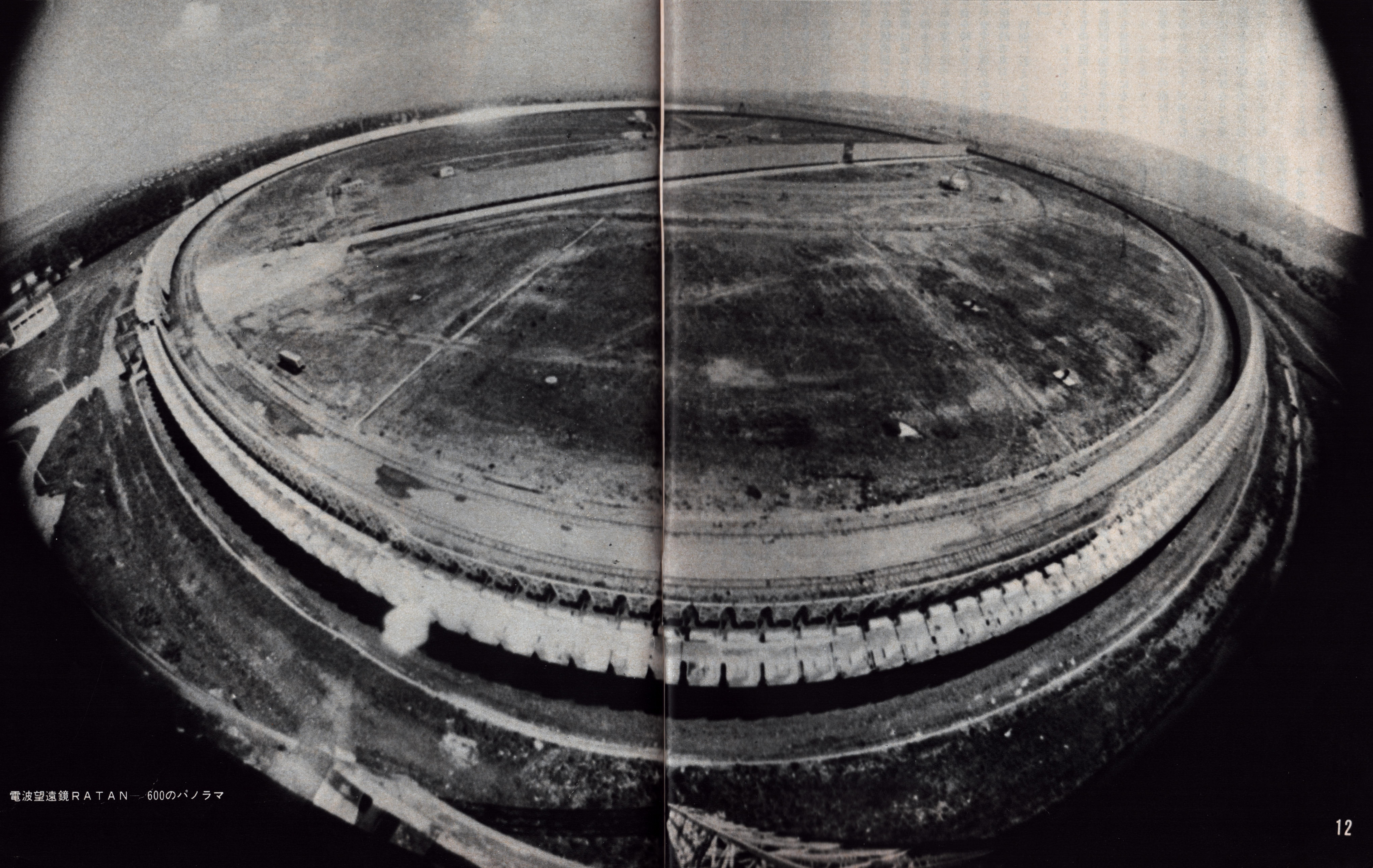
イタリアのダリオ・アントニオッチ観光相はソ連のピョートル・デミチェフ文化相にあてたメッセージの中で、「三万人の観客の前でのソ連のバレエダンサーの名演技は観客に歓喜さえ与え、劇場全体が熱烈な拍手につつまれた」と指摘している。



宇宙に耳をすます大電波望遠鏡

アレクサンドル・サモイロフ
カメラ　О・マカロフ

科学技術



電波望遠鏡ＲＡＴＡＮ—600のパノラマ



RATANの環状アンテナの一部。
宇宙から届く電波を内側へ反射する。

北カフカズのスタブロポリ地方、ゼレンチュクスカヤ村で、私は自動車の運転手にRATAN（科学アカデミー電波望遠鏡の略称）の近くで降ろしてくれ、と頼んだ。車を降りた私は驚きのあまり立ち止まった。オリンピック・スタジアムを連想させる巨大な環状の構造物が、目の前に広がっていたからだ。

山並みの青さによっていっそう際立つ銀色のパネルが太陽に照り映え、周囲を丸く囲んでいる。砂利の敷き詰められた平らなその〝スタジアム〟の中央からレールが四方へ伸びている。その軌道を、それぞれ反射板を上部に搭載した車両らしきものが動いている。この巨大な施設全体がRATANと呼ばれている。

学者たちは前世紀、すでに光り輝く天体はすべて電波も出しているに違いない、と予想していた。そして実際、現代の知識によっても太陽、恒星、惑星はすべて、電波の強さ、波長域はもちろん異なるものの、自然の無線局なのである。

宇宙の声に耳をすまし、数千年、あるいは数百万年かかってわれわれのもとに届く信号をキャッチするには、電波望遠鏡が必要だった。

電波望遠鏡は登場するとまもなく、規模の点で成長を開始した。一九五〇年代の終わり、英国のジョドレル・バンク天文台で、当時としては最大の口径76mのパラボラ・アンテナを持った電波望遠鏡が活動を始めた。10年遅れてボンでも、口径一〇〇mの巨大電波望遠鏡が始動した。残念ながら、電波望遠鏡は巨人化の道をこれ以上進むことはできなかった。地球の引力と風がその障害となったのである。巨大なパラボラ・アンテナの表面は、どんな回転をした場合にも、過度に歪んではならないからだ。

アンテナの変形をなくすために、電波望遠鏡は固定された。プエルトリコのアレシボの場合、巨大電波望遠鏡の台座となったのは地表の大きなくぼ地である。その斜面は反射板によっておおわれている。受信機はケーブルによって反射板の上に吊るされている。

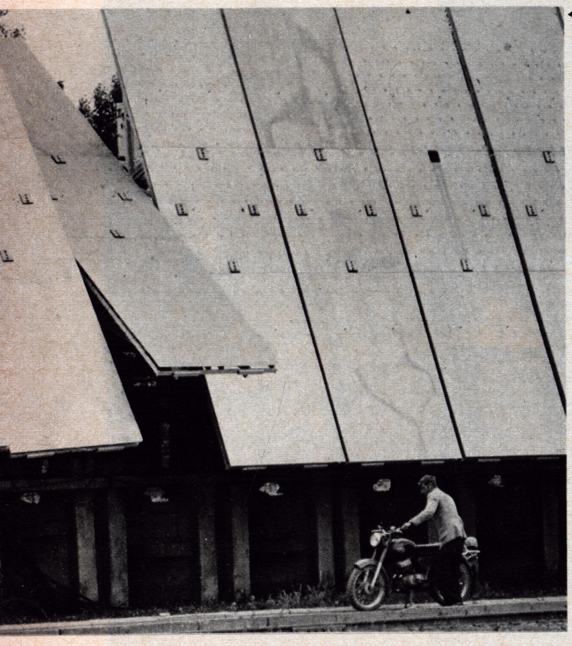
この電波望遠鏡は遠い宇宙からのごく弱い信号もキャッチできるが、その〝烱（けい）眼ぶり〟にもかかわらず、いわゆる分解能は高くない。つまり、島宇宙、恒星、惑星などで一つに重なりあった二つの対象物を別々に見分けることができないのだ。

実際、かくも大型の、巨大とさえいえる望遠鏡装置が何のために必要なのか？ こうした装置の製作者は天空のできるだけ広い範囲からの電波を一つの焦点に集めようと努力している。それによって望遠鏡の感度、〝視力〟——すなわち非常に弱い光や電波信号をとらえ、宇宙の片すみのかすかなその源を発見する望遠鏡の能力が決まるからだ。

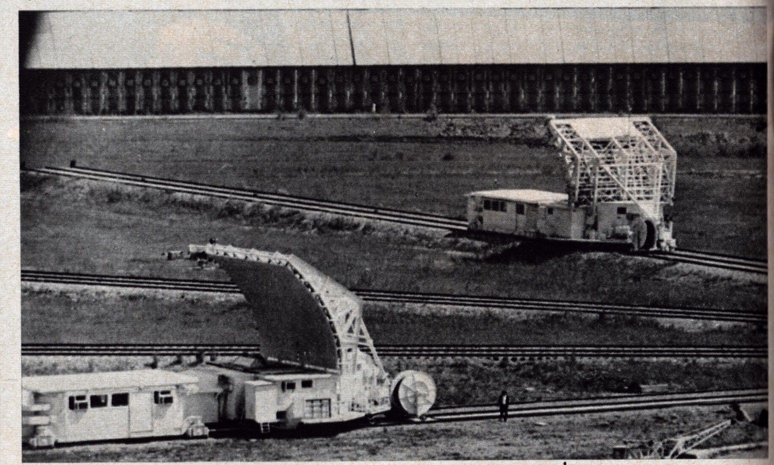
RATANを開発したレニングラードの学者たちは、工業界に難しい問題を提起した。総面積一万平方mの、しかも表面の凹凸——あらさがカミソリの刃より薄い0・8ミリの受信アンテナを製作するという課題である。そしてそれは成功した。

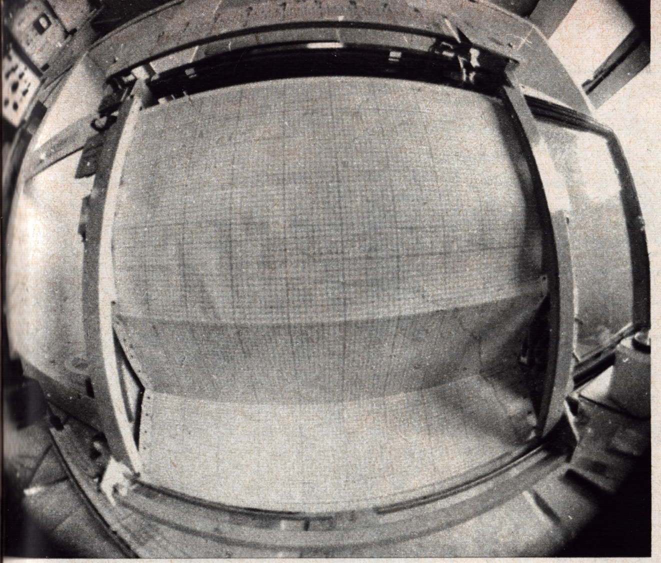
だが直径が0・5kmを超える巨大な〝電波の受け皿〟を製作するという主要な困難は

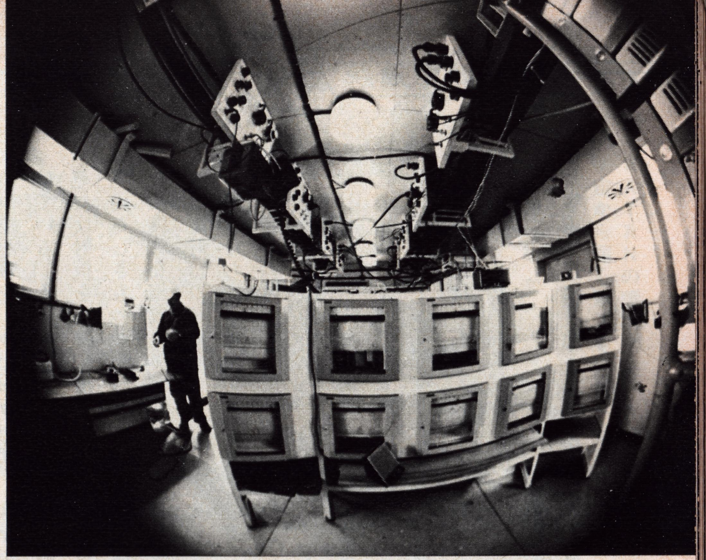
◀RATANを構成する 895枚の長方形の反射板は水平方向にも垂直方向にも、また前方にも後方にも移動できる。反射板の精度は1kmにつき数mmの単位。



RATAN— 600は4つのセクターに分かれ、必要な場合にはそれぞれが独立した電波望遠鏡として観測を行う。

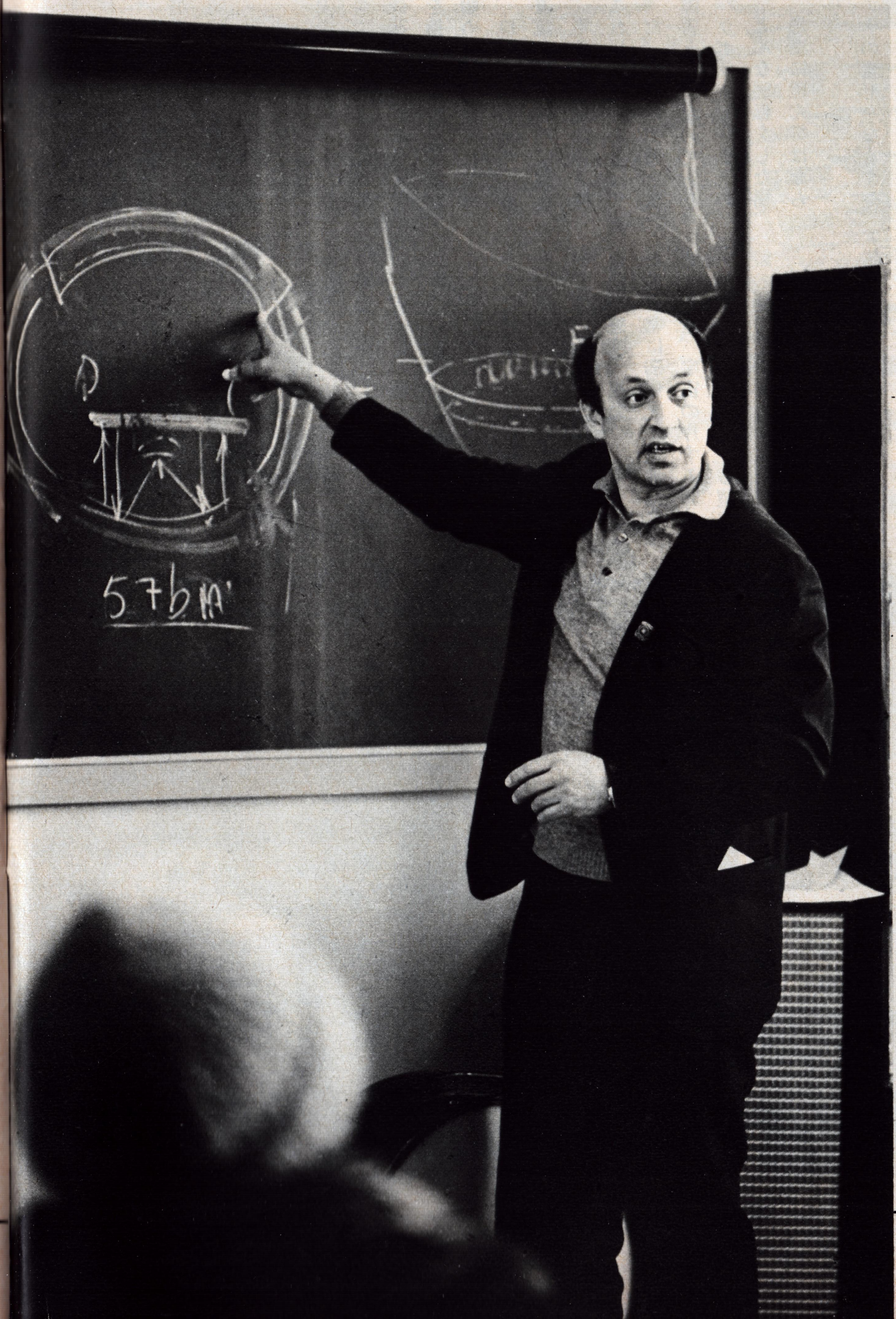






▲100万年の旅を完了した電波信号の記録と予備処理がここで行われている。

上左　宇宙を数百万年、あるいは数十億年も飛行した電波が自記記録計に書き留められた。それは宇宙について何を語ってくれるだろうか？



◀RATANにおける研究の指導者ユーリー・パリイスキー物理・数学博士

残っていた。〝アルキメデスの法則〟と呼べるかも知れないが、この古代の学者が数千枚の鏡を一枚の大きな反射鏡のように機能させることによって集めた太陽熱で敵の船団を焼いたその方法にならって、解決の道が見出された。反射式アンテナの原理がRATAN設計の基礎になっていた。

この装置のタイプを決めるにあたって、それを据えるために適当な場所の探索が始まった。いくらかの紆余（うよ）曲折を経てそれはゼレンチュクスカヤ村に落ち着いた。工

業地帯からここまで立派な道路が通じており、巨大望遠鏡の部品の運搬が容易だからだ。そのほか、ここならRATANも〝孤独〟にはなることはない、という理由もあった。同じソ連科学アカデミー天体物理学特別観測所の世界最大の反射望遠鏡が、すぐ隣の山中に設置される計画だったからだ。今日では2台の巨大望遠鏡はペアのように働いている。

RATANにとって不都合な風や電磁気の変動——電波障害から守るかのように、山々がこの場所をゆったりと抱え込んでいる点も学者たちの気に入った。

しかしこの場所も単に土台にすぎない。反射板が組み立てられる精度はまさに宝石細工なみの精巧さである。たとえば、もし反射板にごくふつうの砂粒が当たってもそれはとうてい許容することができない誤差として残り、宇宙からの電波は受信装置のある焦点へ反射せず脇へとそれてしまうだろう。

RATAN—六〇〇はすでに実働という一番厳しい試験を経験した。最初の電波を受信したのは一九七四年7月12日で、それ以降二〇〇〇回以上の観測がこの望遠鏡によって行われた。はじめは電波源の一番多い南天を観測する北側部分が稼働し始め、その後、南側の部分がそれに結合した。

単一の計算センターによってコントロールされている全部で八九五の反射板から成る環の全体が稼働するのも、それほど遠いことではない。

私は移動している3台の〝車両〟のうちの一台の屋根に立っている。それらはみな、原理的には同じタイプであるが、宇宙の異なる領域からの声を〝聴いて〟いる。私が乗っている〝車両〟は、銀河の外の一番遠い天体をキャッチできるような装置を積載しているし、少し離れたところにある〝車両〟はわが太陽系を追っている。3台目は太陽に照準を合わせている。

「RATAN—六〇〇はどうして運行している対象を追跡できるのですか？」。私はこの複雑な装置全体を案内してくれたドミトリー・コロリコフ物理・数学博士にたずねた。

「それにしても、これは三六〇度回転する受け皿ではないでしょうに」

「このタイプの電波望遠鏡は地球の自転効果を利用しています。重要なのは恒星や島宇宙などの天体が遅かれ早かれ現れるその位置を正確に選ぶことです。われわれは懐中電燈で物を探すようにしてその区域に狙いをつけ、それから後は移動反射板システムを利用して接触の時間を稼ぎます。電波信号を蓄積し、雑音の中からそれを選び出すのです」

「そうなるとこれからは新発見が期待できるのですね？」

「いや、発見はすでにあるのです。どうして〝期待する〟のですか」。RATANにおける研究活動の指導者で、有名な天体物理学者ユーリー・パリイスキー教授が話に加わった。

「たとえばわが銀河系の中心部の電波放射を研究してきた私たちは、理論家が予測していたような巨大な超重量の核を発見することはできませんでした。それどころか、銀河系の中心部にあったものは固体でなく、ガスでした。このことは、太陽もそれに属する恒星アソシエーションの本質にたいする若干の見解を変化させるでしょう」

トピックス

太平洋の〝百科事典〟

1974年度のソ連国家賞を受賞した全10巻のモノグラフ『太平洋』は、太平洋の全貌を総合的に記録した世界で最初の試みである。ここには物理学も化学も、地質学、生物学等々も網羅されている。この研究の主導者となったのはP・P・シルショフ記念ソ連科学アカデミー海洋学研究所だが、資料の収集には多くの学術機関に所属する探検隊、学術調査船が参加した。

このモノグラフは重要な実際的価値を持っている。そこには海流や波の様子が記録され、航海士に少なからず役立っている。海の生物の食物連鎖、魚の食生活、海洋における生活組織が研究されていて漁業者にも役立つ。モノグラフには海水の動きや低気圧発生についてたくさんの興味深い事実が紹介され、気象学者にも利益をもたらしている。鉄・マンガン団塊の鉱層が太平洋の海底で発見されたことなど、地質学関係の記事もある。なお、太平洋の水深4500—5000mの海底で採取した鉄を材料にして記念メダルまで造られている。

だが、太平洋の研究は引き続き行われている。学者たちは手持ちの資料を掘り下げて研究しているし、新しい研究対象も登場した。この意味で黒潮流域はきわめて魅力的な対象である。まもなく、調査隊が再び太平洋へ乗り出すことになっている。

一九七七年を顧みて

『今日のソ連邦』評論員
ミハイル・エフィーモフ

新憲法の採択の年

大きいものを見るときは、離れて見なければならないと言われている。それにもかかわらず、すでに一九七七年はソビエト国家の歴史の中で重要な地位を占めるとあえて断言しよう。そればかりではない。これから後に続くすべてのソ連の学校生徒は、歴史の時間に「一九七七年、第四次ソ連憲法採択」と暗記するようになるだろう。

その通り、まさにこの出来事が一九七七年に特別の意義を与え、この年をその前後のすべての年から際立たせたのである。過ぎ去った12ヵ月を顧みながら、私もまた、ほかならぬわが国の新しい基本法の採択から話を始めるのは当然である。

特に次の点を指摘したい。

新憲法は、ソ連で発達した社会主義社会が建設されたという事実を法律的に認証した。わが国の歴史を知る人々は、われわれが押しつけられた戦争とその結果の一掃に多くの歳月を費やさなければならなかったことをよく知っている。ソ連国民が不断の脅威と攻撃から自国を守るために、軍隊の維持と余儀ない軍備費のためにどれだけの犠牲を強いられたか、計算することさえできないだろう。それにしても、ロシアでブルジョアジーの支配を打倒し、プロレタリアートの独裁を打ち立てた10月革命の勝利から、社会主義の基礎を建設するまでに約20年かかったという事実が注意を引く。そのはっきりとした区切りが一九三六年の憲法であった。それから発達した社会主義を建設するまでに、さらに約40年かかったのである。

一九三六年と一九七七年とのソ連の経済的発展水準の違いを知るためには、一九三六年全一年間の社会的総生産物を生産するのに、今ではひと月もかからないことを言えば十分だろう。だが、この期間にソ連国民の実質所得が5倍以上に増加したことの方がはるかに重要だ。

私が「はるかに重要だ」と言ったのは、共産党とソビエト国家の全活動の目的がまさにここにあるからだ。結局、国民の物質的生活条件の改善のために、その精神的成長のために、発電所を建て、処女地を耕し、鋼鉄を鍛え、石油を汲み上げたことになる。社会主義のもとには、私利をむさぼる会社や企業合同が無いからだ。

発達した社会主義社会とは

発達した社会主義社会の特徴を簡単にあげるなら、国民経済の高い発展水準、それに相応するソ連国民の生活の高い物質的、精神的水準、プロレタリアートの独裁から社会主義的全人民国家への成長転化を特に指摘しなければならない。

発達した社会主義社会について語る場合には、社会・経済的発展のこの段階が合法則的、必然的性格を帯びていることを特に強調しなければならない。社会主義を建設する国々の特殊条件がどのようなものでも、歴史的発展の論理は動かすことができない。どの国民も、それ自身の基礎の上に社会主義を完成させてゆくこの段階をよけて通ることはできない。

社会主義的全人民国家では、真の民主政治が広く展開される。これに関連して、新憲法草案の審議に、一億四千万人の国民が、つまり全成年人口の、4/5以上が積極的に参加したことを指摘しておきたい。住民がこれほど高い政治的積極性、自分自身の国家の問題にたいするこれほど深い関心を示したことは、他のどの国も知らなかったし、今も知らない、とあえて断言できるだろう。

10月革命の60周年

ソ連新憲法の採択（10月7日）とほとんど同時に、もう一つの記念すべき出来事が重なった。それは10月革命60周年（11月7日）である。わが国では太陰暦は用いられていないし、〃還暦〃という概念さえないが、このお祝いはきわめて広く行われた。モスクワで開催された主要な祝賀行事には、世界の一〇四ヵ国から一二四の代表団が参加した。新聞は無数の祝辞やあいさつを発表した。しかし、私には、レーニンの指導のもとに革命に参加した長老党員たちの手紙が特に心に残った。彼らは、自分たちがそのために闘った理想がいま実現されているのを見て、誇りと幸福を感じると書いている。

昨年、わが国では、そのほか、それほど大きくはないが、楽しい祝祭がたくさんあった。世界史上初めてソ連の原子力砕氷船アルクチカ号が厚い氷を踏み破って、北極点を征服し、ソ連国旗を打ち立てた。宇宙船の打ち上げも、新たな学術的発見もあった。新しい芝居も初演されたし、美術展も開かれた。18歳のウラジーミル・ヤシチェンコは走り高とびで2m33cmを跳んで、自分の最初の世界記録を打ち立てた。そして、ワシリー・アレクセーエフは、重量あげで80回目の世界記録を打ち立てた。

苦しい労働の日々

しかし、いうまでもなく、昨年は、祝祭や記念日やスポーツ記録ばかりではなかった。苦しい労働の日々もあった。バム鉄道に新しい線路が敷かれるより前に、建設者たちは密林の蚊の襲撃も、絶壁の岩石の固さも、沼地のひどいぬかるみも、体験した。良い収穫を得るために、一九七七年には多くの労力と資金が投じられた。農業振興費として約四一〇億ルーブルが支出されたが、これは前年度より5・7％多い金額だった。しかし、天候不良のため、一九七六年の豊作をくり返すことはできなかった。

経済成長率が極めて高い（過去10年間にソ連の経済力は倍増した）にもかかわらず、われわれの日常生活の多くの重要問題が解決されなかった。しかし、われわれは十分に根拠のある、楽天的な気持ちで新年を迎えている。第一に、ソ連の平和建設では年が改まるたびに前年よりも良くなっていることをわれわれは納得している。第二に、社会主義体制があらゆる不愉快な、思いがけない出来事からわれわれを守っていることを、確実に知っている。

考えてもみたまえ——住宅の質が向上し、公共施設が完備され、従って建設費がかさんでいるにもかかわらず、ソ連で家賃が据え置かれてから、新年で50年（！）になるのだ。どんな干ばつも、どんな凶作も、生活に最も必要な食料品の国家小売価格を変えることはできない。

そのうえ、国家はみずから引き受ける支出の重荷をたえず増やしている。一例をあげれば、新憲法にもとづいてすべての学童が教科書を無料で支給されるようになるだろう。学童の数は約四五〇〇万人、ほぼ四億冊の本が必要になる……

平和と善隣への志向

ソ連の人々は、幸福な未来にたいする自分たちのすべての期待を地上の平和と結びつけている。ただ平和だけがわが国民の共産主義への計画的前進を保証することができる。平等と繁栄の社会は熱核戦争の廃虚からは生まれない。だから、平和と善隣への志向はソ連にとって一時的な戦術ではなくて、一貫した政策なのである。

隠さずに言おう。過ぐる年の初め、ソ日関係で、われわれはにがい幻滅を味わせられた。〃ヘビの年（巳年）〃は〃魚の年〃、さらに一層悪く〃ミグの年〃にもなりかねなかった。だが、これに関連して、日本で行われた10月革命60周年を祝賀する数々の催しを、良い兆候として指摘しておきたい。ソ連国民は、これを、わが隣人の心からの友情の現れと見たのである。ソ連の側からは、ソビエト国家の首班L・I・ブレジネフが朝日新聞とテレビ朝日を通じて1年のうちに2度も日本国民に呼びかけたという事実も、強調しておきたい。これは、ソ連で対日善隣関係の維持に与えている大きな意義を疑いもなく証明している。

この機会を利用して、ソ日関係の分野で、新年がみのり多い成果をもたらすようにとの希望を表明しておきたい。

トレチャコフ美術館国宝シリーズ①

〝名画との対話〟展始まる

東京国際美術館で1月1日から

ソ連文化省と日本の国際美術協会との取り決めにもとづき、1978年1月1日から4月10日まで（会期中無休）東京・銀座の東京国際美術館で「トレチャコフ美術館国宝シリーズ①　名画との対話」展が開催されている。今回出品された10点の作品の多くは、トレチャコフ美術館の門外に出たのが初めて。出品作品は次の通り。

有名なロシアの戦争画家で、東洋の研究家だったワシリー・ベレシチャーギン（1842—1904）の『チムールの扉』、ロシアの自然のうたい手と呼ばれているすぐれた風景画家イサーク・レビターン（1860—1900）の『夕べ・麗しいプリョース』、民衆の生活に作品のテーマを求めたロシアの画家コンスタンチン・マコフスキー（1839—1915）の『雷を逃れて』。

有名な「移動展覧会協会」に所属し、作品のテーマを農民と小市民の日常生活から選んだ二人のリアリズム画家ニコライ・ヤロシェンコ（1846—1898）の『囚人』とワシリー・ペローフ（1833—1882）の『ムィチシチィでのお茶のひととき』。

20世紀初頭の作品からボリス・クストージエフの『謝肉祭』、絵画における非伝統的な色彩の解決を探求したピョートル・コンチャロフスキー（1876—1956）の静物『ライラック』、1930年代の作品からアレクサンドル・デイネカ(1899—1969)の『朝』。

自己の全創作活動を生まれ故郷の村の生活を描くことに捧げたアルカジー・プラストフ（1893—1972）の『母と子』。現在、ソ連美術家同盟理事長で、ベトナムをテーマにした連作の作者ニコライ・ポノマリョフの『ホンゲイの炭鉱夫』。

入場料　一般500円、大学・高校生 400円、中・小学生300円。
開館時間　午前10時から午後7時半まで。
東京国際美術館の住所は東京都中央区銀座6—2—3（泰明小学校前、リッカービル3階）、電話03・572・1288。

釧路に日ソ友好貿易会館がオープン

V・タラネンコ



友好貿易会館のテープカットをするコレスニコフ・ソ連代表団長、ポリャンスキー大使、渡辺源治・釧路市商工会議所会頭、鰐淵・釧路市長



両国国旗の掲揚式

日本に赴任してから私はしばしば北海道やその他の地方を訪れたが、これらの旅行はすべてソ日関係を発展させる重要な出来事と結びついていた。そしてまた、一九七七年12月17日、大きなソ連代表団が日ソ友好貿易会館の開館式に出席するために北海道の釧路市に向かって東京を飛び立った。

出発当日の東京上空の明るい晴天は、何も心配するようなことを予想させなかったが、北海道上空に近付いたとき、われわれは悪天候で釧路空港が閉鎖されたことを知った。そして、飛行機は余儀なく千歳空港に着陸した。われわれ一行の心配は、ご理解いただけるだろう。友人たちが釧路でわれわれの到着を待ちかまえているのだ。友好貿易会館落成式は準備万端ととのっている。遅れたら、取り返しがつかない。

だが、千歳に着陸してから30分後には、うれしいことに、飛行機は釧路へ向かうとアナウンスされた。天候がよくなったのだ。

北海道に現在、日ソ友好の会館が三つも――宗谷郡猿払村と、札幌市（一九七七年9月開館）と、そして今度の釧路市に――活動している事実は、恐らく、驚くべきことではないだろう。何しろ北海道は歴史的にロシア、ソ連と深いつながりを持っている。幕末の日本に親善使節としてやってきたプチャーチン提督の一行が最初に寄港したのが、函館だったということを思い出すだけで十分だろう。



友好関係発展にかんする協定に調印するコレスニコフ・ソ連代表団長と武藤・東北海道日ソ友好貿易協会理事長

釧路の会館（釧路市大町1丁目1番地）は東北海道日ソ友好貿易協会と東北海道日ソ友好貿易公社のイニシアチブにもとづいて建設された。同協会理事長武藤正春氏、釧路市長鰐淵俊之氏、その他一連の東北海道実業界、貿易界の重立った人々が、この会館の開設に積極的に参加した。

ソ連側の代表団長、G・F・コレスニコフ・ソ連海運次官は落成式における祝辞で次のように述べた――「この友好貿易会館の創設を、われわれソ連人は、善隣と信頼の精神で、ソ連国民との関係を全面的に発展させたいという北海道民のみなさん、平凡な日本の漁夫たち、各種社会団体の代表のみなさんの熱望の証拠と見ています」

この会館の名称には、貿易と友好との相互連関という単純な、しかし正しい思想が反映されている。ソ連と、東北海道日ソ友好貿易協会、同公社との間に貿易関係が始まってからまだ1年半にしかならないが、その結果はすでに一貫した計画的な基礎にもとづいて長期にわたって発展し、双方に利益をもたらす見通しのあることを示している。友好貿易会館落成式の当日に、一九七八年にソ連から四万立方mの木材を供給する新しい大型契約が調印された。

友好貿易会館の"おはらい"の後、おごそかなふんい気のもとソ日両国国歌の高鳴るなかで、会館の前に両国の国旗が掲揚され、入口のテープカットが行われ、赤の広場、V・I・レーニン、L・I・ブレジネフの写真の除幕式が行われた。ついで、ソ連対外友好・文化交流団体連合会と東北海道日ソ友好貿易協会とのあいだの友好関係発展にかんする協定の調印式が行われた。そして、なごやかな友好的なふんい気のもとで日本の伝統に従って、芳香の高い酒樽の鏡が抜かれた。

ソ連代表団は友好貿易会館にV・I・レーニンの胸像を贈呈した。

落成式に続いて、レセプションが開かれ、D・ポリャンスキー駐日ソ連大使、コレスニコフ団長、武藤理事長、その他日本の各界代表があいさつした。



ソ連側出席者たちによる鏡割り

貿易と友好の目的は一つ

――ソ連との貿易を拡大する北海道



立花　忠臣　氏

一九七七年、ソ連に駐在事務所をもつ日本の貿易商社の名簿に株式会社「日ソ貿易」の名が現れた。ソ連外国貿易省の許可を得て、北海道のこの貿易商社は初めてモスクワ駐在事務所を開設した。

以下はアンドレイ・ポポフ・ノーボスチ通信社記者と立花忠臣・同社取締役との一問一答。

貿易の利益を友好のために

あなたの会社について、またあなたの会社とソ連外国貿易公団との関係についてお話しください。

私たちの会社は、一九七二年3月に、北海道日ソ貿易協会の貿易実務部門として設立されました。同協会には北海道の二三〇の主要な工業、商業、運輸の各会社、銀行、協同組合が加盟し、これらの会員企業で働く人の総数は約六〇万人と推定されます。わが社の資本金は二七五〇万円。株の半数を協会がもち、残りの半数は北海道にある67のさまざまな会社が保有しています。

わが社の主な目的は、株主の利益のためにソ連と貿易取引を行うことです。私たちは株主が生産する生産物を売り、株主が必要とする商品を買います。私たちはまた、北海道の諸会社がソ連の外国貿易公団と契約を結ぶにあたり仲介の労をとりますし、ソ連で日本の諸会社が開催するさまざまな見本市に参加します。

手数料の形で入る会社の収入が協会や最近札幌で開設された北海道日ソ友好文化会館の活動を維持するために利用されることが、わが社の主要な特徴です。私たちの会社は、ソ連とだけ貿易を行い、その収入を日ソ友好の強化に利用している北海道で唯一の会社ではありますが、これは決してソ連側が取引を結ぶにあたって私たちにある物質的な特典を与えているということを意味しません。私たちはあらゆる他の日本の会社と同じ条件で（商品の量や価格などで）ソ連と貿易しています。

モスクワでは、私たちはソ連外国貿易省のさまざまな公団、ツェントロソユーズ（ソ連消費組合中央連盟）その他の貿易機関と恒常的関係を保っています。わが社の貿易額の10％までがナホトカでのダリイントルグ（全ソ輸出入事務所）との沿岸貿易によって占められています。わが社の貿易総額はいまのところあまり大きくはありませんが、急激に増えています。一九七三年に八億円だったのが、一九七六年には五二億円に、すなわち北海道の対ソ貿易総額の約半分に達しました。一九七七年には私たちの予想によれば、九〇億円を超えます。私たちは近い将来三〇〇億円に達するように全力をつくしています。

北海道・ソ連貿易の利点

北海道とソ連との貿易・経済交流の利点は、どこにあるとお考えですか？

まず第一に、北海道がソ連と地理的に近いことです。これによって、北海道はソ連との互恵的交流を発展させるだけでなく、ソ連と日本の他の部分との貿易で有力な中継基地になることができます。

第二に、ソ連の極東には、北海道経済の発展に必要な膨大なエネルギー資源と原料資源があり、また直接北海道で生産されるものをふくむ日本の工業製品の大きな販売市場が存在することです。

北海道とソ連との経済交流の将来を、どのように見ておられますか？

私たち、日本の北方住民は北海道に繁栄をもたらし、本州の太平洋沿岸に追い付くことのできるような、北海道独自の経済交流の発展を念願しています。北海道には、有用鉱物はありますが、その埋蔵量はわずかです。日本にとって伝統的な原料供給源に目標を置くことは、エネルギー危機が教えたように明らかに危険です。もし私たちが北海道の工業化をめざす広範な計画の実現を望むならば、北海道に原料を供給する分野でも、生産物の販売の分野でも、互恵のパートナーを決めるうえで新たなアプローチが必要です。

柴野安三郎・北海道日ソ貿易協会理事長は、正しくも、北海道とシベリア極東との広範な安定した交流なしに北海道の経済的繁栄を考えることは困難だと考えています。ですから北海道とソ連との経済関係の発展の客観的必要性は明らかで、その現在の水準はまったく不十分だと言うべきです。従って私たちは北海道とソ連東部地域との多種多様な総合的協力を支持しているのです。

このような協力の具体的な道は、どのようなものとお考えですか？

北海道では現地の経済協力プロジェクトの実現に特別な関心を抱いています。たとえば、北海道にサハリンの石油とガスを供給することがそうです。サハリンの石油とガスは硫黄分が少ないため、浄化装置にかかる費用は少なくて済みます。プロジェクトを作成し、実現することは、協会の主要課題の一つになっています。

私の見解では、貿易拡大の客観的な可能性もあります。とくにプラント貿易について、そう言えます。科学技術交流の見通しは大きく、その発展は、たとえば農業で新しい協力形態を生み出すでしょう。

青函トンネルとバイカル・アムール（バム）鉄道の建設は、北海道にとって大中継基地となる可能性をもたらしています。それは日本から欧州諸国へ、欧州諸国から日本への通過貨物の輸送期間を著しく短縮するでしょう。

北海道とソ連との交流のその他の面に、貿易の発展は、どんな影響を与えていますか？

ソ連との交流の発展に、純経済面だけを見ることは正しくないでしょう。協会の指導部は、日本とソ連のイデオロギーや社会制度の相違にもかかわらず、北海道住民の利益がソ連国民との広範な交際を、相互友好・文化交流の発展を要求していると考えています。

「貿易と友好の目的は一つ」――これが協会の活動の基本原則です。

札幌に北海道日ソ友好文化会館が建設されました。私たちは、会館が北海道住民とソ連国民との善隣、相互理解、信頼、協力を深める活動のセンターとなることを期待しています。それによって、この会館は疑いもなく北海道のいっそうの発展に、日本国民の将来の利益に奉仕するでしょう。

楽しいモスクワ生活

モスクワでのご自分の生活についてお話しください。

私は4年以上もモスクワ生活の経験を持っています。

もちろん、ビジネスはビジネスで、ソ連外国貿易公団との交渉は真剣なふん囲気のもとで行われます。しかしこれは私たちの間に友好関係、相互理解、信頼を確立するのを妨げるものではありません。

私は「日ソ貿易」モスクワ駐在事務所の責任者であるだけでなく、北海道日ソ友好文化会館のモスクワ代表でもあります。ですから、広い範囲の人々、とくにソ連対外友好文化交流団体連合会の代表としばしばお会いします。これらの人々が私の仕事に大きな援助と協力を与えて下さっていることを、喜んで指摘したいと思います。

モスクワ市民は非常に誠実で親切な人たちです。私にはかれらの間に多くの友人ができました。

モスクワは近代的な快適な都市であり、いろいろな機関の配置の点でも都合よくできている都市です。

生活費についていえば、高くないと言わなければなりません。特に食料品は安く、新鮮で、質がよいのです。レストランは十分にあり、ロシア料理、カフカズ料理、ウズベク料理、欧州各国の料理を注文することができます。

モスクワの劇場にはとくに満足しています。しばしばバレエや人形劇やサーカスを見に出かけますし、また音楽会にも出かけます。一九七七年11月7日に来賓としてモスクワの赤の広場の祝賀パレードに参加したことも、誇りをもって語りたいと思います。

私の二人の息子は設備の立派な日本人学校で学んでいます。

こうしてモスクワでは、私は少しも不自由を感じないと言うことができます。私はモスクワの生活に満足しています。

トピックス

ナホトカ湾の電算機

ソ連極東のナホトカ湾では目下、船舶の運行をコントロールする自動化システムを設置中。この湾には貿易港、石油積み出し港、漁港があるほか、日本企業の協力により最新技術を装備する新港ウォストーチヌイの建設工事も行われている。ウォストーチヌイ港ではすでにコンテナ、チップ、木材を処理する自動化バースが稼働しており、ソ日間の貿易量のかなりをさばいている。完成時には64の水深のあるバースが、10万t級以上の船を含めて年間数千隻の船舶を受け入れるようになる。このため、霧やしけによる運休を少なくし、過密運行による衝突事故を予防し、どんな天候でも船舶の運行をコントロールできる、この自動化システムが設置されているわけである。

湾の全域が3個所のラジオ・コンパス局でオーバー・ラップされる。船舶がその海域にくると、船からの信号が電算機に入る。電算機は船にコード番号を付け、画像を船の方向と速度のデータを加えたシンボルに変える。湾内の船舶位置についての全情報は大スクリーンと各オペレータのスクリーンに写し出される。オペレータから航海士や水先案内人に運行方向と速度の指示が無線で行われる。船が指示通りに動かなかったり、事故の危険性が生じた場合には自動装置から直ちに警報が出される。

イデオロギー問題

民主主義の拡大をめざす新憲法

K・カラショフ

権利と自由、その保障

一九七七年10月7日に採択されたソ連新憲法で、ソビエト市民の権利と自由を中心的な内容とする部分には合計37ヵ条が入っており、一九三六年憲法より21ヵ条も多い。しかし、問題は条項の数の増加ではなく、その内容にあることはもちろんである。これらの条項では、まず第一に、各人の労働と社会・政治生活の基盤となる権利と自由が明記されている。それは、労働の権利、休息の権利、健康保護の権利、社会保障の権利、住宅を受け取る権利、教育を受ける権利、文化の達成を享受する権利であり、言論、出版、集会、デモンストレーションの自由である。第二に、これらの権利と自由は単に条文にうたわれているだけではなく、物質的にも、政治的にも、また法律的にも確実に保障されている。

憲法にうたわれている権利のすぐあとにその保証が書き込まれていることも重要である。たとえば憲法第四四条の住宅を受け取る権利は、「国家的および社会的住宅フォンドの拡大と保護、協同組合的および個人的住宅建設の助成、住宅の社会的監督のもとでの公正な分配……によって保障される……」

ソビエト市民の憲法上の権利と自由がそれにたいする保証と結びついていることは、新憲法の基本原則の一つであり、この点で一九三六年憲法に比べてさらに前進している。

ソ連の社会・経済関係が成熟するにつれて、社会主義的民主主義の現実的内容もますます充実したものになってゆく。だから、一九七七年のソ連新憲法は、ソビエト社会の社会・経済、政治、精神生活の新しい特色を反映する幾多の権利と自由を包含している。そのいくつかをあげてみよう。

政治的自由の分野では、それは、国家的、社会的業務の管理に参加する権利（ソ連邦の市民は一九一七年の10月革命勝利の直後からこの権利を享受しているが、今日まで憲法には直接に規定されてはいなかった）であり、仕事の欠陥を批判する権利（この場合、公務員は定められた期間内に市民の批判的意見にたいして回答し、必要な対策を講ずる義務を負う。批判にたいする追及は禁止される。批判にたいして追及を行う者はその責任を問われる）である。個人の権利の分野では、たとえば、それは、市民が公務員の不法行為を裁判所に訴える権利であり、国家機関、社会団体ならびに公務員が犯した不法行為のためにこういった損害の賠償を受ける権利である。社会・経済的および文化的な権利の分野ではそれは、すでにまえに述べた健康保護の権利、住宅を受け取る権利、科学的、技術的、芸術的創造の自由である。このリストはさらに続けてあげることができるが、以上にあげた事実だけでも、ソ連の新憲法が従前のどの憲法にも盛られなかったほどの規模で、市民の権利と自由を保障していることを納得できるであろう。

人民の権力

ソビエト国家の社会主義的民主政治の制度を批判する人たちはしばしば、一方での国家の役割の強化、中央集権主義と、他方での民主主義の深化とは相反するものだと主張する。

実際にはソ連の政治的発展の経験が示している通り、これらすべてのプロセスは相互に緊密に結び付き、補い合っている。憲法は、発達した社会主義のもとでソビエト社会における民主政治の深化がすすんでゆく基本的方向を規定しているのである。

これは、なによりもまず、社会生活の最重要問題を解決するうえで、ソ連邦の政治的基礎である人民代議員ソビエトの役割がいっそう増大してゆくことである。人民はソビエトを通して国家権力を行使し、他のすべての国家機関（執行、行政、司法）はソビエトにたいして報告の義務を負い、ソビエトの監督下にある。ソ連最高会議がソビエト国家の運営に関係ある一切の問題を解決する全権を与えられていること、地方ソビエトが単に地方的な重要性のある問題を解決するだけでなく、管轄地域内の他のさまざまな機関の活動をも監督していることは、各級ソビエトの役割の増大を実証している。

ソビエト政権は正真正銘の人民的な性格を持っている。それはソビエトの社会的構成を見ればわかる。すなわち、二二〇万人を超える代議員の$2/3$以上は労働者と農民である。各級ソビエトはその選挙人にたいして報告の義務を負っている。選挙人たちはその信任にこたえない代議員をリコールする権利を持っている。最近10年間に、地方各級ソビエトからは四千人以上の代議員が、ソ連最高会議からは11人の代議員がリコールされている。自分自身は代議員ではないが、代議員の活動を援助している多数のアクチーブ（活動家）は、ソビエト活動の支えとなっている。アクチーブは普通の労働者、農民、サラリーマン、知識人の間から出てきたボランティアたちである。

労働組合、コムソモール（共産青年同盟）、協同組合その他の社会大衆団体は、ソビエト的社会主義的民主主義のシステムのなかで重要な地位を占めている。特に憲法は、労働組合が他の大衆的な社会組織と同様に、「国家的および社会的業務の管理に、政治的、経済的および社会的・文化的諸問題の解決に」（第七条）参加することを規定している。これらすべての大衆的な社会団体の可能性は極めて大きい。たとえば、労働組合は、管理部と勤労者間の相互関係を調整する団体協約を管理部と締結し、保安設備や労働条件を監督しており、ソ連全国のサナトリウムおよび休息の家のほとんどすべては労働組合の管理下にある。ソ連では、労働組合委員会の同意がなければ、ただ一人の勤労者も解雇されることはありえない。大衆的社会団体は立法提案権を持っており、その権利は憲法で法的基準にまで高められている。

民主主義と中央集権主義との相互関係、国家的原則と社会的原則との相互関係を最適の状態にする対策を発見することは、もちろん、複雑な課題である。この課題は、共産党の指導のもとに解決されつつある。党は個々のグループや階層の利益と目的を、社会全体の利益と目的に一致させ、全社会の精神的、政治的統一を保障している。

☆ ☆ ☆

トピックス

タシケントの地下鉄開通

一九七七年11月、ウズベク共和国の首都タシケント（人口一七〇万、中央アジア最大の都市）で地下鉄1号線が開通した。これはソ連における第7番目の地下鉄。

路線延長は12km、駅の数は9。駅の壁は7色の大理石で、ホール、玄関、プラットホームの床は黒い磨かれた花崗岩で内装されている。それぞれの駅は他の駅と異なった独自の建築様式でつくられているが、鮮明な東洋的色調で統一されている。ウズベクの美術家たちは駅の装飾に東洋の伝統的な装飾美術、モザイク、マジョリカ焼き、打ち出し工芸、花崗岩彫刻の技術を利用している。

タシケントでは、震度9（改正メルカリ震度階）の地震を考慮に入れて地下鉄を建設しなければならなかった。また、タシケントは多孔質の黄土層の上にあり、しばしば礫岩層に出くわし、地下水が地表のすぐ近くまで来ている場合もある。

耐震性の問題は、変形継ぎ目と金属製の特殊な耐震ジョイントで結合された厚さ1・5mのコンクリート・チュービングを使うことによって解決された。地下水の水位が高いところでは、オープンカット工法で工事が行われた。現在、タシケントではさらに2本の地下鉄路線を建設している。

天才少年指揮者

ノボシビルスクの13歳の指揮者イーゴリ・カメネツは、モスクワでグリンカ、ハチャトウリャン、ラベル、モーツァルトの作品を指揮して、一躍有名になった。カメネツ君はノボシビルスク音楽院付属音楽学校のバイオリン・ピアノ科の生徒で、指揮はノボシビルスク・フィルハーモニー交響楽団の常任指揮者アルノリド・カーツについて習っている。

専門家は、カメネツは天才少年だが、その天分を大切に育てなければならない、という点で意見が一致している。音楽院だけでなく、医師、教育学者、心理学者も天才少年の成長を見守っている。モスクワ公演は大成功に終わったが、精神的負担を軽くするためにこの天才少年の公演回数を制限することになっている。

生活水準と明日の生活への安心感

ノーボスチ通信社経済評論員　アレクサンドル・グーベル

米国の現代作家、ルイス・チョーケルの作品『労働』の中で、一八〇人の主人公のひとり、労働者フィル・ストリングスは「月曜日から金曜日まで死ぬほど働かされている」と言っている。そして一八〇人の一人ひとりが仕事のテンポが落ちたぞ、労働能力が低下したぞ、クビだ、とたえずおどかされている。

労働者は、このような運命から逃れるために、何年もゴール寸前のスポーツマンのように精一杯働いている。これほど非人間的な刺激はない。

モスクワ、ノボシビルスク、スベルドロフスクの各都市で、それぞれ10人の労働者が社会学者の調査を受けたが、そのうち8人が、現在の労働条件に満足しており、失業があることなど考えてもいない。

事実関係はこの通りである。それにもかかわらず、西側では、ソ連の勤労者が米国より極度に低い生活をしている、と繰り返し宣伝している。この場合、あれこれの商品の購入のためにソ連と米国の労働者が必要とする一人あたり労働時間を計算し、この算術計算を基礎に、米国の生活水準が高い、という結論を出しているのである。

これは、事情にうとい人々を当て込んだ方法である。その際、「貴方の収入は？」という質問は、「貴方は、どのような生活をしているか？」という全体的な観点から問題をそらそうとして出されたものである。このようなやり方が、多くの反論を生むのは当然である。

第一の反論

生活水準をきめるものは物だけではない。人間だ。しかも、物の消費者としてだけの人間でもない。日常生活の他のいろいろな面と直接にぶつかってみれば、このことが明確に理解されてくるだろう。

家族が全員健康なうちは、入院費や薬代などは、家庭の豊かさに影響がない。しかし、われわれは、常に健康だとは限らない。米国では医療費が特に高い。

では、ソ連ではどうか？ ボルガ沿岸都市チェボクサルイの市民、電気工のヴレンチン・プリバロフは、列車にひかれ、重態に陥った。医師たちは、10カ月間も彼の生命と健康のために闘った。彼にたいし6回の手術がチェボクサルイとモスクワの優秀な病院で行われた。これには、一コペイカもかからなかった。治療中に彼を解雇することは法律で禁止されている。彼の在職期間が8年を越していたので、平均賃金の半分に相当する一時的労働能力喪失手当を受けとっていた。その際、彼自身は、この手当にたいして、あらかじめなんの掛け金も掛けていなかった。

われわれの生活のもうひとつの側面を例にとろう。人の子の親として、自分の子どもを教養のある人間にしたいと願わない者があるだろうか？ このために米国人はまたしてもカネを必要とする。

ソ連では、普通教育学校から大学まで、勉学の可能性は家族の所得に関係なく、すべての子弟に保障されている。名門校と普通校の区別もない。高等教育も含めて、ソ連では、あらゆる形態の教育が無料制である。

第二の反論

この反論は、第一の反論に関連している。米国の平均家庭で、物資の購入に、実際にいくら残るか計算してみると、所得のわずか40%という興味ある結果が出た。60%は、医療費、教育費、税金、家賃、社会保障基金への掛金、保険料などに取られてしまい、これらは米国平均家庭の財布を事実上カラにしている。こうして西側諸国の「潜在的購買力」は、現実の「購買量」とは根本的に違っている。

ソ連の家庭は、平均して所得の80%を物資の購買にあてている。税金は、6―13%（13%が最高）であり、低所得者は、一般に税金が免除または軽減されている（ところで、時と共に住民にたいするあらゆる形態の税金の廃止が予想されている）。家賃や電力、ガス、温水、電話などの公共料金は、家族の平均賃金の5%を出ない。

ソ連には勤労者の実質所得という概念があり、それは、賃金と社会的消費基金からの

収入から成っている。財産の多少にかかわらずそれを必要とする者の社会的消費がこの基金から支払われている。この基金からの収入は、個々の職種では、賃金の40%にも達している。

第三の反論

生活水準とは、複雑な概念であるばかりか、ダイナミックな概念でもある。その実際の内容は、現在あるものばかりか、過去にあったもの、将来あるであろうものにも関連している。「安心した生活」にとって、この概念は重要である。

所得、価格、サービス料金は、どうなるだろうか？ 将来安心してよいのか、それとも「不時」に備える必要があるのだろうか？

ここ15年間にソ連市民の実質所得は、2倍になり、小売価格と家賃が安定している状況のもとでますます増え続けている。

たとえば、一九七五年にはソ連国民一〇〇〇人あたり二一六台のテレビ受像機、一七九台の電気冷蔵庫があった。この数字は、米国のそれと比較して非常に低い。これが常に強調されている。しかし他の事にかんしては常に黙殺されている。米国でテレビや冷蔵庫がすでに必需品になっていた20年前、ソ連ではこれらが家庭に現れはじめたばかりであった。ここ10年間にこれらの商品の普及率は、テレビが3倍強、冷蔵庫が6倍に増大した。

一九七六年のソ連共産党第25回大会では、国民所得（一九八〇年には一一七〇億ルーブルに達する見込み）の1/4が、教育、保健、社会保障、婦人の労働・生活条件の改善に向けられることが指摘された。現行5カ年計画（一九七六―八〇年）では次の福祉対策が実施される。

――婦人労働者のために、生後1年間の部分的有給育児休暇を支給する。

――保育所・幼稚園の定員を約三〇〇万人増やす。

――一九八〇年末には8学年を終了した少年の98・6%が中等教育施設で勉学を続ける。

――二〇〇〇万人以上が、自分の財布から一コペイカも出さずに、高等・中等教育を受けて、技能資格を有する労働者や専門家になる。

――老齢年金と障害年金が増額される。

――五〇〇〇万人が無料で新しい住宅に移転する。その建設のためにこの5カ年間に国家は一〇〇〇億ルーブルを支出する。

ソ連では、国家予算の歳出で、最近数年間、低下し続けている費目がただ一つある。それは軍事予算である（一九七六年一七四億ルーブル、一九七七年一七二億ルーブル）。

若干の問題にたいするソ連の答え

米国とソ連における「平均家庭」の概念の違いにかんする問題がある。米国では、百万長者とすでに失業手当を打ち切られた失業者、プール付き豪邸の所有者と宿なし――これらすべての人々が平均指標の形成に寄与している。しかし、彼らは福祉の両極端に存在し続けている。このような両極端は、ソ連には存在しない。

この差異を思えば、次のような質問が出るのは無理からぬことである。社会にとって何を優先させるべきか？ 選ばれた少数者にすばらしい住宅か、それとも、すべての者に手頃な住宅か？ 各人に専門技能に応じた仕事を保障することか、それとも、いつも失業者がいて就職している者への「圧力」となっていることか？ だれもが平等に受けられる無料の医療と教育か、それとも所得に応じての医療と教育か？ 将来への安心か、それとも将来への恐怖か？ 人間のための物か、物のための人間か？ 社会的平等か、それとも社会的不平等か？

これらの問いにたいするソ連の答えは、ソ連の市民が平均して物質的に米国人よりも良好に生活していることをまだ意味しているわけではない。しかし、ソ連市民は、平静であり、あすは今日よりもっと多くの富を得ることを確信している。

★　★　★

トピックス

北海の大ウミガメ

トロール漁船ストゥピノ号が北太平洋で操業中、巨大なウミガメが網にかかって引き上げられた。このカメの体重は三〇〇kg以上。前足を広げると2m60cmもあった。

この珍客はサハリンのネベリスク港に運ばれ、特別仕立てのトラックで南サハリンの地誌博物館に送られた。暖かい海に住む大ウミガメが北の海でつかまったのは、これが初めて。

ソ連映画に大賞

第27回西ベルリン国際映画祭には17カ国から24本の作品が参加。ラリサ・シェピチコ監督のソ連映画『昂揚――ソートニコフの戦い』に大賞〝金のクマ賞〟のほか、二つの賞が授与された。

特集

I なぜ極北地方に住むのか？

タイミル半島・風土と人間

セルゲイ・オストロウーモフ　ボリス・イワノフ



ノーボスチ通信社シベリア特派員セルゲイ・オストロウーモフとボリス・イワノフは、このほど極北地方を取材旅行した。両記者の見た北極圏タイミル半島の生活をご紹介しよう。

資源の集中した広大な地域

世界には生活条件がいわば極限の、広大な地域が少なくない。厳しい気候、無人、伝統的な文明中心地からの隔絶——これが人々をそういう場所から遠ざけている要因である。しかし、逆説的なのは、ほかでもないそういう場所の多くにさまざまな天然資源、主として鉱物資源が集中していることである。工業とエネルギー産業が大規模に発達し、伝統的に利用されてきた鉱床が次第に枯渇するという条件のもとで、この要因が新しい、利用困難な地域を開発する必要性に本質的な影響を与えている。このことは、ソ連の極北地方にも完全に当てはまる。

ソ連欧州部とシベリアの北の海岸線は数千㎞も延びており、ソ連国土（二二四〇万平方㎞）のうち約一四〇〇万平方㎞は寒冷地帯にある。まさにその極北地域に、天然ガス、石油の大資源、非鉄金属と希有金属の鉱床、炭田、全国の35％以上の森林資源が集まっているのである。しかも、この地域には膨大な水力資源もある。

もちろん、これらすべての自然の富を開発することは容易ならざる、長期的な課題である。しかし、ソ連人はすでにこの課題の解決に取り組んでいる。ここに、ソ連人が極北地方に住みつき、仕事を着実に進めている理由がある。

北極圏内に位置し、北極海に面しているタイミル半島とその隣接地域は、この点では典型的な場所と見ていい。

この地域の開発方法について、世界最北のノリリスク採鉱・冶金コンビナートの企業長ボリス・コレスニコフ、ソ連共産党ノリリスク市委員会の第一書記ボリス・ブラギフ、タイミル(ドルガノ・ネネツ）民族管区の猟師でソ連最高会議代議員アヌフリー・スピリドノフに聞いてみた。

世界最北の大工業基地

ボリス・コレスニコフ——30年前、この地方で私がまだ未成年者として自分の人生を歩きだしたころ、ノリリスクはタイミルの雪にうずもれた、ちっぽけな工業の前哨地点だった。現在、ここは大工業コンプレクスで、それぞれが独自の将来性を持っている五つの仕事場に分散している。

そのうちの第一の仕事場は、ノリリスク市そのもので、ここにはいくつもの選鉱工場、冶金工場、大きな計算センター、建設資材企業などがある。第二の仕事場は衛星都市のタルナフで、ここには〃マヤーク〃、〃コムソモリスキー〃、〃オクチャブリスキー〃、建設中の〃タイミルスキー〃などの鉱山がある。ここでは永久凍土の下、地下四〇〇—一二〇〇ｍの深さから金属を豊富に含んだ鉱石を採掘している。

次の仕事場はケイエルカン町だ。ごく最近までわがコンプレクスの石炭基地があった。現在、炭鉱は各企業が動力を天然ガスに転換したので、閉鎖されている。そしてケイエルカンには大きな鉄道駅が建設された。第四の仕事場〃ナジェージダ〃には、目下、ソ連最大級の銅とニッケルの冶金工場を建設している。

そして最後の、わがコンプレクスの〃門〃に当たるのがドゥジンカ港である。ここのバースは同時に40隻の船の荷役作業ができる。これらの船は北洋航路、あるいはシベリアの南部からエニセイ川を経由して北極圏の住民に必要物資を届け、ドゥジンカ港からはわがコンビナートが生産した非鉄金属と鉱石を積み出している。ソ連の原子力砕氷船のおかげで、北極海の航行期間は著しく延びた。

タイミル半島へは、水路のほか、モスクワ、レニングラード、クラスノヤルスクなどから多くの航空路が通じている。

自動車輸送も発展している。数千台のトラックが永久凍土の上に建設された道路を通って、毎年八五〇〇万ｔの貨物を輸送している。

選鉱工場から精鉱を冶金工場に送るパイプライン網が建設された。天然ガス田のメソヤハからノリリスクまで延長約二〇〇㎞の、世界最北のガスパイプラインが敷設された。このパイプラインは、われわれの自慢のたねだ。なぜなら、ガスは極北地域の非鉄金属工業発展の戦略的課題を解決したからだ。今後長期間にわたってコンビナートは熱と電力を確保し、各企業の経済効率が高まった。石炭の輸送がなくなったので、大量の輸送手段が浮いた。コンビナートが石炭から天然ガスに転換した結果、5年間に一億七〇〇〇万ルーブル以上の節約ができた。

〃白い砂漠のオアシス〃

ボリス・ブラギフ——われわれの、この厳しい風土の地方には、数十万人が生活し、働いている。言っておきたいが極北地方に住むこと自体が目的だったことは一度もない。それは、ソ連の国民経済に極北の地下資源を導入するために必要なことなのだ。タイミル半島にはすでにソ連人の第二、第三世代が住みついている。そのうちの数万人は人生の最良の期間を極北に捧げた。

北極圏のツンドラの自然は、非常に厳しい。しかし、われわれの経験は、ここでも、人間が正常に生活し、働けるような良い条件を作り出せるということを物語っている。これは多くの響きのよい、率直に言って当然の形容詞を捧げられているノリリスクを例にとれば、明白である。ノリリスクは〃極北の星〃、〃白い砂漠のオアシス〃、〃北極圏の奇跡〃などと呼ばれている。そしてこれらの呼び名のすべてにあるのは、エキゾチックな面に飛び付きがちな旅行者の感激だけではない。それは論議の余地のない事実の、心からの称賛でもあるのだ。ノリリスクは実際、二〇万人以上が住む快適な都市である。設備の完備した住宅の面積は合計二〇〇万平方ｍを上回っている。ここでの住宅建設はソ連中央部の2倍も3倍も高くつくが、ノリリスク市民は、ソ連の他のすべての地域と同じように、無料で住宅を受け取っている。第10次5カ年計画末（一九八〇年）までに市の住宅面積は、さらに一〇〇万平方ｍ増える。それまでに予想される人口の増加は三〇〇〇人である。新しい数階建てのビル、クラブ、レストラン、体育館の建設が進んでいる。

この地域に新しい働き手が一人住みつくたびに、国家は二万ルーブルの支出が必要になる。実生活が示しているところでは、人々を極北地方に引きつけ、腰を落ちつかせるのに何よりも効果があるのは、どこにも負けない住宅・生活条件、そしてもちろん、割り増し賃金である。新しくノリリスクに来た人の場合、賃金はたとえばモスクワ在住の人の80％増し、また、ノリリスクで5年間働いた人の賃金は160％増しである。

多くの人にとってはまた、ノリリスクでは早く出世するチャンスがあるということも魅力になっている。厳しい条件下での工業コンプレクスの急激な発展は、事実上だれにでも、自分の能力を発揮する最大のチャンスを与えている。その最高の見本が、先ほど登場したボリス・コレスニコフの人生行路だ。30年前、かれはノリリスクの職業技術学校の生徒だったが、今ではコンビナートの全従業員の長だ。こういう経歴の人は北極圏には少なくない。

少数民族の利益

アヌフリー・スピリドノフ——ノリリスク・コンプレクスは、何百年もツンドラの原住民ドルガン人、ネネツ人、ヌガナサン人、エベンク人、ケト人が住んできた民族管区内に建設された。私は民族的にはドルガン人で、トナカイ飼育者と猟師たちの家に生まれ育った。私の同郷人たちは私をソ連最高会議の代議員に選出した。かれらの代表として、タイミル半島の発展のもとで原住民族の利益が最大限考慮されるように監視している。

ことし、わがドルガノ・ネネツ民族管区の人民代議員ソビエトは、経済の発展のために一五〇〇万ルーブルを上回る予算を持っている。ソビエトの代議員たちは民族管区のすべての民族の代表で、これらの資金を何に支出するか共同で決定している。

現在、タイミル半島では人口一〇〇〇人当たり3人以上の医務員がいる。いろいろな学校が26あり、少数民族の子弟が国の完全な生活保障のもとに学んでいる。六〇〇人の教員が各民族語で授業をしている。モスクワ、レニングラード、イルクーツク、クラスノヤルスクの各大学には漁師、トナカイ飼養者、猟師の子弟が無料で学んでいる。

われわれの伝統的な生業の方法も大幅に変わった。狩猟の場所へ行くのにヘリコプターに乗り、方向探知機、その他いろいろな現代的装備を持って行く。極北地方で獲れた毛皮は国際オークションで高く評価されている。もう一つ、われわれの古来からの仕事、トナカイ飼養も科学的基盤に立って行われている。放牧員も新しい技術を装備し、トナカイの数は年々増えて、今や四五万頭に達した。

というわけで、タイミル半島の工業開発は多くの点でわれわれ、トナカイ飼養者と猟師たちに役立っている。

自然保護への配慮

ボリス・コレスニコフ——一つ付け加えておきたいと思うが、前期5ヵ年計画（一九七一—七五年）の期間中だけでコンビナートは環境保護のために一億ルーブル以上を支出した。今後10年間に生産工程の改善、何よりもまず、水、空気、土壌をまったく汚染しない生産のクローズド・システムを実現するために一〇億ルーブル投資する。

アヌフリー・スピリドノフ——タイミル半島の土地の一〇〇万ha以上は、国の自然保護区になっている。産業の発展も極北地方の生態学的バランスを破壊していない。パイプライン、鉄道、道路などの公共施設はすべて、トナカイの伝統的な移動コースを考慮して敷設されている。



市内のある幼稚園で



ノリリスク採鉱・冶金コンビナートには食事療法食堂もある。

▶ノリリスク市レーニン大通りでの除雪作業



II 極北の 暖かい首都ノリリスク

快適なホテルの三重のドアの内側にいると、外では氷点下50度の寒さだとは想像しにくい。しかも、吹雪が通行人をよろめかせ、きょうも、明日も、そしてあと何週間もこの都市の上に太陽が昇らないのだとは、とても考えられない。雪は、除雪しなければ、冬の9ヵ月間に2階建ての建物と同じ高さになる。しかし、もっと想像しにくいのは、こういう北極圏の冬の条件下で人々が鉱石を採掘し、金属を製練し、住宅を建設していることである。

ノリリスクは建築学的なアンサンブルの適格さ、街路と広場が広いこと、色鮮やかに着飾った通行人の流れ、商店のピカピカに磨き上げられたショーウインドー、色彩豊かな広告、自動車の長く続く列などでわれわれを驚かせた。ただ、樹木がないのが奇妙だった。永久凍土帯の地面には木は育たないのだ。ここでは建物は特別の土台の上に建てられている。約七万本のコンクリート製パイルが都市を永久凍土の地盤から持ち上げているのである。

住民たちは、われわれが文明という単語に含めているすべてのものを享受している。このツンドラの、タイミル半島の、北緯69度の、モスクワへ行くよりは北極のほうが近いという場所で、そうなのである。

一九七一年、ノリリスクを視察したカナダのトルドー首相は次のように語った。「あなたがたがここで、最も厳しい地理的、気候的条件のもと、永久凍土帯で成し遂げたことは、疑いもなく、現代の奇跡の一つ、それも他のすべての国にとって極北開発の手本になる奇跡の一つである」

永久凍土の下の宝庫

地下ほぼ一〇〇〇mの地底まで、オクチャブリスキー鉱山の導坑を降下する。これに

極北タイミル半島



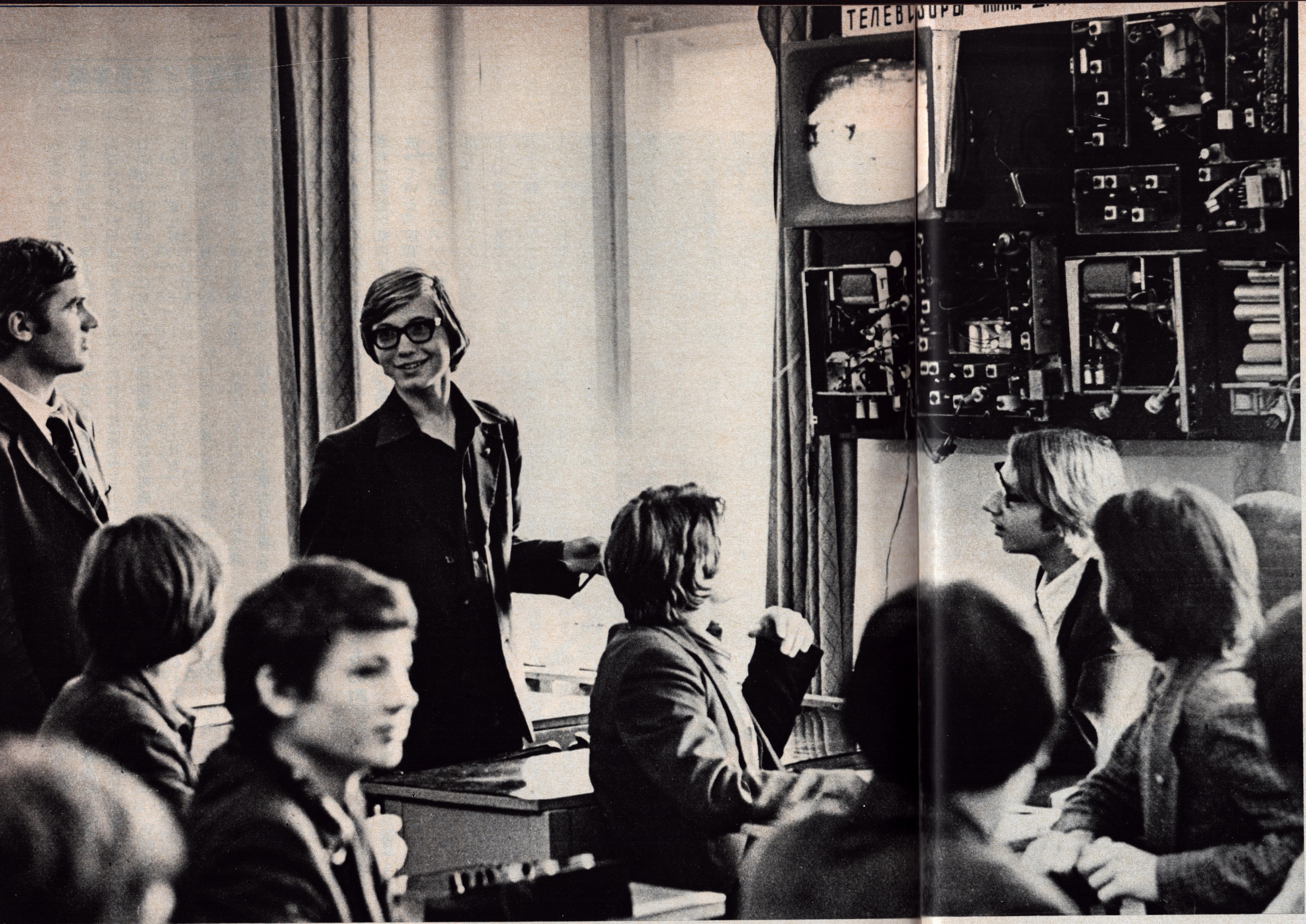
タイミル半島の野生のトナカイ。極北農業研究所の職員たちは、こうしてヘリコプターから群れの頭数を調査する。



ノリリスク採鉱・冶金コンビナートの中央化学研究室実験助手リュボーフィ・オボロンスカヤ



ノリリスクにはこういう温室が多い



学校の職業指導室で



〝アルクチカ〟スポーツパレス。フィギュアスケート教室の授業風景。

かかった時間は75秒だった。長さ9kmのトンネル（ほんの入口だけだが）は、まるで出口のない迷路のように見える。しかし、鉱山長のゲンナジー・ベーベルは大またでどんどん歩いて行く。あとについて行くのがやっとだった。

トンネルが急に右へ曲がったので、われわれは立ち止まった。掘削機のライトに照らされた岩盤が虹のような光を放っている。鉱石がきらめき、その結晶の一つ一つを照らし出す。ノリリスク・コンビナートの冶金工場では、この鉱石から銅、ニッケル、コバルト、さらに12種類の貴重な金属を生産している。

ベーベル氏は、機械から機械へとわれわれを先導した。オクチャブリスキー鉱山にはこんな掘削機が全部で一〇〇以上ある。ここには外国製のものばかりでなく、最新鋭の国産機械が集められている。

一九七四年—七五年に経済相互援助会議加盟諸国は、ノリリスクに一〇〇〇万ルーブルを超す各種設備を納入した。われわれはスウェーデン製の掘削機と鉱石運搬機、米国キャタピラー社製ブルドーザ、フランス製トラックなども目にした。ノリリスクには大規模なニッケル工場が目下建てられている。われわれは、その建設現場に向かった。

〝希望〟への道

大吹雪に包まれたアスファルト道路をヘッドライトの光が、かすかに照らしている。大型ダンプカーがやってくる。山を12km登ると、そこは目ざす工場〝ナジェージダ〟（希望という意味）の建設現場だった。刺すような強風にこごむようにして山を行く。

仕事は、文字通りわきたっている。クレーンだけが活動していなかった。このような風だと積荷がもぎ取られ、クレーンのブームが曲がる。エクスカベータが、作業場の基礎の下の穴から爆破された土を掘り出している。雪霧を溶接の光が引き裂く。銅・ニッケル精鉱をパルプ状で選鉱工場から送る4本のパイプが新設工場に延びている。工場のすべての建物が、暖かい通路で結ばれており、室内の温風は一時間に12回交換される。

子どもの町

過去30年間にノリリスクでは、約八万二〇〇〇人の子供たちが誕生した。町には55の幼稚園があり、ほとんどの就学前児童が終日ここで過ごしている。乳幼児の保育費は月一〇〇ルーブルかかるが、親の負担額は10ルーブル。残りは国家が負担している。夏、子どもたちは、黒海沿岸、ウクライナ、モスクワ郊外、シベリアの南方で過ごす。

われわれは一年前に開設された幼稚園の一つを訪問した。この幼稚園の建設に、コンビナートは一〇〇万ルーブル以上を支出した。子どもたちは寝室、食堂、遊戯室のほかにガラス屋根の四〇〇平方mの庭園をもらった。この庭の温度は、軽装で動きまわるのに最適な15度。プールもある。

北極圏の教師や小児科医たちは、多くの問題を抱えていたが、そのほとんどは解決されている。冬季の幼稚園や学校での紫外線不足は、紫外線（青）ランプと螢光燈の組み合わせで埋め合わされている。食後のデザートにはビタミンCが添加される。ノリリスクには年間を通じて南部地方から新鮮な野菜や果物が飛行機で搬入されているが、それはまず第一に幼稚園や学校の食堂に届けられる。

特別の体育システムが子どもたちの運動不足を防止している。幼児たちは、朝と昼寝後に必ず体操をする。遊戯はボール、縄、リングを使ったスポーツ競技のような性格を帯びている。各学校には二つの体育室が設けられている。

ノリリスク市民はさらに、子どもたちと自然との触れ合いが足りないという問題もあると考えている。だから、すべての幼稚園や学校はもとより、子ども喫茶店にさえ、自然コーナーが設けられている。そこでは草花が育てられ、水槽には魚が、檻にはウサギやリス、ハリネズミ、小鳥たちが飼われている。世話は、子どもたちが受け持っている。

* * *

一度は離れても、いつかは戻りたいと思う都市がある。われわれにとって、ノリリスクはそのような都市だ。住民がいかにこの都市に引きつけられているかを雄弁に物語っているのは、住民の70%が20年以上もここに住みついているという事実だろう。ノリリスク市民は活動的である。彼らは試みをいとわず、失敗を恐れない。つねに「これは面白い、勇気がいる——だから試みるのだ！」という生き生きとした考えを楽しんでいる。

III 北方女性のたくましさ


エカテリナ・スハノワ

エカテリナ・スハノワは、腰だめの一発で獣をしとめる。釣りの腕前も大したものだ。外套を脱ぐのを手伝ってくれた男性たちが、彼女の上衣の胸にちらついたレーニン賞の金メダルを見て一瞬たじろぐときなど、まんざら悪い気がしないでもない。

スハノワはノリリスク採鉱・冶金コンビナートの主任地質調査技師。21歳でカフカズの大学を卒業したとき、ノリリスクへの赴任を希望した。なぜノリリスクへ？ 説明するのはむずかしい。彼女は、北方をどれだけ知っていただろう？ 何も知ってはいなかった。ただロマンチックなあこがれとジャック・ロンドンの小説と最初のソ連の探検家たちの本が、恐らく北方知識のすべてだった。にもかかわらず、北方は彼女の経歴の最初の輝かしい一ページになったのである。

初めてノリリスクへ

一九四七年5月、彼女は初めてノリリスクへやって来た。なんとか雪をかきのけただけの空地といった感じのナジェージダ空港、乗客であふれんばかりの木造の小さな待合所——北方についてのロマンチックな夢は一度にふっ飛んだ。……寒かった。短ぐつをはいた足はびしょ濡れになり、凍えた。周囲のすべては、これまで見たこともないものばかりだった。

北極圏での地質調査という仕事は、容易ではなかった。川を渡るとき2度も溺れかかった。凍った地面の上で焚火をかこんで野宿をした。馬やトナカイに乗ることもおぼえた。重い鉱石のサンプルをリュックに詰めるために、食料を捨てたこともあった。それを背負って10kmや20km歩くことも、しばしばだった。あらゆる不便に耐えることをおぼえ、射撃や釣りもマスターした。そうしなければ、永久凍土帯で地質調査をすることなどできないからだ。

……われわれはノリリスクの彼女の広い家で話をしている。食卓にはピロシキと新鮮なキャベツが載っている。これは、北方のすべての主婦の誇りなのだ。

「もちろん、初めのうちは何もかもほっぽり出して逃げたくなるほど、ここのくらしは困難でした」とスハノワは回想する——「それを抑えたのは何だったか？ さだめし、自尊心だったでしょう。ところが、待ちに待った夏がやっと訪れたとき、私はツンドラの美しさに圧倒されました。想像してみてください——低い緑のトウヒやシラカバに囲まれた青い湖、山々の斜面の果てしもないコケの原野を。私は、だれもまだ名を付けていない川を発見し、滝の美しさに見とれました。ところで、

一日中陽が当たる北極圏の夏はまるでお祭りのようです。白夜の通りを大勢の人が散歩し、内庭では子どもたちが遊んでいます。やがて一日中陽がささない極夜がやってきたとき、初めてオーロラを見ました。そのすばらしいこと言ったら！　こうして、北方はすっかり私をとらえてしまいました。

やがてタルナフ付近の地質調査が始まりました。タルナフとはツンドラ原住民の言語で〝禁断の地〟という意味です。トナカイ飼育者もこの場所に近寄ろうともしません。昔からの言い伝えで、タルナフに足を入れると、冬には荒れ狂う吹雪に巻き込まれて助からず、夏にはとても通り抜けられぬ沼沢に吸い込まれてしまうというのです……」

レーニン賞を受ける

スハノワは金属的な光沢のある、研磨した石ころをデスクから取り出し、表面を撫でまわしながら語る——彼女が参加した地質学者のチームが極圏に入ったこの土地で、学界の権威者の推定に反して、複合金属鉱床の試掘に成功し、この鉱石はタルナフと名付けられたのである。エカテリナ・スハノワとその４人の同僚は、一九六五年４月、その功績によってレーニン賞を授与された。スハノワは話を続ける——

「私がこの土地から立ち去ることができなかった理由は、もうお分かりでしょう！　この石こそ、私がタルナフから数百㎞の地点で、一九五七年に発見したものです。これは含有量の豊富な銅・ニッケル鉱石の一片で、何百万年もの昔に氷河が運び出したものです。この石はどこから来たか？　これが、私が多年その解決に専念している主要問題です。運び出された道筋を逆にたどって、元の鉱床を追跡しなければなりませんでした。夏のあいだの野外作業が完了するとすぐ、私たちは研究室に閉じこもって計算に取り組みました。地図を作成し、鉱石の発見地点を記入し、これらの石が運び出されたルーツの地点の予測作業にとりかかりました。これまでの地質学のどの理論も役に立たず、独自なやりかたで探究するほかありませんでした」

一九六五年に富鉱のタルナフ鉱床が発見されたおかげで、ノリリスク・コンビナート用の原料鉱石は数十年間にわたって保障されたのである。

現在ではスハノワは、北方におさらばすることもできそうでもある。おまけに、レニングラードで仕事するようにと招請されてもいる。ソ連の地質学関係の雑誌には彼女の論文が定期的に発表され、彼女の教え子や後継者が次々に出ている。しかし彼女は、ノリリスクに残る決意を固めた。それはなぜか？　スハノワは語る——

「タルナフ鉱床の出現以後、コンビナートはまるで生まれ代わったようです。第一級の採鉱機械や実験設備が世界中からノリリスクに到来しています。最初は、馬、ハンマー、顕微鏡から始めたのが、今の私は、ヘリコプター、強力な掘削装置、微量分析器を使って仕事しています。私はコンビナートの地質探査主任に任命されました。このポストについた私は、鉱山労働者の運命、鉱石の質、沢山の人たちの作業にたいする責任を引き受けたのです。その私がここを立ち去れるでしょうか!?」

日々の生活

ソ連には女性の地質調査員が数知れない。女性のパイロット、船長、工場の技師長、市長もいる。実際問題としてソ連の女性はあらゆる専門職につくことが可能である。しかしながら女性の主任地質調査員はエカテリナ・スハノワただ一人だ。

朝６時30分起床。娘のアリョーナと一緒に体操し、８時には二人ともすでに仕事についている。夫は数年前、世を去った。娘は選鉱工場の化学実験室で、母親は大きくもない鉱物展示室に似た執務室で働いている。そしてエカテリナは、毎朝、企業長が特別回線の電話を使って開く会議が終わると、現場へ出かける。坑内に下り、工場をまわり、新しい採掘場をヘリコプターで視察する。

夜は何をしているのだろう？

「正直言って一番好きなのは台所でお料理を作ったり、刺繡をすることです。でも、それはテレビでアイスホッケーをやってない時のことです」。スハノワは快活に笑い、お茶をもう一杯ついでくれた。私はキャベツ入りのピロシキをほめちぎった。このスハノワが、前日人々が私に言ったような厳格な指導者であるとはどうしても思えなかった。私は彼女にそのことを話した。

「私が厳格ですって？　それはあんまりです。いいかげんな人にたいして我慢ができないというのは本当です。社会的任務に忠実なあまりたくさんの衝突が起こっています。ノリリスク自然保護協会で私は、地下資源保護の部門を指導しています。私たちは極めて豊かな鉱床を発見することを習得しました。私たちは地上であれ、地下であれ、大気中であれ、自然に損失をもたらさないよう、それを採取することを習得しなければなりません。しかし、ある人々はまだそのことを理解していない。だからこういうことになるのです…」

私たちはスハノワと、彼女の仕事について、地質学の将来についてまだ長いこと話した。彼女は地球の深部の調査に参加する夢を持っている。

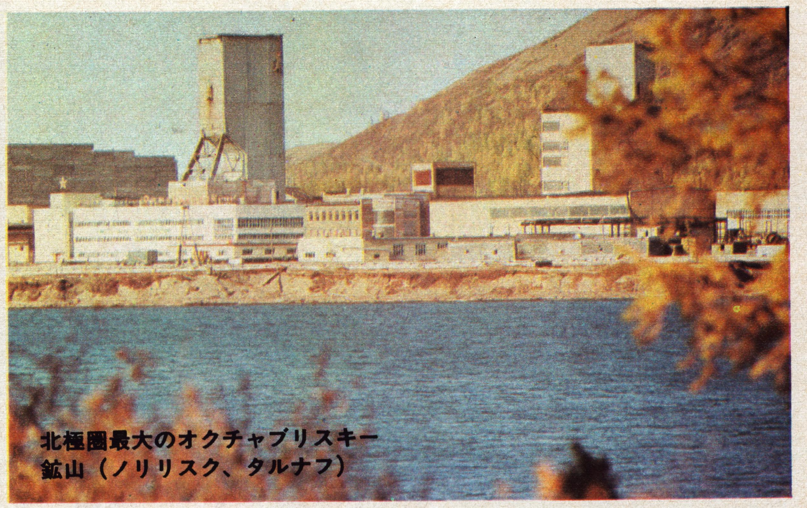
とうとうお別れする時間が来た。

「ノリリスクの記念にこの石をお持ち下さい」。スハノワは研磨されたニッケル鉱石の一片をさしだした。「光沢は大したことはないけれど、この石の中には極北の地質調査員のそっくり一世代の苦しかったけれど、幸福な運命のひとかけらが入っています」



エニセイ川の流氷の季節、７月のドゥジンカ港

極北タイミル半島



北極圏最大のオクチャブリスキー鉱山（ノリリスク、タルナフ）



オクチャブリスキー鉱山の坑内



ツンドラでの出会い



氷に閉ざされながら、12月になっても、なお活動を続ける海港ドゥジンカ

名道化師カランダーシュ

カメラ V・バラノフスキー





サーカスの同僚たちから70歳の祝福を受けるミハイル・ルミャンツェフ

約50年ものあいだ、かれは人々を笑わせている。小さな口ひげをはやした背の低い、ちょっと風変わりな男が、この半世紀、サーカスの舞台に登場している。かれの名はミハイル・ルミャンツェフ。かれはソ連の道化師カランダーシュ（〃鉛筆〃という意味）として、全世界にその名を知られている。

……サーカス芸人の古い伝統にしたがって世代から世代へとバトンは手渡され、この職業の秘訣は親から子に伝授される。だが、子どもの頃からサーカスの舞台にあこがれていたのに、両親が朝から晩まで工場で働いていた場合、その少年はどうすればよかったのか？　ミハイル・ルミャンツェフはペテルブルグ（現在のレニングラード）で仕上げ工の家庭に生まれた。幼いときからかれはだれかをその動作で表現したり、だれかのまねをして見せたりして、近所の子どもたちを笑わしていた。かれは運がよかった——一九二七年にモスクワで世界最初の国立サーカス学校が設立されたとき、ルミャンツェフはそこで学びはじめた。

だが、それはかれのあこがれの実現



いつも変わらぬパートナーたちと一緒に



労働者たちは工場を訪れたカランダーシュを温かく迎えた。

への最初の接近にすぎなかった。少年は自分の俳優としての個性を熱心に探した。かれは他人の模倣や、その芸の借用をつぎつぎやってのけ、あるときは〝ルイジー〟(赤毛の男の意味で、芸名)をやり、また〝チャーリー・チャップリン〟を演じたりした——当時、多くの人は人気絶頂のこの喜劇映画俳優の模倣を試みていた。

なにかを摂取し、なにかを棄てて、かれは伝統的な道化師の芸、おどけ、場面を磨いた。長年にわたるねばり強い努力の後にはじめて、ルミャンツェフは自分の、だれにも似ていない独自のマスクを見出したのである。それは観客に同情を誘う、たえず失敗する男ではなくて、その底ぬけの陽気さで思わず人を笑わせる楽天的な道化師である。かれは素朴で、正直者で、大胆で、聡明で、奇智に富んでいて、すばらしい。

カランダーシュの出演するサーカスはいつも超満員である。しかし、かれが出演するのはサーカスの舞台だけではない。しばしばかれは工場に行き、そこで昼休み時間、あるいは勤務後のコンサートに参加している。

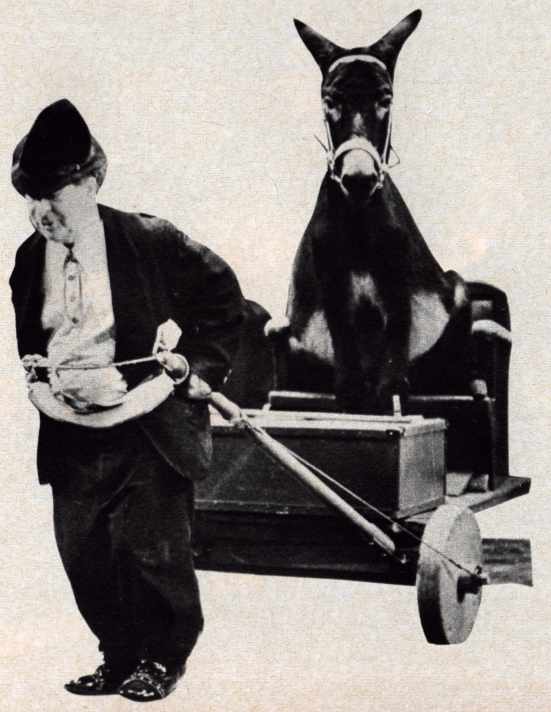
こんどもそうだった。

……レニングラードのエレクトロシーラ工場の工具職場に多くの人が集まっている。みんなカランダーシュを待っていたのだ。だが、カランダーシュはこれまでになく、ひどく感動していた。道化師として、たんにソ連だけでなく、外国の舞台(かれはイギリス、フランス、イタリア、南米、ブルガリア、フィンランド、チェコスロバキア、ポーランドでも演じている)でこれまでどれだけの観衆を前にして演じてきたか、数え上げることはむつかしい。だが、きょうは職場の特別な観衆である。一九一七年の10月革命前、当時まだ小さな工場だったまさにこの工場で、かれの父親のニコライ・ルミャンツェフが働いており、子どもの頃ミハイルは父親にお昼の弁当をもってきていたからである。あのときからの60年間に、工場は大企業に発展し、その製品——水力発電機は世界の80ヵ国に輸出されている。

カランダーシュは、かれの父といっしょに働いていた人々の孫たちの前で演じた。かれの演技はあらしのような拍手を受けた。コンサートのあと、ミハイル・ルミャンツェフに工場の名誉労働者のバッジと証明書が手渡された。この工場での出演は、生誕71歳を祝うかれの記念公演の一つであった。

……笑いの一瞬は人の命を一年延すといわれているが、道化師カランダーシュはこれまでに多くの人の命を何年延ばしたことだろう!





▶カランダーシュと人形の〝カランダーシュ〟

右下　ひょうひょうとしたカランダーシュの芸

◀エレクトロシーラ工場の労働者たちと





〝カランダーシュ〟の独壇場

〝1917年――この年は永遠に残る〟

――日本の勤労者代表団員は語る



▲モスクワ、〝ロシア〟ホテルのロビーでノーボスチ通信F・プラテ記者のインタビューを受ける長崎、斉藤、上山の三氏

一九七七年11月1日から9日まで日本の勤労者代表団が10月革命60周年祝賀のためにソ連を訪問した。代表団には上山陸三・鹿屋市労働組合評議会事務局次長、長崎広美・盛岡地区労働組合連合会青年婦人部事務局長、斉藤芳夫・日本農業組合会津若松支部書記長が加わっていた。「今日のソ連邦」編集部は三氏に旅行の印象を語ってもらった。

未来への確信に満ちたソ連国民

上山陸三氏――私たちは9日間貴国に滞在してかなり多くの印象を受けました。その主なものは11月2、3の両日、10月社会主義大革命60周年を記念してクレムリン大会宮殿で開かれた盛大な式典、11月7日の赤の広場での軍事パレードとモスクワの勤労者のデモンストレーションです。

私個人に大きな印象を与えたのは、貴国での社会主義の現実的な成功への大きな誇りと自分の事業の正しさへの確信に満ちたブレジネフ書記長の演説です。

私たちはこの誇りをソ連の人たちと共にしています。短期間の訪問ではありましたが、過去60年のソ連国民の成果を実際に見て確信することができたからです。

とくにソ連国民の成果は、私たちが注意深く参観したモスクワのソ連国民経済成果博覧会で集中した形で現れています。私は社会主義だけが経済のこのような成長のための条件をつくることができたこと、社会主義のもとでだけこのような成果をかちとることができたことを確信しています。

国民の社会主義の理想への信念なしに、幾百万のソ連勤労者の集団的な献身的労働なしに、とてもこのような成果を収めることはできないと実感しました。

貴国民は自分の将来を確信していますが、私たちはソ連の人々の顔を見ても、ソ連の人々が働き、休息しているのを見ても、単に街を散歩しているのを見てさえも、このことを確信しました。私たちはソビエト社会が平和の社会であること、平和に暮らし、平和を熱望している社会であることを確信しました。

長崎広美氏――私はソ連の人々のあいそのよさと親切さに注意を向けたいのです。10月革命60周年記念祭当日、私たちは大勢の人々を見ました。一家そろって街を散歩し、博物館や展覧会を参観し、劇場、映画館、音楽会へ急いで行くのを見ました。みなさんがうれしそうな、あいそのよい顔をしていました。

かいま見た市民生活

クレムリンで催された盛大なコンサートで私を驚かせたのは、子ども向けの曲目の多いことでした。ソ連の人々は専門のバレエ学校、舞踊学校で、さまざまなサークルで無料で学ぶことができます。子どもにたいする国の配慮、ひとりひとりの子どもの能力を伸ばそうとの志向、そのためには国家資金を惜しまないという考えを羨ましく思います。こどもの能力は社会によって評価される、社会はその能力を伸ばすのを助けるという信念こそ、すべての両親の念願ではないでしょうか？

モスクワとレニングラードで多数のデパートを見ました。ついでに言いますと、日本のデパートとちがっておそくまで開店しており、市民はゆっくりと必要な商品を選んでいます。私たちは、品位をもって必要な買い物をしている大勢のよい服装をした男女を見ました。

ソ連の人々の服装のちがいは目立ちません。みなさんが同じようによい服装をしています。大勢の人々が穏やかな、確信に満ちた顔付きをしています。すべての点に安定したものを感じます。

上山氏――私たちはソビエト社会が同じ思想をもつ人々の真に友好的な、団結した家族であるとの印象を抱きました。

ソ連における男女同権も一目瞭然としています。おびただしい働く婦人を目にしないわけにゆきません。数多くの婦人がバスやトロリーバスの運転手として、列車の車掌として、学校や大学の教員として、また医師として働いてるのを見るのは、われわれ日本人にとっては、もの珍しいことですが、同時に気持ちのよいことです。教育体系のなかでの男女同権――これは教員である私にとってとくに関心が持たれることです。

老人たちはやつれては見えないし、世間に怨みを抱くこともありません。老人たちは、社会からよく面倒を見てもらい、社会から尊敬されているという印象を与えます。

すべての人への配慮

斉藤芳夫氏――ソ連の現実を正しく理解し、評価するためには、自分の伝統的な考え方を最初から放棄し、もっと自由に考えるようになることが、われわれ日本人にとっては必要です。

私たちは、モスクワとレニングラードの快適な設備のととのった普通のホテルで暮らしました。日本には、ソ連のホテルよりもサービスがよくて、泊まり心地のよい豪華なホテルがたくさんあります。しかしこれは選ばれた一部の人のためのホテルで、ここに泊まって豪華さを楽しむことのできる日本人は少ないのです。まして自費で泊まることなどとても。ところがソ連では、すべてのホテルが大体において同じような設計のもので、市民はだれでも利用することができるのです。

「幸福をすべての人に」――これこそソビエト国家のスローガンです。これは、すべての人のことに心を配ることで、会社間の激しい競争のなかで、選ばれたものたちのために豪華な施設をつくることではありません。

ソ連に滞在中、私たちは、ソ連が、万人にたいする平等の可能性にめぐまれた、現実に同権である人々の国家である、との確信をいだくことができました。

軍事パレードを見て

上山氏――11月7日に私たちは赤の広場の軍事パレードを参観しました。ソ連の軍人たちが実際に人々に愛され、人々の間で人気のあることに、私たちは納得がいきました。ソ連の軍人の一人ひとりが、自分が自国のすべての働く人民の利益、全人民の労働によってかちとられた幸福を誓って守っているのだということを意識しています。

斉藤氏――軍隊がつねに勤労大衆と一体であること、軍隊が国民の間で評判がよいこと、軍隊と国民の間にどんな対立もないこと、国民は軍隊を自分たちの根本利益の擁護者と見ていること――この事実が私たちの共感を呼び起こさないではいません。軍事力が社会主義体制の獲得物を守るためにソ連にとって必要であること、これはけっして侵略的軍隊ではないことを私たちははっきりと知りました。

さらに私が言っておきたいことは、モスクワでもレニングラードでも、プロレタリア的連帯の感情が私たちをこの祝日のあいだ捕らえてはなさなかったことです。全世界の共産党と労働者党の代表がクレムリンの大宮殿で仲良く「インタナショナル」を歌ったとき、私たちはとくに強くこの感情をおぼえました。ソ連社会は、共産主義を建設し、またプロレタリア国際主義のことを忘れない平和の社会です。

10月革命の事業は生き続ける

上山氏――私は斉藤さんとまったく同感です。実際、祝賀集会の閉会にあたって、全員が「インタナショナル」を合唱したとき、私たち全世界の勤労者の代表が、ソビエトの同志たちとともに、単一の民族的家族になった、と私には思えました。

クレムリンでの祝典における多くの外国代表の演説のなかで、10月革命の思想は永久に生きるという考えが、一度ならず強調されました。そして私はそのなかの一つの言葉、「〝一九一七〟という数字は子孫の記憶のなかに永久に残る」という言葉をここで繰り返したいと思います。

一九一七年10月に始められた事業はいまも生きており、こんごも年ごとにますます幅広い評価を受けることでしょう。

東京バレエ団の新作『かぐや姫』

——台本も、振付も、指揮も、ソ連芸術家の手で

マリーナ・ルイクリナ

日ソ合作の舞台

日本の有名な昔ばなし『かぐや姫』がバレエ化されて、今年の4月15日に東京文化会館で初演される。このおとぎ話をもとにソ連のバレエ振付師アレクセイ・ワルラーモフが台本を書き、ミハイル・メーエロビチが作曲した。ワルラーモフは指揮者のウラジーミル・エデリマンとともに一月半ばに来日し、東京バレエ団の団員とのリハーサルを開始する。

バレエ『かぐや姫』は、ソ連と日本のバレエ芸術家の新しい合作舞台という点からして興味深い。二〇年前の日本には独自のプロのクラシック・バレエ作品がまだなかった。一方、ロシア・バレエは古くから世界的に認められ、そのダンサーたちの妙技は遠く外国にも知れ渡っていた。そして日本の多くのバレエ・ファンが日本独自の民族バレエの創作を待ち望んでいたので、スラミフィ・メッセレル、アレクセイ・ワルラーモフの二人のソ連の振付師が日本に招へいされた。一九六〇年、二人は東京のチャイコフスキー記念バレエ学校の初代教師となり、2年後にはすでにクラシックの民族バレエの最初の作品『まりも』を上演するにいたった。

ワルラーモフは当時といまを比べて次のように語っている。

「あの頃、バレリーナたちはクラシック・バレエの必要な技術をすべて身につけていたわけではなかった。あれ以来東京バレエ団のテクニックは格段に伸びた。今や団員たちはすでにハイクラスの名手に成長し、むずかしい役をマスターしている。だから新作公演はクラシック・バレエのあらゆる規準にかなうものとなろう。

今度のバレエ作品の成功は、多くの点で、われわれが踊り手の人たちと完全に相互理解ができるかどうかにかかっている。われわれの作品に日本らしさを出すためには、クラシック・バレエの全体の構成をこわさないで日本の民族舞踊の要素をその中にとりいれる必要がある。それも非常に微妙にやらなければならない。たとえば、ある場面の個々の腕の動きや、頭の特別なかしげ方やステップなどを通してやるわけだ。もちろん日本の踊り手の人たちの方が私よりはるかによくこの感じをつかむにちがいない」



きたるべきバレエ『かぐや姫』の東京公演について審議する指揮者ウラジーミル・エデリマン(左)、作曲者ミハイル・メーエロビチ(中央)、バレエ振付師アレクセイ・ワルラーモフ

バレエに移したおとぎ話

『かぐや姫』は、おとぎ話の世界をバレエにうつしかえたメルヘン・バレエで、その持ち味はある時はユーモラスな、ある時は叙情的な旋律や、いくぶんナゾめいた、神秘的なメロディーのバレエ音楽によくあらわれている。メーエロビチの曲には日本のフォークロアからじかに借りてきたものはない。それにもかかわらず、曲を聞けば、話の舞台が日本だということがすぐ分かる。それは、おそらく、作曲者の才能と、作曲者がクラシック音楽を用いて、バレエの要求しているとおり、日本国民の生活のニュアンスを再現してみせたことによるのだろう。

指揮者のウラジーミル・エデリマンは曲について次のような感想をもらしている。

「メーエロビチの作った曲は本当の傑作だと思う。私は、今度一緒に仕事をすることになった日本のオーケストラとの出会いに大きな期待を寄せている。指揮者の意図をことごとく素早く理解してくれるすばらしい楽団だ。しかしながら一抹の不安はある。バレエでは他にもましてオーケストラと指揮者とがとくに一体となることが必要だ。観客には聞こえなくても誤りが一つでもあれば、ダンサーが迷ってしまう。そのほかにバレエ・オーケストラの指揮者は、演出家でもある。私が振付師と議論して、この楽句によりマッチするために、私が必要と思うように動作を変えるよう意見を述べることもよくある。われわれの課題は音楽と舞踊との完全な調和を達成することだから」

ソユーズ26号 サリュートとドッキング



ソユーズ26号のロマネンコ船長(左)とグレチコ技師

一九七七年12月10日4時19分（モスクワ時間）、ソ連で宇宙船ソユーズ26号が打ち上げられた。乗組員は船長のユーリー・ビクトロビチ・ロマネンコ中佐と飛行技師のソ連邦英雄、ソ連宇宙飛行士ゲオルギー・ミハイロビチ・グレチコの二人。

12月11日6時2分（モスクワ時間）、ソユーズ26号は軌道ステーション・サリュート6号とドッキングし、乗組員はステーションに乗り移った。乗組員の作業計画は、宇宙空間における物理学的プロセスと現象の研究、国民経済に役立つ資料を収集するための地表と地球大気の研究、技術的実験の実施、医学・生物学的研究、ステーション搭載システム・装置類の技術的テストなどである。

ソユーズ26号の乗組員の略歴は次の通り。

ユーリー・ビクトロビチ・ロマネンコ中佐（船長）——一九四四年オレンブルグ州ブズルク地区コルツバノフスキー町に生まれ、六六年チェルニゴフ軍高等飛行学校を優秀な成績で卒業、パイロット教官として空軍勤務。六五年から共産党員。七〇年宇宙飛行士部隊に入り、ソユーズ型有人宇宙船とサリュート軌道ステーションの飛行準備訓練の全過程を修了。ソユーズ・アポロ共同飛行のさいも控えの第4班船長として準備訓練を受けた。現在、ガガーリン空軍大学の通信教育を受けている。

ゲオルギー・ミハイロビチ・グレチコ（飛行技師）——一九三一年レニングラード生まれ。五五年レニングラード機械大学を優秀な成績で卒業、設計局で宇宙機器の開発とテストに10年以上従事。六〇年入党。六六年宇宙飛行士部隊に入る。六七年工学博士候補の学位を取得。七五年ソユーズ17号の飛行技師として初の宇宙飛行。サリュート4号に移乗して1月11日から2月9日まで宇宙空間に滞在。宇宙実験成功の功によりソ連邦英雄、ソ連宇宙飛行士の称号を受けている。

国内問題

一九七七年のソ連農業

穀物農業問題担当のアナトリー・ゴリツォフ・ソ連農業次官にインタビュー
(聞き手――レフ・ボスクレセンスキー・ノーボスチ通信社評論員)

穀物農業の着実な発展

ソ連の穀物輸出が長期契約のある分だけ、それも最小限度に行われるようになってから、すでに数年が経過した。ところが、飼料用穀物の輸入は続いている。畜産業の急速な発展に関連して毎年の飼料用穀物の消費量が増大し、すでに確実に一億tのラインを超えているため、需給のやりくりは難しくなっている。

ソビエト国家は頻繁に起こる干ばつの結果を国民が感じないですむよう、あらゆる手を尽くしている。そして農業、とりわけその中心的部門である穀物農業を天候の気まぐれによる厳しい制約から脱出させる努力をしている。この努力の結果を評価するには慎重さが必要である。行き過ぎた楽観主義にせよ、その反対の誇張にせよ、あらゆる極端さは状況を歪めてしまうからだ。それでもなお私は「5ヵ年計画は危機にひんしているのですか?」という質問に正確な回答を期待しながら、ゴリツォフ次官の執務室に入った。

質問のさい、私は次のような基礎的数値をよりどころにした。すなわち、一九七六―八〇年の穀物の年平均生産高は計画によれば二億二〇〇〇万tになるはずである。一九七六年の生産高は約二億二四〇〇万t、一九七七年は一億九四〇〇万t。つまり、この2年の平均では二億九〇〇万tである。そうなると……

――穀物生産の分野では、5ヵ年計画の達成はあぶなくなっているのではありませんか?

「そんなことはないと思います。第10次5ヵ年計画での穀物生産発展のプランは、総収穫量が系統的に増加し、一九八〇年までに二億三五〇〇万t、あるいはそれ以上になるという計算によって作成されています。これはかなり厳しいプランですが、当面われわれは、言わば与えられた条件の下で働かなければなりません。

一九七七年の収穫を私は豊作と呼ぶでしょう。前年より少なかったのはよくあることなのです。穀物生産高の年による変動は過去にもあったし、われわれが農業を天候の気まぐれに厳しく左右される状態から脱出させるまではこれからもあるでしょう。大切なことは別にあります。つまり、一九七七年の収穫はあまり遠くない昔には最も恵まれた年だけに達成された数量だ、ということです。最近10年間に収穫が二億二〇〇〇万tを超えたのは2回だけ、一億九〇〇〇万tラインを超えたのも2回だけ、あとの6年は一億六〇〇〇万―一億八〇〇〇万t台で、一億四〇〇〇万tという年さえあったことを指摘しておきます。

年ごとの変動をならした次のような年平均の数値が穀物生産の安定度の向上を証明しています。一九六一―六五年――一億三〇三〇万t、一九六六―七〇年――一億六七六〇万t、一九七一―七五年――一億八一六〇万t、現行の5ヵ年計画の2年間平均で二億九〇〇万t。

これを私は安定したテンポと呼ぶでしょう」

穀物生産計画の基礎

――ソ連では、穀物生産計画の作成に際し、何を根拠とするのでしょうか?

一九七六―八〇年の年平均数字が二億二〇〇〇万tと定められ、それ以上でもそれ以下でもないのは、どうしてですか? これは正確な計算によるものか、予測なのか、それとも言わば将来に向けての希望なのか? もし計算によるものだとしたら、どんな根拠があるのですか?

「二億二〇〇〇万tは最大限可能な、そして最小限必要な目標です。

わが国の穀物需要は莫大なものです。質の高い食料品を求める住民の需要、原料にたいする工業の需要のすべてを賄うため、また備蓄を用意し、輸出の責任を果たすために、国は住民1人当たり平均1tの穀物を保有しなければなりません。これが一般に認められた基準です。言いかえれば、ソ連としては二億五五〇〇万―二億六〇〇〇万tの穀物生産が必要です。

強調したいのは、パンが問題ではないということです。一番不作だった一九七五年(一億四〇〇〇万t)でさえ、パンおよびすべての麦粉による製品にたいする国民の需要をまんべんなく、完全に賄うため、ならびに〝食用〟穀物輸出の義務を果たすために十二分の穀物をわれわれは保有していました。飼料用穀物の需給バランスは別問題で、そこではわれわれはずっと困難を味わっています。それでもソ連の専門家は5ヵ年計画の作成にあたって二億二〇〇〇万tに目標をとどめました。このような収穫で問題がすべて解決されるのではありませんが、この計画課題は現段階における収量増加のためのあらゆる可能性を考慮に入れたものです」

ゴリツォフ次官は一九七六―八〇年の総収穫量の増加見通しを書いた表を私に見せた。これは計画立案担当の学者、専門家による詳細な分析の結果であり、化学肥料、有機肥料の供給増加、新品種の導入、灌漑面積の拡大、新しい農業技術の利用、穀類のより合理的な播種が具体的に、どんな効果をもたらすか、綿密に計算されていた。

ゴリツォフ次官はその表を次のように解説した。「ここでは一つの、それも残念ながら最も重要なことを除けば、実際上あらゆる要素が考慮されています。その一つである気候的要因は量的に変化しないものと考えられています。われわれは、一九八〇年にコルホーズ、ソフホーズがどれだけの肥料を受け取るか知っていますし、また肥料の利用と新品種の導入がわれわれに何をもたらすかも知っています。天候のこと以外なら、すべて予想できます。天候条件がどうなるかは、今のところ明日のことさえ予測するのは困難です」

ソ連農業と厳しい気候条件

――それにしても世界中の農業従事者のだれ一人として干ばつから無事ではないでしょう?

「もちろんです。しかし危険の程度は国によって決して一様ではありません」

――ソ連と米国の危険の程度を比較してみて下さい。

ゴリツォフ次官は机の引き出しから書類を取り出した。それはソ連と米国の降水量別にみた耕地の分布図だった。

「ソ連と米国は最大の穀物生産国であり、しばしば比較して見られます。しかも、その対比は時として真実を歪曲して行われています。それは現実の数多くの要素を考慮に入れないからです。

米国の農民とわが国の農業従事者が働いている状況から出発しましょう。年間の平均降水量が三〇〇mm以下(これは極めて少ない!)の地域はわが国では穀物畑の17・1%を占めていますが、米国ではわずか3・6%です。三〇〇―四〇〇mm(やはり小雨量)の地域はソ連では27・6%、米国では6・2%、四〇〇―五〇〇mmの地域はソ連29・6%、米国14・9%。米国の56・2%の穀物畑で年間七〇〇mm以上の降水量がありますが、この点にこそ安定的収穫の保証があるのです! ところがわが国で同様の条件に恵まれている播種地は1%にも満たないのです。

ソ連と米国の穀物生産における天候の危険度を対比できるかどうか、それからして問題でしょう!? それにわれわれは、わが国の穀倉地帯が米国よりずっと北方に位置していることをまだ話していませんでした。たとえば、一九七八年は降水の条件は良好でしたが、穀物が標準並みに成熟するために必要な実効温度の総計ではかなり不足が見られました。一九七七年は気温は、全国的とは言えないにせよ、おおむね正常でした。そのかわり国内の多くの地域が干ばつに見舞われました」

――干ばつはどのくらいの穀物を〝奪い取り〟ましたか?

「われわれは二億一〇〇〇万t、あるいはそれよりも幾分多くをさえ収穫できたでしょう。ところが……」

――天候による〝妨害〟は具体的にどのように現れましたか?

「ソ連ヨーロッパ部の南東地域、特にポボルジエ(ボルガ中・下流地方)や南ウラルの多くの地方、カザフスタン、西シベリア、東シベリアの主要な穀倉地帯が、一九七七年は干ばつに見舞われました。作付けが始まるころの地下1mの水分保有量は30―40%、所によっては50―60%も長年の平均値を下回っていました。春まき作物の生育期には全体として、20―40%、時には50%も降水量が基準より少な目でした。取り入れの条件も非常に困難で、とりわけウラル以東はひどいものでした。9月下旬、実際、収穫期の真っ最中になってウラル地方は10cmにも及ぶ一時的積雪を見ました。西シベリアとカザフスタンは零下3度Cに達する急な冷え込みで、それに湿った雪が伴いました。西ヨーロッパや米国の農業従事者にとってこんな状況はまったく例外的なことでしょう。ソ連では穀物の1/4はウラル以東で取れますが、そこではこうした天候もまれではありません」

――だとすれば、こうした表をつくることに、どんな意味があるのですか?

私は一九七六―八〇年の穀物総収量の増加見通しに話を戻した。

「この表の意義は、最も天候の悪い場合でも最大限可能な収穫を得ることにあります。肝心なのは収穫量を〝予想する〟ことではないのです。収穫量は計画化されなければなりません。まず第一に、工業的諸要素に応じて、また農業従事者による工業的諸要素のたくみな利用によって収穫量を決める必要があります。一年一年を見れば実際の収穫量は計画した予想と一致しないでしょうが、平均値は5ヵ年計画に含まれている傾向をかなり正確に反映しています。

一九七七年について言うなら、ソ連の農業従事者は好い結果をもってこの1年を終えました」

olympics-80

オリンピックTV放送の準備

オリンピック組織委員会ラジオ・テレビ委のヘンリカス＝アリギルダス・ユシキャビチュス委員長にきく

第22回オリンピック大会のTV放送の準備状況は？

一九八〇年のモスクワ・オリンピックのテレビ取材問題に注目が集まっているのもまったく当然の話で、近年のオリンピック大会の主要な観客はTV視聴者だ。一九七二年のミュンヘン・オリンピックの開会式をテレビで見た人は世界各国で一〇億人、七六年のモントリオール大会では一五億人。モスクワ大会では一九八〇年までに全大陸をカバーする新しい通信衛星システムによって、二〇億人の視聴者が競技を見ることができる。

国家テレビ・ラジオ委員会の課題は18―20回線の国際カラーTV番組と一〇〇回線のラジオ番組を保障することにある。ミュンヘンではTV12回線、モントリオールでは8回線だったので、モスクワ大会のそれはオリンピック史上最大となる。

モスクワ・オリンピックを放送するための特別のテレビ・ラジオ放送センターが、現在のテレビセンターのあるオスタンキノに建設されている。この放送センター内にはTVスタジオが21、ラジオ・スタジオが70つくられる。

モスクワ・オリンピックではTVカメラの大部分がソ連人オペレーターの手にあるため、いくつかの国のナショナルチームはTVスクリーンからはずされる危険があると、米国の新聞は書いているが……

確かに、そういう報道はある。しかしそれは、事情を知らない人々にモスクワ・オリンピックの組織者の客観性にたいする疑惑を起こさせようとして流されたものだ。その上、このような報道を流した連中は、一九八〇年オリンピックの開催国が社会主義国であるためにTVカメラをだれが操作するかという問題が特に発生しているかのような印象をつくり出そうとしている。

これまでのオリンピックでは、外国のTV会社のカメラはその社のオペレーターが自ら操作したと言うのだ。では、事実はどうだったか？

たとえば、ミュンヘン大会ではTVカメラの大部分が西独のTV会社のオペレーターの手にあった。オリンピック・スタジアムの一五〇台のTVカメラのうち米国のABCのオペレーターが操作したのは7台にしかすぎず、他国のTV会社にかんしては、スタジアムに自社のカメラあるいはオペレーターを配置することができなかった。

米国のTV会社が組織委と特別な契約を結んだモントリオール大会では、スタジアムの一一六台のカメラのうちABCのオペレーターが操作したのは9台、カナダTVのカメラが据え付けられた競技会場40カ所のうちABCが自社のTVカメラを設置したのは6カ所にすぎない。七二年の札幌冬季オリンピックでは外国のTV会社はどこの会社も、自社のオペレーターにTVカメラを持たせることはできなかった。

モスクワ・オリンピック組織委員会、国家テレビ・ラジオ委員会と米国のTV会社NBCとの契約条項を比較のために見てみよう。それによると、米国のTV会社はモスクワ・オリンピックでは過去のどの大会よりもかなり多くのオペレーターとカメラを配置することができる。

ソ連のTVによって世界のTV会社に保障される国際画像にかんしては、競技の進行の客観的な状況とその勝者の人気等を考慮するという原則を厳守してつくられる。TV放送においていかなる差別もしない、これがわれわれの信条である。モスクワ・オリンピックのTV放送は、オリンピックの理念を真に反映する鏡となるだろう。

新人台頭のソ連水泳界

セルゲイ・ポポフ



平泳ぎのユリヤ・ボグダノワ（13歳）。欧州選手権で金メダル2個を獲得。

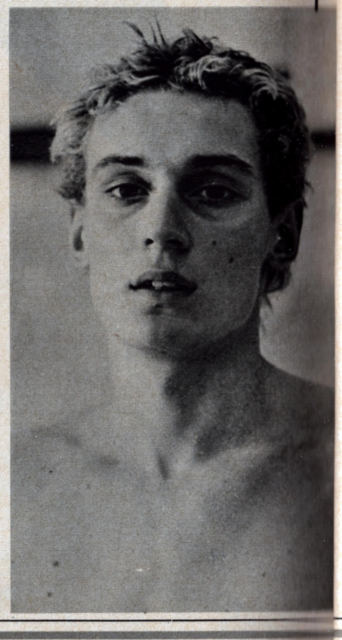
ソ連水泳チームのセルゲイ・ワイツェホフスキー監督は、「各国のモスクワ五輪水泳チームの編成は、モントリオール五輪後の一年間にすでに50%がた終わっており、ソ連のナショナルチームも例外ではない」と記者に語った。スウェーデンで開かれた欧州選手権をソ連水泳陣のモスクワ五輪へのスタートと考えるならば、選手の選抜に間違いはなかったと言える。オリンピックをまだ経験していない若手は、スウェーデンのプールで自己記録を更新しただけでなく、水泳選手としての非凡な素質を示した。ソ連の水泳陣はこの欧州選手権で金メダル6個、銀メダル7個、銅メダル4個を獲得した。

監督の考えによれば、ユリヤ・ボグダノワ、オリガ・クレワキナ、セルゲイ・ルーシン、セルゲイ・フェセンコ、ウラジーミル・サリニコフ、アルセン・ミスカロフ、アレクサンドル・シドレンコらがモスクワ五輪に出場することは、まず確実。ワイツェホフスキー監督はさらに多くの選手の名をあげると同時に、欧州の水泳界は現在、高揚の段階に入っているので（ルーマニアのようなこれまで水泳が弱かった国が欧州選手権でメダルを獲得した）、予想をあらかじめ立てることはできないと語った。ワイツェホフスキー監督は、モスクワ五輪では現在予想されている記録を上回る記録が出るものと確信している。

一方、選手たちのほうはもっと具体的に語っている。欧州選手権で2個金メダルを獲得したユリヤ・ボグダノワは平泳ぎの一〇〇mと二〇〇mの世界記録を破ると宣言している。四〇〇m個人メドレーの欧州選手権者セルゲイ・フェセンコ（自己最高4分26秒83）は、モスクワ五輪の決勝では4分16秒フラットを出すとさえ語っている。彼はこの10秒83を腕力を強めて平泳ぎと背泳で短縮するつもりでいる。世界記録樹立をねらうボグダノワのコーチ、ゲンリフ・ヤロツキーは、「彼女はいまのところ天分だけで勝っており、同世代の選手よりも練習量は少ない」と語っている。つまり、ボグダノワが世界記録を樹立するのは練習次第で、本人もこのことを自覚している。

セルゲイ・フェセンコは欧州選手権のため20日間で三一〇kmを泳ぎこんだ。

13歳のユリヤ・ボグダノワはレニングラードに住んでいる。キエフっ子のセルゲイ・フェセンコは18歳で体育大学の一年生。二人とも水泳が大好きで、モスクワ五輪への参加を夢見ている。

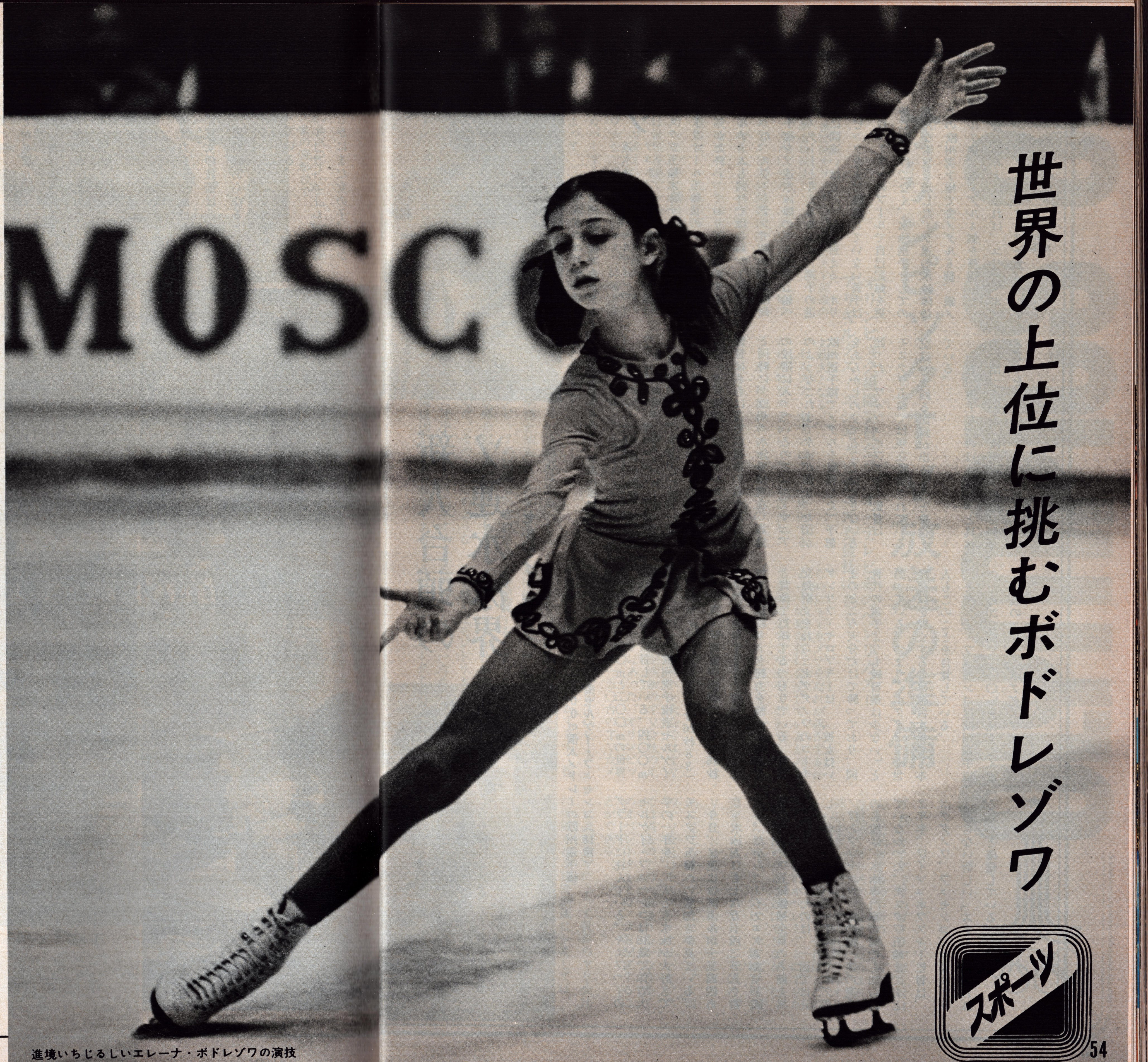


400m個人メドレーの欧州選手権者セルゲイ・フェセンコ（18歳）

今日、ソ連にはプールが一三四四あり、水泳人口も七六万一四二五人を数える。だから、ワイツェホフスキー監督がモスクワ五輪候補全員の名前を具体的に言わなかったのは、一面では正しいかも知れない。一年前までボグダノワとフェセンコ、その他一連の選手の名前は、水泳専門家の間でも知られていなかった。モスクワ五輪まであと2年半。ワイツェホフスキー監督は、ボグダノワ、フェセンコ、サリニコフに劣らない新しい「スター」が現われるものと確信している。

スポーツ

世界の上位に挑むボドレゾワ



進境いちじるしいエレーナ・ボドレゾワの演技

フィギュアスケートのファンでエレーナ・ボドレゾワの名を知らぬ人はいない。エレーナ・ボドレゾワが国際舞台にデビューしたのは一九七五年晩秋の"モスコー・ニューズ"紙主催の国際競技会。この大会で彼女は12歳の若さで見事に優勝し、そのデビューを飾った。

その後、七六年度欧州選手権で8位、同年のインスブルック冬季五輪で12位、東京での七七年度世界選手権で7位に入った。東京では彼女はショート・プログラムとフリーの合計点では2位で、とくにフリーでは一〇三・一〇点を獲得、世界チャンピオンのフラチアンと首位を分けあった。

デビュー後わずか2年でボドレゾワが世界のトップクラスに入った原因は?

もちろん、ロドニナ=ザイツェフ組を育てた名コーチのスタニスラフ・ジュークの功績は大きい。しかし、重要なことは、エレーナを囲む環境がすばらしいことである。父親はバスケットボールのコーチ、母親は体操のスポーツマスターで学校の体育教師をしており、家庭生活では、スポーツが大きな比重を占めている。

エレーナがフィギュアスケートを始めたのは5歳の時。彼女はすぐにその天分を発揮し、スタニスラフ・ジュークは彼女を自分のグループに引っ張った。彼女が10歳になった時、ジュークは彼女に全ソ・チームのメンバーに入るという目標を与えた。

ジュークは、「エレーナは11歳で3回転ジャンプを含む連続ジャンプを完全にマスターし、東京でそれを見事に披露した。彼女にコーチするのは楽しい。私は彼女の両親の理解と支持をつねに感じている」と語った。

彼女の演技構成があまりにも複雑なので、コーチにたいする非難がしばしば寄せられる。ウルトラC級の

技が多すぎるので、優美さが犠牲にされているというわけだ。

ジュークは次のように答えている。「もし、エレーナが優美性を重視するため演技の複雑さを低めたら、明日彼女は勝てるか？

大きな疑問だ！　ソ連のフィギュアスケート界は女子シングル部門で外国に立ち後れており、外国の強敵に勝つ道を大胆に追求することが必要だ。エレーナの演技の複雑性はある意味ではカケだが、このカケは絶対に正しい」

現在すでに、エレーナはトップレベルの大会で優勝を争う力を十分に持っている。彼女の技術は非常に高く、これがあらゆるコンビネーションをこなす基礎となっている。

エレーナ・ボドレゾワは、たしかにまだ女の子。しかし、フリーの演技中に5回の3回転ジャンプを入れるのはエレーナ以外の選手には困難だろう。彼女は3回転半ジャンプを近くマスターする。

3回転半ジャンプをマスターするには、日々の練習が大事だ。エレーナは今、8年生。練習は朝7時半から始業時まで、放課後またトレーニングし、それから学校の宿題をやっている。

エレーナの天分が完全に開花するのは　まだ先のこと、ただその性格がチャンピオンの域に達していることは言える。だからエレーナが七八年度世界選手権で3位以内に入ることは、十分に期待できる。「私はエレーナの成功を信じる」と、ジューク・コーチは語っている。



"今のはよかった！"



▶学校の勉強も忙しい。



▼"モスコー・ニューズ"杯大会の表彰台で



得点の発表を聴くコーチと教え子

ソ連の視点

期待過剰から冷厳な現実へ

——ソ連専門家の見た米中関係

ソ連科学アカデミー米国・カナダ研究所、歴史学博士
ウラジーミル・ルーキン

5—6年前、とくに一九七二年2月のニクソン元大統領の〝劇的な〟中国訪問の直後の時期に比べると、今日では米中関係のテーマが新聞の第一面でとりあげられることはますます稀になってきた。とはいってももちろん、資本主義世界のトップに立つ大国と、世界最大の人口をもつ国との関係が世界政治にとってもつ意義を失ったわけではない。その理由は別のところにあるようだ。つまり双方が相手に過大な期待をかけていた時期が過ぎ去り、両国の最高首脳部がそれぞれ、きびしい対決から接近へと急転回をとげるためには、個々の指導者の主観的希望だけではとてもムリだということを、はっきり思い知ったのだ。

複雑でさまざまな要素がからみ合った内外政策上の障害を乗り越え、一連の重要問題について目標と利益を一致させる必要のあることがわかってきた。だが、その後の事態の進展を見ても明らかなように、多くの障害はいまのところ克服できないままだ。ワシントンと北京の対外政策上の利害はどうかといえば、それは一連の本質的な点で相変わらずひどくくいちがっており、問題によってはまっこうから対立している。

こういった状況は、米大統領の北京訪問と上海コミュニケの調印が引き起こした〝中国ブーム〟が米国でしだいにおさまりかけた一九七三年後半に、すでにはっきりとあらわれ始めた。そして中国でも米国でも対外政策が新指導部の統制下に置かれた一九七七年になるとこの状況はとくに明白となった。往々にしてもっと本質的、長期的な要因の正しい評価を妨げるあらゆる種類の個人的事情というものが、指導部の交替によって最少限におさえられてしまったからだ。

この面で特筆しなければならないのは、七七年8月のバンス国務長官の北京訪問で、これは米国の新政府の高官と、毛沢東、周恩来のあとを継いだ中国指導部との最初の接触だったが、この訪問は米中関係になんら目立った進展をもたらさなかった。それどころか、鄧小平副総理は、この訪問は両国の関係での〝一歩後退〟であると公然と言明したのである。

現在の困難を分析するにあたって、よく引合いに出されるのは台湾問題だ。もしかしたら北京は、中国側がこの問題で譲り過ぎたと考えているのかもしれない。米中間で相互に連絡事務所を設置するにあたり、北京は事実上〝二つの中国〟方式を承認し、国内紛争にたいする米国の干渉に妥協したからである。もし北京がその大国主義的、民族主義的信条を完全に公然と放棄し、いま米国が主張している台湾問題調整方式を受入れるとしたら、実に奇妙なことになるだろう。米国方式は実質上、北京と台北との関係進展の性格とテンポ——つまり純然たる中国内部のことと見なされている問題を、米国の管理下に置くことを前提としているのだ。

米国の現政権もまた、一連のきわめて重要な問題（たとえばエネルギー計画、パナマ運河条約、南朝鮮から地上軍を引揚げるという約束のような）で議会との関係をかなり先鋭化させてしまったので、これにもう一つやっかいな問題をつけ加えるつもりはよもやあるまい。一部の観測筋は、この問題をたとえばカーターの二回目の任期（再選されるものと仮定して）まで引きのばし、時間をかせぐこともできると見ている。

ついでに言うなら、台湾問題は表面でとくに目立ってはいるが、決して米中関係の行詰まりの主要原因ではないとの見方にも、一理があるようだ。結局のところ、台湾についての中国首脳の〝強硬〟発言と、台湾問題はもはやそれほど重要ではなく、米中関係全般が順調に進展するのならその解決を先にのばしてもいいといった調子の発言とが、周期的に入れかわっているのは意味深長だ。つまり、これは原則的問題というよりはむしろ、これを利用して米側に圧力をかけ、北京の出している条件に歩み寄らせようとしているわけだ。

その条件とはどんなものか？　第一の主要条件は、現在の国際情勢にたいする北京流の解釈を受入れ、その基盤の上で共同の歩調をとることである。

中国共産党11全大会で再確認された北京流の解釈とは、簡単にいえば次のようなものだ。現代の人類は〝三つの世界〟に分けられる。〝第一世界〟はいわゆる超大国、つまりソ連と米国で、この両国は遅かれ早かれ不可避的に直接の武力衝突の道をたどる。〝第二世界〟は先進工業諸国、〝第三世界〟は中国をかしらとする発展途上諸国である、

現段階で北京指導者が最も危険な敵とみなしているのはソ連である。だからかれらは〝第二〟と〝第三〟の世界を同盟国として引き入れ、ソ連と〝決着をつける〟よう呼びかけている。この面で米国に割り当てられている役割は、まったく独特のもので、当初は米国は中国およびその同盟国（といっても今日では事実上の同盟国ではなくて——そんな国はほとんどないので——いうなれば観念上、教義上の同盟国）と連合して、ソ連の〝壊滅〟に決定的寄与を加えることになっている。さてその後に米国を待ちかまえているのは、次の犠牲者の役割だ。他のすべてのお仲間は、もう一つの〝より危険性の少ない超大国〟の征伐にとりかからねばならない。この点については、中国の首脳はまったく率直に、あからさまに発言している。

米国がこういった考え方に合流できるとしたら、まったく奇妙なことになろう。

国際緊張緩和の道に沿っての前進には、いろいろな問題や困難があるにしても、これが世界のすべての国の利益と願望をきちんとした形で考慮に入れた国際関係の構造をつくりあげるための唯一の現実的な道だということは、まったくはっきりしている。米国では、ソ連に圧力をかけるために中国に〝歩み寄る〟べきだとか、〝大量の軍事援助〟を与えろとかいう声が、折にふれてあがっているが、米国の対外政策上の利益を現実的に分析しようと心がける有力政治家が、こういった勧告に懐疑的な態度を示しているのは当然だろう。

こういった懐疑論は、中国の現指導部を逆上させずにはおかない。それに、北京の視野の限界を宇宙の限界と同一視するつもりのないすべての人々にたいする独断論的ないらだちのせいだけではない。明らかに北京では、世界が毛主義信奉者の打ち立てた道標とはまったく別の方向に動いていること、緊張緩和を基調とする国際情勢健全化のプロセスが困難を乗り越えてますます着実に道を切り開いていることを、ますますはっきり見てとっているのだ。

ソ連が緊張緩和の原則を一貫して守っているのは、広く知られている。ここでは国家間のさまざまな交流を、それがどれだけ緩和を促進するか、あるいは妨げるかという見地から評価するのがならわしである。ワシントンと北京を接近させるための措置が、ある場合にはソ連に向けたそのホコ先を隠そうともしない〝力の均衡〟論的な非公式の論拠づけを伴い、別の場合には好戦的な公式の反ソ主義を伴ってとられるとき、これはモスクワではまったくはっきりした感情を呼びおこす。この感情には、なんらかの危惧、ましてや恐怖心のはいり込む余地はない。ソ連が安全保障のために保有している政治的その他の手段は、周知の通りだ。問題は〝均衡のとれた連合〟という動機のもとにとられる行動の結果、平和と国際協力にどれほど大きな損失がもたらされるかの理解にある。ソ連の見地からすれば、ワシントンと北京の関係の発展は、緊張緩和に役立つものでなければならず、それに対抗するものであってはならない。

☆　☆　☆

トピックス

世界最高の奇術師

第12回世界奇術大会がカルロビバリ（チェコスロバキア）で開かれ、ソ連のアルチュン・アコピャンがグランプリ（クリスタル製カップ）と特別賞を獲得した。アコピャンはこれまでコロンボ、パリ、ドレスデンで開かれた大会でもグランプリを獲得している。

大会には18ヵ国６００人の奇術師が参加、その技術を競いあったが、アルチュン・アコピャンの奇術は観客を完全に魅了した。サモワールは空中を自由に舞い、真っ白なハンカチに突如として宇宙船〝ソユーズ〟と〝アポロ〟の絵が現われ、それが空中を舞う……



グランプリ奇術師A・アコピャン

“私は証言できます……”

日ソ親善協会会長、元農相　赤城 宗徳



私が初めてソ連にやってきたのは、日ソ両国の外交関係が復活した翌年の一九五七年でした。それからはほとんど毎年貴国を訪問しています。私の訪ソ旅行のコースは、モスクワをはじめ、ウクライナ、グルジア、ウズベク、カザフ、エストニアその他のソ連邦構成共和国の大都市とシベリアです。私は農業のことも、よく知っています。ソ連のコルホーズを初めて見学したのは10年以上もまえのことですが、一九七六年、一九七七年の訪ソのさいにも一度ならずコルホーズを訪問しています。

歳月は過ぎてゆきます。そして、貴国の自由で、人種差別と民族的抑圧を知らない諸民族はますますよい生活を送り、楽しい、平和な生活を送っています。これは、私の喜びとするところです。

私は証言できます――年ごとに貴国民の衣食はますますよくなり、住宅条件が改善されています。一例をあげれば衣服ですが、私が、第2次世界大戦から約10年ほど後に貴国を初訪問したときは、首都モスクワでさえ大部分の男子は兵隊服に長ぐつ姿でまちを歩いており、婦人の多くは綿入れジャケットを着ていました。パン屋の前に並んだ長い行列もよくおぼえています……

貴国は大戦でばく大な犠牲を受けたために、建設場では、特に道路の建設・修理作業では人手が不足していました。トラクターのないのが目につきましたし、自動車、建設機械も不足していました。

当時私は〝ソビエツカヤ〟ホテルに泊まりました。ホテルの周辺には木造家屋が沢山ありましたが、住宅内のへやは小さなものでした。

歳月が流れました。その期間に私は何度もソ連を訪問しました。そのとき私は何を見たでしょう。多くの事物が一変しました。男子はすでに兵隊服姿などではなく、上等の服を着ています。婦人たちも流行に後れていません。ミニあり、マキシあり、マニキュア、お化粧などもそうです。この意味では西欧の女性と見分けがつきかねるほどでした。人々はよい住宅を保障され、勤労者の賃金は年ごとに上がり、物価が安定しています。ですから人々は、生活費を増やさずに、身の回りのものにより多くのお金をかけることができるのです。政府が軽工業をますます重視するようになったので、売場には質の良い商品が多く出回っています。このような数々の成果をあげて、貴国は10月社会主義大革命60周年記念日を迎えたのです。

さらに私は証言します――多民族のソビエト国民の団結が強まり、貴国の経済は成功裏に発展しています。農林業の専門家としての私にとって、処女地開発事業であげた貴国の成功は特に感銘の深いものでした。農業機械が広範に導入されたことによってソ連の穀物、野菜、果実、綿花は著しい増産が可能になり、ソ連国民の生活をはるかに豊かなものにしています。りっぱな道路がつくられ、現代的な住宅が建設されていることによっても、人々の生活は改善されています。農村部でも老朽施設は姿を消しています。婦人の職業の面でも急速な交替が目立っています。婦人たちには楽で快適な仕事がますます多く提供されています。これはまことにすばらしいことです。

タシケント、サマルカンド、アルマアタの各市を訪問したとき、レーニンの平和と友好の政策が実生活の中に具現されていることを、この日で見て納得しました。以上のすべてを書きとめておくことは私にとってうれしいことです。

（週刊誌『ザ・ルベジョム』から転載）

堀江邑一氏に肖像画の贈り物



肖像画を前に左から堀江氏、N・ナバシナ、ポリャンスキー大使

12月14日、東京のソ連大使館でD・ポリャンスキー駐日ソ連大使から日ソ協会副会長堀江邑一氏に同氏の肖像画が贈呈された。この肖像画はソ連の有名な女流美術家N・ナバシナが制作したもの。贈呈式には作者も同席した。

この肖像画が生まれたいきさつは興味深い。N・ナバシナは語った――「日本に取材旅行に来て、どなたか、日本の社会活動家の肖像画を制作してみたいという気になりました。私の友人たち、とくにイスクラ産業の石川士郎社長は堀江さんの肖像画を描いたら、とすすめてくれました。堀江さんのお名前は、日ソの全面的関係強化のために大きな業績をあげている日ソ協会の積極的な活動家の一人として、ソ連でもよく知られています」

堀江氏は次のように語った――「ソ連の美術家から申し出があったとき、お引き受けするかどうかで大いに悩みました。なぜなら、私は肖像画に描かれるには余りにも功が少ないからです。そして、率直に言って、この肖像画がこのような温かい、盛大な贈呈式で私に贈られるとは想像もしませんでした。ナバシナさんの絵は大変気に入りました。この肖像画は私にとって最もかけがえのない贈り物となるでしょう。私はこの肖像画を自分の活動にたいする高い評価と受けとっています。日ソ関係発展の事業にさらに大きな寄与をするべく、もっと積極的に活動したいという意欲が湧いてきます」

堀江氏は感謝のしるしとして、日本でのマルクス・レーニン主義思想の研究と普及におけるパイオニアで、有名な学者・哲学者、日本の名書家の一人とされている河上肇が一九三八年に書いた「世上風塵之事」の書をN・ナバシナに贈った。

東海大学にソ連図書の寄贈

12月16日、東京千代田区の霞が関ビルで、10月革命60周年記念ソ連書籍展が開催された。これは、日本対外文化協会（対文協）とソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）との文化交流協定にもとづくものである。この展示会には、さまざまなテーマの書物一〇〇〇冊以上が陳列された。

書籍展のあと、これらすべての図書は協定にもとづいて東海大学に寄贈された。

ソ連では、書物は各家庭にしっかりと入り込んでいる。毎日平均五〇〇万冊以上の図書がソ連の印刷工場のコンベヤからでてくる。そして年間、総発行部数四六〇億冊以上、二八〇万点の図書とパンフレットが出版されている。ソ連の図書は世界の一四五の民族語で発行されている。ソ連では、この60年間に、総発行部数二〇億六四五〇万冊、七万三二九六点の図書とパンフレットが外国語から翻訳、出版された。日本の原著者の出版物は、翻訳文献の間で、それにふさわしい重要な地位を占めている。日本の作家の作品は、ソ連諸民族の25の言葉に翻訳され、34回、総発行部数一二四七万三〇〇〇部、出版された。

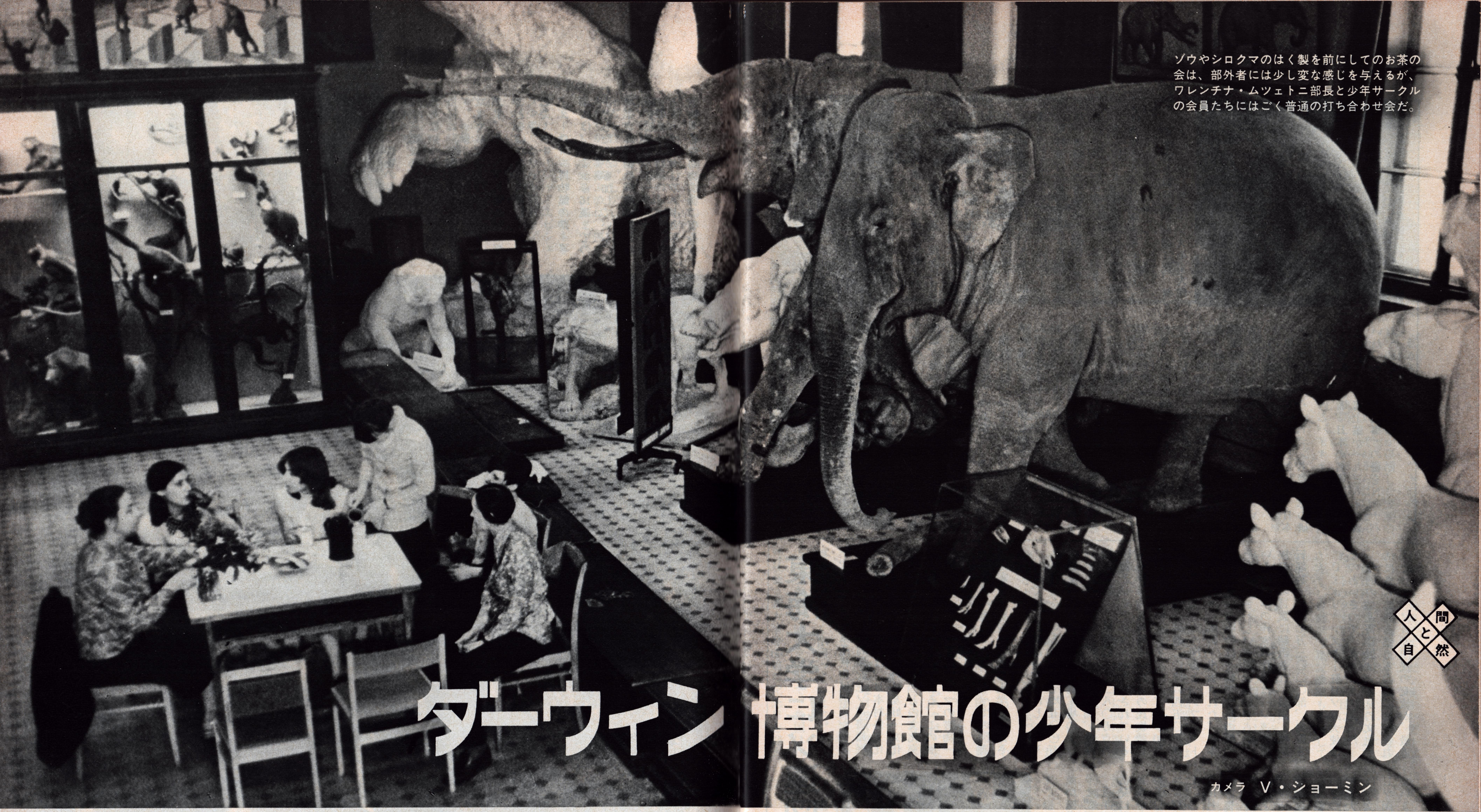
D・ポリャンスキー駐日ソ連大使は、そのあいさつで、次のように語った――「今回のソ連書籍展は、東京の文化生活にさらに花を添えるものです。それによって、ソ日両国民の交流が、最近いかに多様に発展しているかをはっきりと認識することができます」



ソ連書籍展の会場で

近年、ソ連と日本の図書交換は特に活発になっている。一九七三年には、日本からモスクワのレーニン図書館に約五〇〇〇冊の図書が寄贈され、レーニン図書館から日本の国会図書館に二七〇〇冊の図書が贈られた。一九七七年10月には、ソ連科学アカデミーが日本の東洋文庫に一五〇〇冊余りのソ連図書を寄贈し、また出版文化国際交流会の名誉会長三笠宮殿下からモスクワ大学とレニングラード大学に日本の図書が贈られた。

愛野興一郎外務政務次官は、そのあいさつの中で、こう語った――「今回、東海大学にソ連図書が寄贈されたことは、文化交流の分野で深い伝統を持つ日ソ両国民の結びつきの強化を立証しています」



ゾウやシロクマのはく製を前にしてのお茶の会は、部外者には少し変な感じを与えるが、ワレンチナ・ムツェトニ部長と少年サークルの会員たちにはごく普通の打ち合わせ会だ。

人間と自然

ダーウィン博物館の少年サークル

カメラ V・ショーミン

北極にシロクマがいて、南極にペンギンがいるのはなぜ？ インドゾウとアフリカゾウが似ていないのはなぜ？ ――こんな疑問を解くためには、かならずしも部厚い研究書をひも解く必要はない。モスクワにある国立ダーウィン博物館を説明員と一緒に見学すればよい。

ふつうのウマを見て驚く人はいないだろう。しかし、現在のウマとその遠い祖先とを自分の目で比較し、種の変化を確かめた人は少ない。「種は変化する」というのはダーウィンの進化論の主要命題である。しかし、このイギリスの天才学者以後にも科学は進歩している。だから博物館は、現代の科学の水準にもとづいて進化論について展示、宣伝することに主眼をおいている。

館内には絵、彫刻、はく製など六万四〇〇〇点の展示物があるが、これはすべて館員の手になるもの。ツルの求愛の〝ダンス〟を再現するためには、用心深いツルが〝ダンス〟するさまを動物園や野外で長時間観察しなければならなかった。水中の動物は陸にあがると色が変わるので、色が変わらないうちにすばやく写生しなければならない。だから、博物館には有能な動物画家や彫刻家が働いている。

館内で一番興味深い部門の一つは、ワレンチナ・ムツェトニ部長がひきいるはく製・復元部。彼女はテレビの動物番組を通じて、ソ連の子どもはもちろん、おとなにも顔なじみだ。

彼女がこの博物館につとめ始めてすぐに取り組んだのは、少年サークルの育成だった。子どもたちは最初、動物がどのように組み立てられるか、ワレンチナ・ムツェトニがどのようにはく製をつくるか、ただながめているだけだった。しばらくすると、つくり方を教えてほしいと言うようになった。しかし、ワレンチナ・ムツェトニは、博物館の動物の展示物や動物園の動物の写生から始めようと提案した。彼女はほかの館員の応援を求めた。彼女は学問的な相談や話し合いのた

めに動物画家を子どもたちに紹介した。

ワレンチナ・ムツェトニの指導を受けた子どもたちの作品の展示会はソ連の内外で好評を博している。しかし、作品をつくって展示することが子どもたちの主な目的ではない。ワレンチナ・ムツェトニは子どもたちを郊外につれて行く。そこでほんとうに自然を愛し、自然のすばらしさを知ること、自然を大切にし、森の生き物を助け（たとえば、餌箱や巣箱を正しくかける）、観察し、動物の足跡を調べることを教える。彼女は子どもたちにいつもこう言っている——「学校でもアパートの庭でも学ぶことはたくさんあります。そして、自分が学んだことをほかの人に話してあげなさい」

ダーウィン博物館のサークルには、4歳から16歳までの子どもたちが参加している。サークル活動は一種の連鎖反応を起こす。第一に、ほとんどすべてのサークル員が将来生物学者や動物学者になろう↙







▼サークルの会員たちはよく郊外へ出かけて、ムツェトニ部長から観察のしかた、動物の足跡の見方、森の生物の保護方法、エサ箱や巣箱のかけ方を教わる。しかし、子どもたちが一番喜ぶのは、何と言っても馬に乗ること。

左上　ヤマネコのはく製を写生したボロージャ・エピシェフ少年。どちらを採るか、決めかねている。

左下　ムツェトニ部長は少年サークルによく美術家を招いて、指導してもらったり、子どもたちの話し相手になってもらっている。きょうのお客さんは彫刻家のアレクセイ・コマロフ。

と努力するようになる。第二に、サークル員は自分の弟や妹、友だちをつれてくる。

ワレンチナ・ムツェトニの子ども相手の仕事は、博物館を訪れる子どもたちのサークル活動の指導だけではない。彼女は学校やピオネール会館、ピオネール・クラブに出かけて行く。生物好きの子どもたちの集まりにはきまって顔を出す。子どもたちはいつでも彼女を歓迎する。「自然の法則を知らなければ、自然を保護できない」——これが彼女の口ぐせだ。

ロシアのお正月料理



フィリポワ画

どの国にもお得意の料理とか、独特の伝統的な食卓の飾りつけ、料理法、といったものがありますね。民族が作り上げた料理法は、味の点でも栄養価の点でも理想的な材料の組み合わせとして、大いに私たちの参考になりますし、それぞれの民族の民族性や生活様式にぴったりと合っています。そういう料理こそ民族料理の宝であり、誇りなのです。

大みそかの夜…

ロシア料理をもっとよく知っていただくため、みなさんをお正月料理の席にご招待しましょう。お正月を取り上げるのは、新年号だから、というだけではありません。ロシアの伝統で、新年を迎える大みそかには家中が集まり、主婦はこの日のために最高のごちそうを作るのです。家で作るのであって、お店で出来合いの品を買うのではありません。元日を迎える夜には何でも思いがけない物を、着る物も、プレゼントも、もちろん料理も、というならわしなのです。

さて、みなさんはお客様、大みそかのロシア人家庭に来ています。ここでは古くからの伝統に従って夜11時には食卓を囲みます。行く年を送り、ちょうど12時にシャンパンで乾杯し、来る年を祝い合うのです。

テーブルにはロシア模様を織り込んだ真っ白い麻のクロスがかけられ、花とモミの枝を生けた花びん、お正月のシンボルであるしょく台付きのろうそくが置かれています。

前菜のかずかず

色とりどりの前菜でごちそうが始まります。まず初めに野菜料理、もちろんお手製です。酢づけのキャベツ、ピクルス、青や赤のトマト、酢づけのリンゴ…etc。作り方も味も日本の漬け物に似ています。でもロシアの野菜料理は温かい料理の前に出されますし、それだけで食べてもいいのです。作り方は、おもしを乗せた樽やプラスチックのびんに材料をつけ込み、香りをつけるために、色々な草や香料を入れます。たいていは少し塩からいけれど、とてもぴりっとして、香ばしく仕上ります。それを器に盛り付けて食卓に出します。

野菜の前菜といっしょに酢づけや塩づけのキノコを出すこともあり、家庭によっては、ゆでたキノコをひいたり細かくきざんだりして、タマネギやニンニク、香辛料と混ぜ込み、色どりに緑のものやきざみ卵を振りかけたキノコ料理が好まれます。その他の前菜としては、ロシア以外にもよく知られている冷たい魚料理があります。ロシアの珍味として有名なイクラやキャビアもそうです。イクラは冷やして供するのがふつうで、そのため氷を入れた容器の上に置いたガラスの器に盛りつけます。ゆでたジャガイモやタマネギを添えた甘塩ニシンもよく使われ、色々なソースをかけていただきます。絶対に祝いの料理に欠かせないのが魚のゼリー料理です。材料はスズキ、チョウザメ、カワカマス、カワメンタイなどで、川魚が主です。

前菜の時のお酒は辛口ワインとウォツカです。アルコールを含まない飲み物としてはライ麦から作るロシア独特のクワス、ツルコケモモやコケモモの酸味のあるジュースなどがあります。

その他、野鳥や家禽の肉を使った前菜もたくさんありますが、前菜はこれぐらいにして、温かい料理の方を見てみましょう。

ピロシキとガチョウの丸焼き

まずはかの有名なピロシキです。レバーとソバのひきわり入り、ジャガイモとタマネギ入り、肉入り、キャベツ入り、キノコ入り、魚入り、と様々です。一般的な作り方をご紹介しましょう。イースト入りのねり粉を四角い金属板の上でのばし（ねり粉の作り方には非常にたくさんの方法があります）その上に中味を置き、さらにうすくのばしたねり粉をかぶせ、中味が外へ出ないように端をつまみ、オーブンに入れます。

いつでもたいへんおいしそうに見える温かい料理をもう一つ。それはガチョウの丸焼きです。ふつうは内臓を抜いたガチョウに、オーブンに入れる前にリンゴを詰めます。家庭によっては、ライチョウやカモなどの丸焼きを好みます。

ロシアには特別なお正月料理はありません。各家庭ごとに好みに応じてメニューを決めます。

魚の前菜が少なかったとしても、色々なソースを添えていただく焼き魚があります。また、焼いた牛肉やマトンのジャガイモ、レバー添えや、キノコを詰めたジャガイモなどを器に盛りつけた料理はとても美しいものです。

お客さんはごちそうをたいらげると、席を立ってお正月のゲームや歌やダンスを始めます。元日の朝の一番楽しい遊びは、雪合戦、ソリすべりなど、戸外でくり広げられます。そのあと少しこごえて家に戻り、あつあつの濃いお茶を飲み、ろうそくを飾ったお手製のケーキやパイを食べるのです。

これでごちそうもだいたい終わりました。あとは女主人にお礼を言い、何か料理の作り方を伝授してくれるようお願いするだけです。

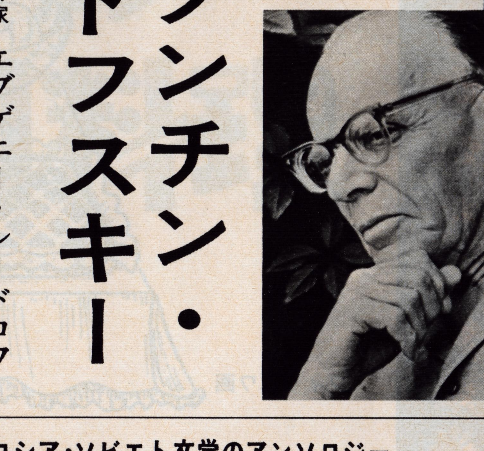
〔料理メモ〕キノコ詰めのジャガイモ　形のよいジャガイモ数個を選び、皮をむき、やわらかくなるまでゆでる。ジャガイモのまん中をたたいて、できた穴にゆでたキノコとネギのみじん切りを詰める。ジャガイモを深いフライパンに入れ、マヨネーズソースをかけ、粉チーズをふり、焼く。

一人前はジャガイモ2個、タマネギ1個、缶詰のキノコ5—6本。マヨネーズソースは、マヨネーズ大さじ2杯に小麦粉小さじ1杯と辛いチーズ大さじ2杯を加えたもの。

文学

コンスタンチン・パウストフスキー

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ



ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

コンスタンチン・パウストフスキー（一八九二―一九六八）は言葉の真の巨匠です。かれはしばしば散文における詩人と呼ばれています。もしもかれの諸作品に一貫するしんみりした叙情性、文体の音楽性、明るい哀愁を考慮に入れるならば、この呼び名は正しい。しかしパウストフスキーの読者にとってもっとも貴重なものは、この作家の全作品に活力を与えているその市民的および道徳的な立場であり、人々によりよく、より善良で、より誠実であれというかれの訴えです。なぜなら、これなしには世界の真の理解も、真理と正義の諸法則にもとづく世界の社会的改造も不可能だからです。

パウストフスキーはロマンチストとして作家活動をはじめました。かれの初期の諸作品は風と遍歴への渇望に貫かれています。年とともにパウストフスキーのスタイルは変わり、かれの芸術的世界は詩的ふんい気を失うことなく、それでいていっそう生活的に、よりリアルに、規模がより大きくなって行きました。かれは青年時代に多く旅をし、いろいろな職業をつぎつぎ試みています。かれは革命後のロシアの生活を注意ぶかく観察していたので、その生活はかれの中編小説や短編のなかに、階級的不平等から解放された地上で社会主義的諸関係を把握し、建設しつつある新しい人々の諸形象となって入っています。

パウストフスキーは幼年および青年時代をウクライナで過ごしました。かれはキエフの中学校を卒業すると、キエフ大学で、それからまたモスクワ大学で学び、早くから作品を発表しはじめました。第一次世界大戦（一九一四―一九一八）、一九一七年の10月社会主義大革命は、かれの創作に大きな影響を与えました。

長い年月に創作されたかれの諸作品は、ジャンルとテーマの上では多種多様です。かれは中編小説『カラ・ブガズ』（一九三二）の作者です。この小説ではひじょうに生産的なテーマ（荒野の開拓と工業コンビナートの建設）が、才能ゆたかなペンの力で大きな力をもった芸術作品に変じています。『コルヒーダ』（一九三四）、『森の物語』（一九四八）等の作品では祖国とその自然の詩的形象が読者のまえに立ち現れています。パウストフスキーはいくつかの自伝的な長編小説や、作家の創作の心理と技巧にかんする思索と考察をまとめた繊細な、おどろくほど率直な作品『金のバラ』（一九五六）、それからロシアの芸術家たちについての一連の中編小説を書いています。パウストフスキーの多くの短編は、とくに広く愛読されています。

かれは『遠い年月』（一九四五）のなかで、次のように書いています――「生活には善と悪が相接して横たわっていることに、わたしは気づいた。しばしば善は、虚偽と貧困と苦悩の厚みを透して光っている。……わたしはいたるところで善の諸特徴を見出そうと努めた。そしてしばしばそれを見出した。その諸特徴は、シンデレラのガラスのくつが灰色の破けた服の下から、また彼女の目のやさしい、注意ぶかい視線が通りのどこかでちらりと閃くことができたように、ふいに閃くことができたのです」

これらの言葉のうちに、世界と芸術にたいするパウストフスキーの態度が表明されています。ソビエトの作家でロマンチストのアレクサンドル・グリンや、デンマークのおとぎ話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン、ノルウェーの叙情的な作曲家エドワルド・グリーク（パウストフスキーはこの人たちについて感動的な作品を書いています）の諸形象に、かれがひじょうに親しみを感じていたことは偶然ではありません。

パウストフスキーはソビエト文学においてルポルタージュ、日記、回想記、散文詩の融合とも言っていい独特なジャンルを創造しました。かれのほとんど全作品には、作者自身が明らかに存在しています。このせいで、読者とのうち解けた会話の特別なふんい気がつくり出されているのです。作家はあたかも読者と差し向かいで対座し、一人ひとり別々に話しかけているかのようです。だからかれの声はいつも、もの静かです。そのことによってこの声は、たとえば、中部ロシアの禁猟区を描いた中編小説『メシチョーラ地方』（一九三九）の結びの文章におけるように、いっそう正しく人の心に浸透するのです――

「わたしはメシチョーラ地方を愛している。それは、この地方の魅力のすべてが即座にではなくて、ひじょうに緩慢に、しだいに明らかになってくるとはいえ、じつにすばらしいからだ。

ちょっと見たところ、それは陰うつな空のもとにある静かな、鈍重な土地である。しかしこの土地を知れば知るほど、ますます深く、ほとんど胸が痛くなるほど、人はこの平凡な土地を愛しはじめるのである。そしてもしも自分の国を防衛しなければならないような場合、心の奥底のどこかでわたしは、たとえそれがどんなに外観がみすぼらしいものであっても、そこに美を見、それを理解することをわたしに教えてくれたこの小さな土地――初恋が永久に忘れられないように、いつまでもきっと忘れられないこの愛する、ひっそりとも思いにふける森林地方をも、わたしが防衛しつつあることを感ずるであろう」

これらの言葉は、ソ連にたいするファシスト・ドイツの攻撃の2年まえ、一九三九年に書かれたものです。

戦時中（一九四一―一九四五）パウストフスキーは前線で活動していました。この時期にかれの書いたものはすべて、ファシズムとの戦いにおいて祖国が耐えぬき、そして勝利するという深い確信と、おなじ祖国愛の感情で貫かれています。かれのルポルタージュと諸短編、新聞への戦場からの通信は、ひたすら敵にたいする勝利に役立つことを目ざしていました。

パウストフスキーは、作家の才能がかれの精神的傾向と密接不離のものであることを一度ならず書いています。そしてこのことを、自分の生活と創作をもって裏づけました。かれの意義はたんにかれの創作した諸作品のなかだけでなく、作家たちのあいだで得ていた権威のなかにもあります。長年パウストフスキーはモスクワのゴーリキー記念文芸大学で学生のゼミを指導し、輝かしい作家群を養成しました。そのなかにはユーリー・カザコフ、ユーリー・ボンダレフ、ユーリー・トリフォノフ等の第一級の作家たちがいます。才能はそれぞれ異なっていても、かれらには共通したものがあります――それは、真の作家、真の芸術家には不可欠な言葉と文体にたいする注意ぶかい関心です。

〔短編〕軟風

K・パウストフスキー

山田　はじめ　訳

一日じゅう、冷たい断続的な風をまじえた雨が降っていた。モスクワの5月の初めには、こんな天気がよくある。空も、屋根の上の煙も、空気そのものも、すべてが灰色だった。アスファルトだけが、黒い川のように輝いていた。

モスクワ河岸通りで一人で暮らしている老ドクトルの大きなアパートへ、若い水兵がやって来た。一九四二年に、この水兵はセバストーポリの包囲戦で重傷を負い、後方へ送られた。ドクトルは長いこと彼の治療にあたり、その結果、二人は親しくなった。いま水兵は数日の日程で、黒海艦隊からやって来たのである。ドクトルはカヘチア産のワインを飲みに来るようにと水兵を招き、自宅に泊らせた。

夜半にラジオが、わが軍のセバストーポリ占領を報じた。祝砲は夜中の一時――モスクワ市街にまったく人けがなくなる時間に予定されていた。

祝砲を待ちながら、ドクトルと水兵は薄暗い書斎に座って、話をしていた。

「人は重傷を負ったとき」とドクトルはワインを飲み干しながら言った。「何を考えるか、興味深いね。たとえば、きみだが、あのときセバストーポリで何を考えていた？」

「何よりもまず、タバコ〝カズベク〟の箱を失くすのが心配でした」と水兵は答えた。「あなたは、もちろん、そのレッテルに雪をかむったカズベク山が描かれているのをご存知ですね。私は明け方に負傷しました。まだ夜のなごりが爽やかで、早朝の太陽が霧の中に輝いて、暑い、重苦しい一日が始まろうとしていました。私はずいぶん出血しましたが、このタバコの箱とカズベク山の雪のことを考えていました。雪の中に埋めてもらいたいと思いました。そうすれば出血が止まって、呼吸が楽になるだろうと信じていたのです。太陽はますます昇ってきました。私はこわれた垣の陰に横たわっていましたが、

その影が、刻一刻と小さくなっていきます。やがて太陽は私の足を、それから腕を焼きつけ始めました。で、私はひじょうに長いことその腕を起こして、手のひらで日光から目をさえぎるために、それを移動させていました。もはや特別な痛みは感じませんでした。ただ、たえず〝カズベク〟の箱が心配だったことはよく覚えています」

「なぜ、それを失くすのがそんなに心配だったんだね？」

「何と言ったらいいか……初めて前線へ来た者にはほとんどすべて、身につけているあらゆるものに近親者のアドレスを書いておくという、一つの馬鹿げた習慣があるのです。防毒マスクのカバーや軍用革嚢、軍帽の裏などにです。いつも、おまえは殺される、そうなったらどんな手がかりも見つからない、と思われるのです。やがて、もちろん、その通りになるのですが」

「きみはタバコの箱にだれのアドレスを書いておいた？」とドクトルは質問して、思わせぶりに目を細めた。

水兵は顔を赤らめ、何も答えなかった。

「いいだろう」ドクトルは急いで言った。「この質問は置いとこう」

このとき、呼び鈴が鳴った。ドクトルは玄関の間へ出て、ドアを開けた。若い女性の声が、あえぎながら、闇の中から言った。

「もうじき祝砲です。おたくのバルコニーから見させてもらえます？」

「もちろん、よろしいですとも！」とドクトルは答えた。「どうしたんです？ 3階から8階まで、駆けて来たんですか？ 心臓を悪くしたがっているようなものだ！ 明りを消して」とドクトルは玄関の間から水兵に言った。「そしてバルコニーに出よう。外套だけは羽織って来たまえ。まだ雨は上がっていない」

水兵は立ち上がって、明りを消した。彼は玄関の間で見知らぬ女性と挨拶を交した。闇の中で彼らの指がぶつかった。女性は手さぐりで水兵の手を探すと、それを軽く握った。

バルコニーに出た。湿った鉄の屋根の匂いと秋の匂いがしていた。早春はしばしば、秋に似ている。

「ところで」と雨に身をすぼめながらドクトルが言った。「きみの〝カズベク〟の箱はどうなった？」

「気がついたとき、箱は消えていました。きっと、看護兵が棄ててしまったんでしょう。あるいは、私に包帯をまいてくれた看護婦が。でも、変なんです……」

「何が？」

「あの人が……つまり、その箱にアドレスの書いてあった人が、私が負傷したという手紙を受け取っているのです。私自身は書かなかったのに」

「少しも変じゃないさ」とドクトルが言った。「だれかが箱を拾って、住所を見て書いた。きわめてありふれた話さ。だがきみは、それに過大な意味を持たせたがっているようだ」

「いいえ、でもなぜです？」 水兵は当惑した。「だって、私についてのその手紙は、そのときはもう必要なかったんですから」

「どうして？」

「その、つまり」と水兵はためらいながら答えた。「愛は軟風のようなものです。昼間は海から陸に吹き、夜は陸から海に吹きます。私たちは必ずしも、自分たちが望むほど期待され、待ち焦れられているわけではありません」

「だが」とドクトルは冷やかすように言った。「きみの話しぶりは、本物の詩人のようだよ」

「ああ！」と女性が叫んだ。「あなたは何て散文的な方なんでしょう、ドクトル！」

「いや、ちょっと待ってくれたまえ！」ドクトルは憤慨した。

そのとき、最初の一斉射撃が赤紫色の火となって燃え上がった。砲撃のとどろきが、屋根屋根の上を走った。何百本もの火箭（せん）が、雨をぬってしゅるしゅると、暗い空へ飛び立った。それらはさまざまな色の火で、街やクレムリンを照らし出した。火はアスファルトにも映った。

何秒かのあいだ、街は闇から浮かび上がった。高層の建物に住む人々が毎日見ているすべてのもの――クレムリン、広い橋、教会、モスクワ川右岸地区の建物が浮かび上がった。

だが、それらすべては、昼の光のもとで見るのとはまったくちがっていた。クレムリンは宙に浮いているように見え、ひじょうに軽そうに思われた。するすると走る火柱の閃きと雨に濡れた霧が、寺院やクレムリンの塔やイワン雷帝の鐘楼の鋭い線を和らげていた。堂々とした建物は重さを失った。それは、火箭の硝煙の中で光が燃え上がるのと同じように浮かび上がった。それは、内側からバラ色の火に照らされた白い石でできているように思われた。

ひとしきりの煙火が治まると、建物もまた消えた。あたかも建物自身が、目くるめく火災の源泉であったかのように。

短編小説『軟 風』

「まさに夢幻境だわ！」と女性が言った。「祝砲が一二四発でなくて、二二四発なのが残念ね」

彼女はしばらく沈黙してから、つけ加えた。

「セバストーポリ！ あそこの水がどんなに澄んでいて青かったかを覚えていらっしゃる？ 特に汽船の艫（とも）の下は。それに、爆発で折られた、枯れたアカシアの匂い」

「ということは」とドクトルが言った。「この〝覚えていらっしゃる？〟はだれにたいする質問かな？ 私はセバストーポリへ行ったことがない」

女性は何も答えなかった。

「私の方は、すべてをよく覚えていますよ」と水兵が言った。「あなたはセバストーポリにいらしたんですか？」

「あなたとほぼ同じころ」と女性は答えた。

祝砲は終わった。女性は立ち去ったが、何分かのちに戻って来て、頭痛を訴え、ドクトルから鎮痛剤をもらうと、ぎこちなく挨拶して、改めて立ち去った。

夜中に水兵は目をさまし、窓の外を見た。雨は上がっていた。雨雲の切れ目から、星が輝いていた。〈天気が変わる〉と水兵は考えた。〈だから眠れないのだ〉。彼は再びまどろみはじめた。ゆっくりした声がすぐ隣で「あそこの水がどんなに澄んでいて、青かったことか！」と言ったので、水兵は我に返り、目を開けた。もちろん、部屋の中にはだれもいなかった。



彼はテーブルの上のタバコの箱に手をのばした。それは空だった。彼は外套のポケットにまだタバコがあったことを思い出した。水兵は起き上がり、椅子の背にかかっていた部屋着を引っかけると、玄関の間に出て、明りをつけた。鏡のそばの机にのっている水兵帽の上に、ぼろぼろの〝カズベク〟の箱があった。大きな黒いシミが雪をいただいた山の絵を覆っていた。

水兵は合点がいかないまま、箱を手に取って開けた。中にタバコはなかった。だが、表のフタに、彼自身が書いた、例のアドレスが見えた。〈これが、

どうして ここに？〉と水兵は考えた。〈まさか……〉。何かに驚いて、彼は急いで明りを消し、タバコの箱を握りしめると、部屋に戻った。彼はもはや朝まで眠ることができなかった。

朝、水兵はドクトルに何も話さなかった。彼は長いことかけてヒゲをそり、それから冷たい水で顔を洗った。その手はふるえていた。〈馬鹿ばかしい！何てこった！〉と彼は考えた。

太陽に生気を与えられた霧が、モスクワの上にかかっていた。窓は明け放たれていた。そこには夜のすがすがしさが漂っていた。朝はいましがたまでの雨の湿った輝きの中で生まれかかっていた。その朝の中にはすでに、長い夏、暖かい豪雨、すっきりした日没、足もとに舞う菩提樹の花の予感があった。

水兵はなぜか、その朝はそれ以外の朝ではありえないと確信していた。モスクワではきわめて珍しい明け方の静寂は、気を静めるどころか、逆に彼の興奮を強めた。

「まったく、何てこった！」と水兵は小声で言った。とどのつまり、人生によくあるのは、こんな出来事ではないのだ。

彼は推測した——あの女性はきっとセバストーポリで看護婦をしていたのだ。そして最初に彼に包帯をして、アドレスのついたタバコの箱を見つけ、彼をこんなにも簡単に、早く忘れてしまったあの、別の女性に手紙を書いたのだ。ところがきのう、彼女は彼の話を聞き、彼のことを知って、わざとこの〝カズベク〟の箱を持ってきたのだ。

〈そうだ。だが、なぜ彼女はそれを大事にしていたんだろう？ そしてなぜ何も言わなかったんだろう？ 若さのせいだ〉と水兵は結論した。〈私だって、秘密めかしたものは何でも好きだもの。ぜひ彼女のところへ行って、礼を言わなくちゃ〉。だがそのとき彼は、彼女のドアの呼び鈴のボタンを押すためには決死の勇気が必要なこと、とても自分にはそんな決心はつかないだろうことを悟った。

一時間後、水兵はドクトルの家を出た。彼は、ゆっくりゆっくり階段をおりた。3階で彼は立ち止まった。踊り場に面して、ドアが三つあった。

水兵は、あの女性がどのフラットに住んでいて、何という名前かをドクトルに聞かなくてよかったと思った。それに、聞くのは気まずかった。いまとなっては、立てつづけにすべてのドアの呼び鈴を鳴らして、名も知らぬ人をたずねるわけにはいかない！

そのとき水兵は、あるドアの向こうにあのなじみの声を聞きつけた。「一時間したら戻って来るわ、マーシャ」と、その声は言った。「よく眠れなかったの。ここはとても蒸し暑いんですもの。川の方へ行ってくるわ」

水兵は、いますぐ、この瞬間、彼女が出て来て、踊り場にいる彼を見つけるだろう、ということを理解した。彼はそのドアに駆け寄り、胸を早鐘のように鳴らしながら、呼び鈴を押した。

ドアはすぐさま開いた。そこには昨夜の女性が立っていた。ドアの内側から風が吹いてきた。風は女性の軽やかな衣服をそよがせ、髪をなびかせた。

水兵は黙っていた。女性は出て来ると、ドアを閉め、彼の手を取って言った。

「行きましょう。送って行くわ」

「あなたにお礼を言おうと思って」と水兵は言った。「あなたは私を救ってくれた……セバストーポリで。そして、あのアドレスに手紙を送った……」

「そして、送らない方がよかった？」

女性はほほえんだ。「私のこと、おこっていらっしゃらない？」

彼らは階段をおりて行った。女性は水兵の手を放し、髪を直した。

「なぜ？」と水兵はきいた。「すべてがとても奇妙だ。そしてすばらしい……」

女性は立ち止まり、彼の目をのぞき込んだ。

「興奮してはいけないわ」と彼女は静かに言った。「たとえ私がどんなことを言っても。私の方があなたに劣らず興奮しているんです」

彼らは河岸通りへ出て、鋳鉄の欄干のそばで立ち止まった。朝もやを通して、クレムリンの壁がバラ色に見えていた。

女性は手で目を覆い、黙っていた。水兵は彼女の手を見ながら、この指に、恐らく自分の血がついたことだろうと考えていた。この細い、愛らしい指に。

女性は目から手を離さずに言った。

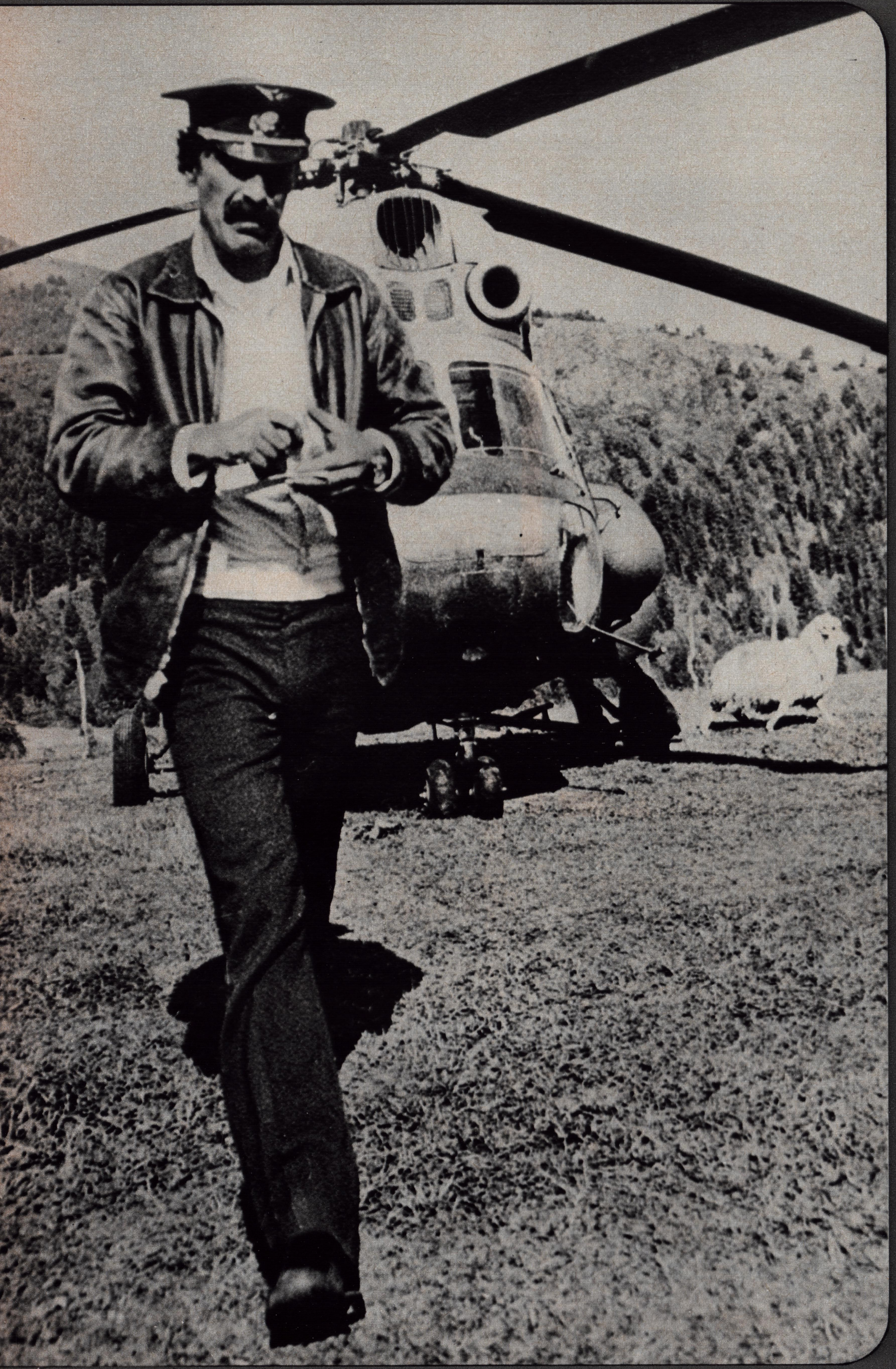
「これが、こんなふうに……いちどきに起こるなんて、思ってもいなかったわ。セバストーポリのあとで、再びあなたにお会いするなんてことも」

水兵は彼女の手を取った。彼は通行人のことなど気にもかけずに、その小さな、頼もしい手に接吻した。通行人は何も気づかないかのように、脇を通りすぎて行った。ただ遠く通りすぎてから、そっと振り返って、当惑したようにほほえむのだった。

（さし絵　イーゴリ・ブリオフ）

映画

心の純粋さを描いた『ミミノ』



映画の主人公バリコ・ミザンダリ（グルジアの名優ブバ・キカビーゼが演じている）は、再び生まれ故郷の村へ戻ってきた。

第10回モスクワ国際映画祭（一九七七年）で、初めて喜劇映画がソ連の代表作品として出品された。この作品『ミミノ』（モスフィルム製作）の監督ゲオルギー・ダネリヤはこれについて次のように語っている。

「別に驚くことではありません。ユーモアは（これは悲しく、真剣なものもあります）、さまざまな生活の機微の中に含まれています。私はこの作品で、観客をただ笑わせるだけではなく、生活の中の人間の位置について、この位置の複雑で根気強い探求について、祖国にたいする感情、祖国にたいする責務について語りかけたかったのです…」

ゲオルギー・ダネリヤ（一九三〇年生まれ）は、にぎやかさと憂い、楽しさと悲しみをしっかりと編みあげた多くの有名な作品で知られている。彼の諸作品は、人間の性格の正確な心理的描写、明確な比喩性、ソフトな、時として少しもの悲しいユーモアが特徴になっている。善良さに満ちた、非常に明るい気分の作品である『ミミノ』にも、同じタッチが感じられる。

シナリオの担当者の一人は、ダネリヤの昔からのパートナー、レバス・ガブリアゼである。過去に一緒の仕事で結ばれた有能な人々の創造的な仕事は、今度も成果を上げた。『ミミノ』は、独特な、精彩に富んだ映画だが、何よりも特筆されるのはその深い人間味である。

〝ミミノ〟というのは、グルジア語で〝たか〟のこと。と同時に、この映画の主人公——飛行士バリコ・ミザンダリのあだ名で、彼のコールサインになっている。グルジア人の名優ワフタング・キカビーゼがこの役を演じている。



飛行場長とペンキ職人は、バリコが乳牛を自分の小さなヘリコプターの機体に縛りつけて輸送するのを見て、びっくり。



村の女教師ラーリは、愛するバリコが村へ戻ってくるのを辛抱強く待つ。

ヘリコプターは、カフカズの山脈で他の世界から切り離され、相互に隔てられているグルジアの山村生活には欠かせない備品だ。主人公バリコは郵便、羊、食料品、乗客、新しい映画フィルムを運んでいる。ここでは皆が彼を知っており、彼もみんなを知っている。この、山の中に埋ずもれたような村に彼の家があり、家族——祖父、妹とその息子の小学生がいる。さらに控えめな小学校の女教師ラーリもいるが、これは先の事。

ところが、世間にはこれとは違った、不可思議な生活もある。どこかで大都市がざわついていて、

超音速旅客機が飛び、魅惑的な女性たちがほほえんでいる。ある日のことバリコは、モスクワに行き、ジェット機の飛行士になろうと決心する。いろいろな事件の後にバリコはついに目的を達する。彼は最新鋭のジェット機で国際線を飛び、首都の騒がしい生活にひたっている。彼の前にはすばらしい未来が広がっている。すばらしいスチュワーデスたちがほほえみかけ、ちゃんとした乗客たちが尊敬の念を込めて彼を見る。彼は夢見たことすべてを達成した。そして突然彼は、見知らぬ人との出会いと短い会話が動機で、すべてをほうりなげて、静かな自分の村に、血でつながり、彼を必要とする人々のもとへ、この世で何よりも彼が必要とする人々のもとへ帰る……

ゲオルギー・ダネリヤは語る。

「この映画の出来事すべては、今日、まったく現実の場所で起こっていることですが、私としては、バリコの物語を半分架空のおとぎ話として理解してもらいたいのです。私は自分のすべての作品の中で、空想と現実の中間、物語と実話の中間を探ろうと努めてきました。スクリーンではすべてが納得



運転手のハチキャンはだれにでも非常に親切だ。ホテルで知り合うとすぐ、バリコの忠実な親友になる。

運転手のハチキャン（アルメニアの俳優フルンジク・ムクルトチャン演）



のゆくものでなければならず、観客は主人公たちや事件の現実性を信じなければなりません。しかし、その登場人物や事件というのはフィクションであり、おとぎ話的なものなのです」

しかし、ダネリヤの作品ではフィクションがいつでも、やはり真実に見えてくる。自己の探求、人生の多くのやり直しのあとの自己への回帰、真実の〝自分〟の発見——これは、すべての芸術家によってさまざまに語られる〝永遠の〟テーマではないのか。ゲオルギー・ダネリヤも、それを自分の流儀で語ったのだ——時の経過によっても変化をこうむらない特質、自分自身にたいする忠実さをただ強調したにすぎない特質を主人公に与えて。それは人にたいする信頼、行為の無欲さ、心のおうようさ、自己と他人の人間的体面にたいする思いやりだ。

観客や審査員たちがこの映画を温かく迎えたのは、恐らくそのためだろう。そしてこの作品が第10回モスクワ国際映画祭で劇映画部門の金賞を受けたのも、まさにそのために違いない。

（マリーナ・ハチャトゥーロワ）

О РУССКИХ ФАМИЛИЯХ

Пе́рвые фами́лии на Руси́ появи́лись в XVI-XVII века́х. Име́ть фами́лию могли́ то́лько дворя́не. Остальна́я ма́сса населе́ния Росси́и ста́ла получа́ть фами́лии то́лько по́сле отме́ны крепостно́го пра́ва в 1861 году́.

Что же мы зна́ем о ру́сских фами́лиях? Ско́лько их? Как они́ возни́кли? — с э́тими вопро́сами корреспонде́нт газе́ты "Изве́стия" обрати́лся к В. Нико́нову, сотру́днику Институ́та этногра́фии АН СССР:

— Моя́ ли́чная картоте́ка насчи́тывает свы́ше 100 ты́сяч наибо́лее употреби́тельных ру́сских фами́лий. Настоя́щее же число́ ру́сских фами́лий поря́дка одного́ миллио́на.

Есть фами́лии, кото́рые но́сят бо́лее 1 миллио́на челове́к, наприме́р Ива́но́вы (в одно́й Москве́ их 90 ты́сяч!), Васи́льевы, Попо́вы. Распространены́ фами́лии Кузнецо́вы, Смирно́вы, Ковалёвы. Есть и уника́льные фами́лии, принадлежа́щие всего́ не́скольким се́мьям.

Расшифрова́ть ту и́ли ину́ю фами́лию, то есть найти́ сло́во, от кото́рого образова́лась фами́лия, — зада́ча чрезвыча́йно тру́дная, а поро́й да́же невозмо́жная. Это объясня́ется тем, что значе́ния мно́гих слов, употребля́вшихся в дре́вней Руси́, уте́ряны и тре́буется дли́тельный нау́чный по́иск э́того сло́ва.

Соста́вить по́лный слова́рь ру́сских фами́лий невозмо́жно. Из свое́й картоте́ки мне пришло́сь отобра́ть 50 ты́сяч наибо́лее распространённых фами́лий, кото́рые тем не ме́нее займу́т объём трёх то́лстых томо́в большо́го форма́та. Составле́ние словаря́ потре́бует не́сколько лет. Пе́рвый том "Словаря́ ру́сских фами́лий" я наде́юсь зако́нчить в 1978 году́. В него́ войду́т ру́сские фами́лии, начина́ющиеся на пе́рвые четы́ре бу́квы ру́сского алфави́та, от А до Д.

本号のテキストは，新しい試みとして，次号，つまり1978年第2号に掲載されるものの中から選びました。したがって，このテキストの訳文は，第2号に掲載される予定です。やさしい内容ですから，初級修了程度の方も，辞書を片手に取り組んで下さい。

【注】

☆1行目： ... в XVI-XVII веках の数字の読み方は，в шестна́дцатом-семна́дцатом веках。

☆1行目： Иметь фамилию могли только дворяне〈姓を持つことができたのは貴族だけだった〉。дворя́не の単数形は дворяни́н。

☆2行目： Остальная масса населения ...〈住民の残りの多くは，他の多くの住民は…〉

☆2行目： ... только после отмены крепостного права в 1861 году〈…1861年の農奴制度廃止後にようやく…〉。数字は (в) тысяча восьмисот шестьдеся́т пе́рвом (году) と読む。

☆4行目： с этими вопросами корреспондент ... обратился к В. Никонову ...〈記者は V・ニコノフにこういう質問をした〉。Институт этнографии АН СССР は，ソ連科学アカデミー民族学研究所。

☆7行目： Моя личная картотека насчитывает ...〈私の個人的なカード目録では，最もよく使われるロシア人の姓だけで10万以上を数える〉。ここの100は ста（生格）と読む。

☆8行目： Настоящее же число ...〈ロシア人の姓の実際の数となれば，100万のオーダー（位）になる〉。

☆9行目： в одной Москве их 90 тысяч！〈モスクワだけで9万人もいる〉。Иванов には，Ива́нов と Ивано́в の姓がある。

☆13行目： Это объясняется тем, что ...〈その理由は…だから〉

☆17行目： тем не менее〈にもかかわらず，それでも〉

ロシア建築への関心は、ソ連の修復専門家たちの成功に負うところが大きい。幾世紀ものあいだに、木や石やレンガで建てられた幾百の建築物は、いわば第2の誕生を迎え、以前には不明確だった面がはっきりし、名工たちのそれぞれの流派の特徴が明らかにされた。多くの手法の謎が解かれ、幾世代もの人々に特徴的だった芸術形象の世界が明らかにされた。

ソ連では一五万もの記念碑的、考古学的、建築史学的建築物が国家に保護されている。

一九七七年3月に、歴史的、文化的記念物の保護と利用にかんする法律が発効し、この分野における国家機関、社会団体、すべての国民の課題と、定められた法の違反にたいする責任が規定された。一九七七年10月7日に採択された新ソ連憲法には、歴史的記念物その他の文化財の保護が、国民の責務であり義務であるとうたわれている。

才能豊かな先人たちによって作られたものの多くが、時間によって滅び、ファシスト・ドイツの侵攻（一九四一―一九四五）を含む幾たびかの戦争によって破壊された。わが国のもっとも貴重な文化財都市ノブゴロドとプスコフは、廃墟の中から立ち上がらなければならなかった。すぐれた学者や修復専門家が、その復興に取り組んだ。すぐれた美術史家で芸術アカデミー会員のイーゴリ・グラバリ（一八七一―一九六〇）は、長年にわたってこの仕事の先頭に立ち、記念物保存専門調査・実施協議会を指導した。ソ連の修復専門家は、キエフとノブゴロドのソフィア寺院（11世紀）、スモレンスクのピョートル教会とパーベル教会（12世紀）、ウクライナのチェルニゴフのパラスケワ・ピャートニツァ教会（11世紀）など、世界的に有名な寺院をはじめとするユニークな記念建築物を少なからず復原した。

今日、レニングラードの建築アンサンブルは、かつてと同じように美しい。すばらしい宮殿や公園で名高いレニングラードの、絵のように美しい郊外では、修復作業が完了しつつある。

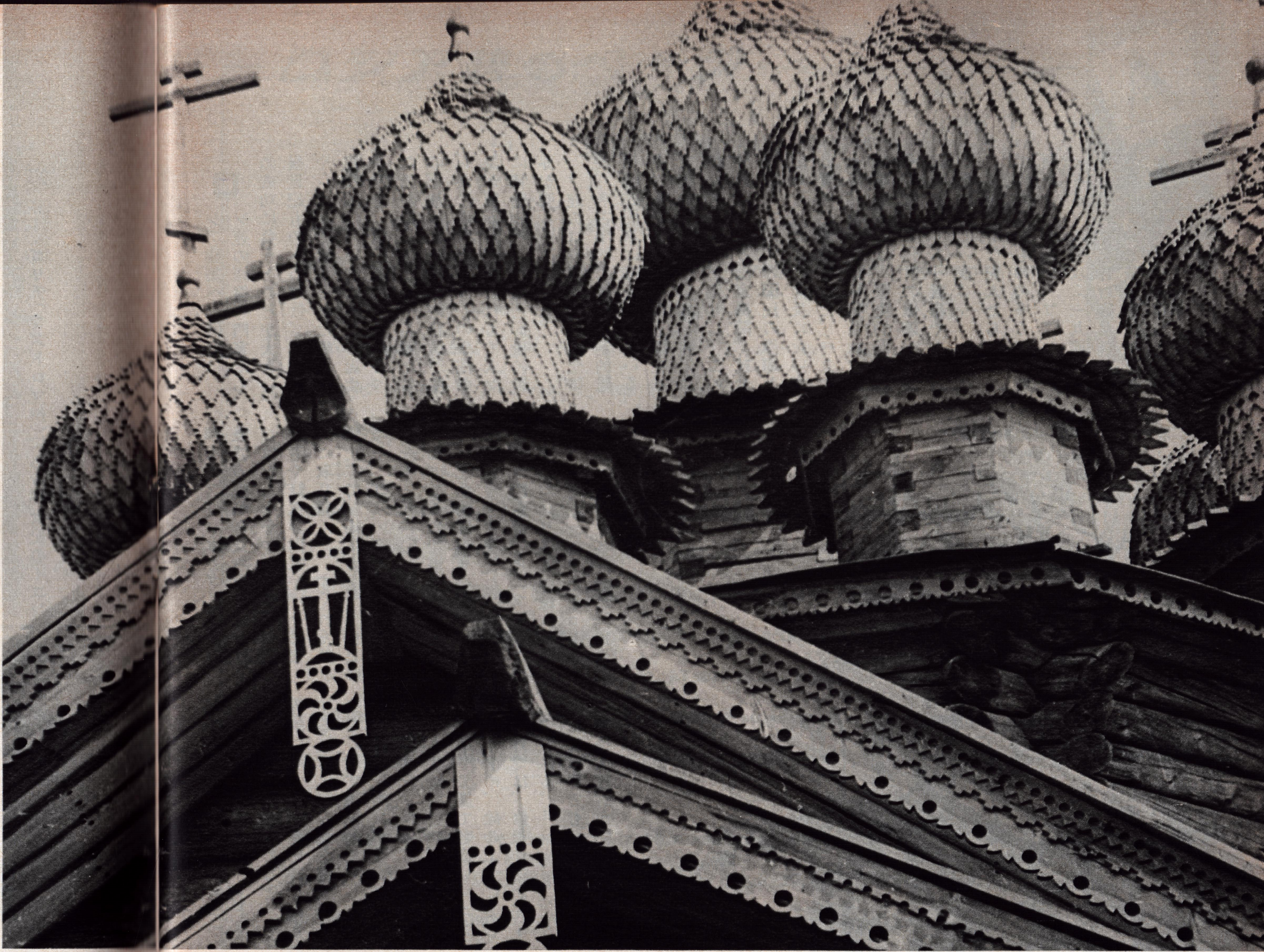
モスクワでも、歴史的な建築物や文化財が注意深く保護

ネルリ（ウラジーミル州）のポクロフ教会（12世紀）



文化と芸術

よみがえる古建築物



▲キジ(カレリア自治共和国)のプレオブラジェンスカヤ教会(18世紀)



ソロベツキー修道院（白海のソロベツキー島、16世紀）

され、たえず修復されている。そのために、先の第9次5カ年計画期中（一九七一—一九七五）に五〇〇〇万ルーブル以上が支出され、クレムリンの建物や赤の広場、ボリショイ劇場、ラージン通りにある16—19世紀の一連の建築物、モスクワ大学の古い建物その他、約一七〇の歴史的建築物が修復された。

18—19世紀の建築記念物である多くの大邸宅が修復され、旧居記念館オスタンキノ、クスコボ、コロメンスコエやプーシキン記念造形芸術博物館、ノボジェビチー修道院その他でも、修復作業が行われている。モスクワの修復作業にたいする支出総額は、現行の第10次5カ年計画（一九七六—一九八〇）では九〇〇〇万ルーブルに達する。モスクワの北にある古都ウラジーミル、スーズダリ、ロストフその他でも修復作業が行われた。

全ソ的な保存・修復作業はソ連文化省、各共和国レベルでのそれは各共和国文化省の管轄である。これらの国家機関と並んで、民間の保存団体



リズポロジェンスキー修道院の門(スーズダリ、17世紀後半)



ウラジーミルのドミトロフ寺院の壁面（12世紀）



ガリチ（コストロマ州）にある15世紀のイコン

プスコフのブラゴベシチェーニエ教会（16世紀）





ソリカムスク（ペルミ州）のトロイツカヤ教会の玄関口（17世紀）



オチョール（ペルミ州）にある古い建物の扉のノッカー

も全国で活躍しており、たとえば、新建設計画が歴史的な建築物や景観に害を及ぼすような場合、その計画をやめさせることができるなど、いちじるしい権限が付与されている。自然保護に指定された地域でのあらゆる建設作業は、これらの団体の同意をえなければならない。

民衆の文化の遺産は、未来の幾世代の人々のために今後も保存されつづけるだろう。

（カメラ　V・デシャトニコフ）

今日のソ連邦
一九七八年1月1日号
編集・発行
ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3－9－13
郵便番号141、電話03・447・3583）
印刷
大日本印刷株式会社